

せんからね」

蒿菴もそれに賛成した。處が、叔父の永岳はその手段を危険がつた。

「浪士の方では何處迄も嫌疑を掛けてゐるのだから、縦んば三條公の書面を見せたつて中々承知すまい。それに掲示まで出した後では時期が遅い。求めてそんな危険に近寄るより、矢つ張り何としてとも隠れ了せる方法を考へるに越した事はない。何も一生涯隠れてゐなくても、そのうちには分る時もあるし、世間も何とかなつて行くだらう、決して短慮を起す場合ではない」

さう云はれると爲恭も矢張り自から危険に飛び込んで行くことは躊躇された。月心も永岳の意見に賛成したので、自訴は止めることにしたが、併し此の儘何の運動も辯解もせず捨て置くことは残念だから、爲恭の代りに蒿菴が薩長の本陣へ行つて、釋明を試みて來ることになつた。そこで翌日蒿菴は本國寺の薩州と大徳寺の長州の本營へ出頭して此の問題を訴へ出た處が、兩方とも「浪士の事は預り知る處に非ず」と云つて勿ね付けられて終つた。愈々取り付く島が無くなつた。それから越えて、八月幾日には公けから爲恭に對して「不<sub>ニ</sub>容易<sub>一</sub>風聞有<sub>レ</sub>之辭官落飾可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>願候」との御沙汰書が下つた。

爲恭が隠れてゐた處は、神光院の庫裡の二階座敷だつた。當時は此の界限には家も無く、寺の前は兩側一面の竹藪で、幽邃でもあるし、隠れ家としては屈竟だつた。後に此の寺へは蓮月尼も來て、其の茶所を借りて住んで、土ひねりをしながら晩年を送つた。

爲恭は、公けの御沙汰を蒙つてゐる身分だし、且つ人目を避ける便宜もあるので、剃髮して名も心蓮と改

めることにした。佛門は己れの歸依する處だが、かういふ機會から髪を卸さうとは夢にも考へなかつたことだから、彼は圓くなつた頭を撫で、悲しいやうな可笑しいやうな異様な感慨を抱いた。

「此の姿を見せたら綾衣は何と云ふだらう」

綾衣は、獨り住ひは危険なので、親類の多備前守の家へ行つて厄介になつてゐた。彼は妻には其の後一度も會つてゐなかつた。綾衣の事が心懸りでもあれば戀しくもあつた。さうかうするうち一と月あまり経つた。其の頃になると爲恭は何となく此處も危険に思はれ出して來た。餘りに都近いのが心配だつた。そこで爲恭はいろ／＼考へた結果、紀州の粉河寺へ行つて願海上人を頼らうと決心した。願海上人は安政三年の夏頃叡山を出て、其の後は梅尾山石雲院に住つたり、江戸東叡山勸善院で暮したりしてゐたが、安政五年の五月から紀州粉河寺學頭御池坊の住職となつて赴任してゐた。爲恭は近年上人とは謂れもなく疎遠になつてゐた。それには多少事情もあつて、上人の方でも或ひは感情を害してゐるかも知れない。然し乍ら何と云つても爲恭の第一の知己は願海だ。目下の境遇を訴へて頼つて行つたなら眞逆悪くは計らふまいと彼は考へた。さう決ると一日も早く紀州へ行きたくなつて、其の事を月心に相談すると、月心も一應は引留めたけれ共、事實此處が萬全の場所であるとは云はれないので結局本人の意に任せるの外はなかつた。丁度其の頃神光院へ、大阪から身が修らなくて家を了つて道心坊に來てゐた心城といふ者があつたが、至極惡氣の無い人間で丁度いゝから、それを伴僧に仕立つて行くことにした。

爲恭は、曾て大和内山永久寺の貫主亮珍僧正から、行成卿の書卷を譲られて秘藏してゐた。僧正は鷹司家



の出の人だつた。其の書卷は「三寶感應要錄卷之下」で紙背には古消息の文字が出てゐる。鷹司家相傳の寶だつた。或時爲恭は此の書卷を見せて貰つたが、其の筆法のいかにも神妙の極致を現はしてゐるのを見て何とも云はれぬ感に打たれ、僧正に向つて、平常練筆の軌範にしたいからと云つて頻りに之れを懇望した。流石に僧正も之ればかりは容易に許す様子もなかつたが、餘り熱心に爲恭が望むので到頭拒み兼ねて與へることになつた。其の時僧正は自ら筆を執つて之れに跋文を書いた。其の跋文には、此の書卷を爲恭に授くる事を記し、然し乍ら「相傳之舊物、予獨非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>寬<sub>レ</sub>放<sub>レ</sub>之、雖<sub>レ</sub>一紙半葉乃至一行一字、不可<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>于他人、爲<sub>レ</sub>一生涯軌則、敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>賴<sub>レ</sub>兒孫之守護、必仰<sub>レ</sub>和光之擁護、爲<sub>レ</sub>永世不朽之計<sub>レ</sub>矣、此一事、隨<sub>レ</sub>順<sub>レ</sub>予<sub>レ</sub>寸志、而謹而勿<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>約<sub>レ</sub>」と書いてある。爲恭が此の書卷をばどれ程大切に持つてゐたかといふことは想像するに難くない。然し、現在の彼は、何時何處で殺されるかも知らない身の上である。かうなつては最早之れを自分の身に付けてゐるわけにはいかない。「敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>賴<sub>レ</sub>兒孫之守護<sub>レ</sub>」況んや彼には頼む可き兒孫も無い。そこで爲恭は月心の子の智滿に此の書卷を預けて行くことにした。

九月の初め頃、爲恭は月心父子の笠や法衣を借り受けて、夜の十二時頃に神光院を落ちて行つた。

爲恭は生涯に二度と此の寺の土を踏むことは出来なかつた。爲恭が殺されたことが知れると、月心親子はいたく悲んで「強いて此處へ留めて置いたなら恠んな事にはならなかつたかも知れない」と云つて嘆いて、彼の位牌を祀つて厚く後世を弔つた。

月心は出家後は畫を廢する心だつたが、吳山時代を知つてゐる人々が神光院へも押し掛けて來て無理に頼むので斷り切れず折々繪筆を把つたが大概は佛畫を描いて與へ、特に山水花鳥を望む者には必ず三幅對を作つて中幅に佛畫を描いた。明治三年七十一歳で示寂した。

## 智滿律師

兄の覺樹律師は安政六年に河内星田の愛染律院に迎へられ八年間其處の住職となつてゐたが、再び神光院に還つて弟智滿和上と共に住つて一生を送つた。智滿も兄に劣らぬ高僧として名高かつた。智滿は天性書を能くし、十二三歳の時尊勝陀羅尼の版本を模寫したのが後に願海上人の手に入つて、茲に有名な願海の尊勝陀羅尼頒布の機縁を作つた話は後に説くことにする。智滿は父が延命地藏に祈願して壽を延したゞけあつて四五歳の頃から醒さい物は一切食はず、父母が魚類を食ふのを見ると「大惡々々」と叫んだといふ位だ。

智滿が爲恭から預けられた行成卿書卷は、爲恭の歿後、彼の姉で樂人多備前守に縁付いてゐるたつの手に還した其の時智滿はたつに向つて「若し之れを他人に賣るやうな場合には其の前に必ずわしに知らせて貰ひ度い」と云つて置いた。處がたつの一家は維新後に東京へ越して行つて其の儘消息が絶えてしまつた。智滿は折々爲恭の事を偲ぶにつけ例の書卷の事を思ひ出して遺憾に考へてゐると、明治十四年の頃、鳩居堂の主人が行成卿の書卷を手に入れたと云つて持つて來たのを見ると思ひ掛けないそれだつた。智滿は卷を繙かず悵然として亡友の上に想ひを走らせた。そして鳩居堂の請に任せてそれに跋文を書き、爲恭と自分との關係と書卷の來歴とを記した。

## (五) 粉河寺



爲恭は人目を避けつゝ旅を続け、幾日か目には首尾よく紀州の粉河寺に行き着くことが出来た。それは文久二年九月九日の事だ。御池坊に願海上人を訪ねて、何年振かの對面をした。今度の一件は、願海の方でも大凡の事は風聞で承知してゐた。願海ほどよく爲恭を理解してゐる者は無かつた。爲恭に取つてはほんたうに唯一最後の知己だ。だから一方から云へば、爲恭の缺點に就いても願海ほどよく知り抜いてる者は居ない筈だ。殊に近年爲恭が得意の境涯に進めば進む程其の缺點は大きくなつて行つた。二人の交情が段々と疎くなつて行つたのも詰り原因は其處にあつた。然し、現在の爲恭は全く別人の境地に置かれてゐるのだ。謂はば、雨に打たれて飛ぶ力を失つて軒端へ舞ひ込んで來た鳥のやうなものだ。あの派手好きな爲恭が古びた柿色の法衣を着て悄然として遣つて來たのを見たゞけで、それまで願海の心にあつた幾許かのわだかまりは跡方無く消えてしまつた。

「よく尋ねて來て呉れましたね。しかし、此處へ來ればもう大丈夫だから御安心なされるがよい」

願海は莞爾として云つた。爲恭が佐幕黨に左袒したとかしないとか、そんな問題は願海に取つてはどうでもよかつた。どつちにしても、恁んな結果に陥つた爲恭を救つて遣ればよいのだ。

爲恭は漸く安住の場所を得て大に生色を恢復した。大體和歌山は親藩の中でも隨一の佐幕派だから、浪士の足も容易に此處迄は踏み込めない。其の上願海といふ大きな保護者が附いてゐる以上は先づ絶對の安全地帯だ。爲恭は毎日願海と學問上の談を交したり、書院へ引つ籠つて久し振りで繪筆を樂しんだりして日を暮した。

願海は當時並ぶ者なき天台の學僧だつた。彼は文政六年九月十五日上州高崎に生れ、姓は源氏、新羅三郎の後裔である。十一歳初めて武州金鑽寺堯猷遮梨に隨侍し、十三四歳の時武州忍城に至り芳川波山に就いて儒書を學んだ。十六歳の時南部の恐山に登つて、感ずる處があつて菩提心を起し、江戸へ出て、當時東叡山養壽院に居た範海僧都を拜して剃髮受戒し、慈範と名付けた。天保九年秋八月彼岸の中日だつた。其の時彼は書物の端に「たらちめはかゝれとしてしもむば玉の我黒髪はなですやありけむ」とかの僧正遍照が述懐の和歌を書き付けた。其の時の氣持としては矢張りそれより外はなかつた。二十一歳の時まで願海は師の側に居たが、研究心の旺盛な彼は其の上一つ處に留まつては居られなかつた。或日彼は師の坊と學問上の論議をした揚句に、師の頭をボカリと一つ殴り付けたのを置き土産として、

尋ね入る道のおくにぞなほまよふのりのころをたれしるや人

と口吟み乍ら東叡山を出奔して、比叡山に上つた。幾許もなく彼の名は稀世の秀才として一山に知られた。弘化三年から願海は發念して回峰行を始めた。これは叡山の八百八峰を千日間同行して一天四海の泰平を念ずるので容易ならぬ難行苦行だ。だから之れを企てる者すら減多に無いが、古來此の行を爲し遂げた者はまことに尠なかつた。そして到頭嘉永六年の夏に至つて、稀なる久旱大暑を冒して愈々最後の百日の回峰を修行し、遂に千日の大行を満したのだつた。前後八年を費した。爾來「大行滿願海」と號した。先例に依つて此の事が叡聞に達し、十一月十七日願海は參内して天顏を拜し、玉體を加持し奉り、猶十八日には皇子祐宮サチノ(明治帝)の御惱安快を祈り、法驗立ち處に顯はれて御平癒あらせられた。



願海は「尊勝陀羅尼」の最も熱心なる信奉者だつた。彼は此の宣布を以て終身の事業とし、陀羅尼の刷物を回峰修業中人に施すこと七萬枚に及んだ。此の尊勝陀羅尼といふのは、昔天竺の善住天子が、帝釋天の御告で、今より七度畜生惡道の身を受くべき惡業のあることを知つて、祇園精舎に詣で、釋迦牟尼世尊の救ひを求めた。其の時世尊は此の陀羅尼を説き、善住天子をして受持せしめた。天子は世尊の教を受持して、一切の罪障を消滅し、壽命を延べ福裕を得たといふのである。かういふ緣由のある神器であるから、唐土に於ても其の功德に浴せんとして盛んに受持され讀誦された。日本では弘法大師が之れを將來して、自ら手寫して一枚の板に刻したのを奈良東大寺の二月堂に納めて置いた。處が寛文年間回祿に罹つた際、此の板は脊や周りは一面に焦げてしまつたにもかゝらず、梵字の處だけは儼然として残つてゐた。この陀羅尼の印出は容易に許されなかつたが、西加茂神光院の智滿がまだ河内高井田長榮寺の雜僧であつた十三歳の時、大師の様に倣ふて一通を模寫し、園城寺法明院の敬彦上人が之れを刻して普く諸人に施した。願海は別に小さくした物を作つて刻して人に施したのだ。此の陀羅尼の圖様は爲恭が畫いた。

併し、かやうの印施には限りがあるのを願海は遺憾に思つて、嘉永六年冬には北野の聖廟に尊勝陀羅尼の碑を建てた。この碑の題額は天台座主尊融親王、漢字は東坊城前大納言聰長、梵字は魚山普覺院前主宗淵法印、模様は岡田爲恭の筆である。建碑の時爲恭は笏を奉納し願文を捧げた。非常に盛大なる式だつた。爲恭はその建碑式當日の有様を大奉書に細密に描き留めて置いた。此の碑は明治維新の際東寺に移され、今も境内に存在してゐる。

願海と爲恭の交際は何時から始つたか明確には分らないが、嘉永六年の秋九月願海が上梓した「勸發菩提心文」の挿繪を爲恭が畫き、翌七年正月は願海の爲めに「尊勝曼陀羅」を描いてゐる。其の後願海の著書には必ず爲恭が挿繪を描き、又彼の残した多くの佛畫は殆んど大概願海の爲めに描いたものだ。挿繪で有名なのは「尊勝陀羅尼明驗錄」で、構圖が大膽自由で彼の傑作の一つと云はれてゐる。爲恭は同時に願海に師事して、佛道の教を受け、殊に尊勝陀羅尼の信奉者と成つた。此の二人は同年で願海の方が僅か二日前に生れただけだつた。願海は宗教家としてのみならず非常に多趣味な人で、詩文和歌俳句何れも行り、有ゆる書を讀み、多方面に智識を備へてゐた。さういふ人だから特に爲恭と親密になつたのだ。宗内では羅溪慈本に師事してゐた。慈本は「天台霞標」「實神道記」等の著述を以て夙に教界に知られてゐる天台の學匠だが、願海が「尊勝陀羅尼明驗錄」を上梓した際には、其の卷末に「賜欄衫記」を物して寄せたほか、彼の著書には爲恭の畫と並んで必ず慈本の筆蹟が載つてゐる。

願海は餘程爲恭の篤學に推服してゐたと見えて、或る寫本の卷尾に數十枚に亘つて爲恭の事を書いてゐるが、其の中に次のやうな事を云つてゐる。

本所衆菅原爲恭朝臣ハ余カ畏友ナリ、狩野永泰其同氏ノ子ナリ、幼ニシテ家君ニ隨テ其ノ家風ヲ學ビ、十二ニシテ省語スルコトアリテ、家風ヲ背キ大和繪ニ志ス、巨勢氏及信實朝臣鳥羽僧正ハソノ所レ爲レ師ナリ、日夜孳々トシテ分陰猶惜、覃思刻苦十數年コ、ニオイテ其技大ニ進ミ、畫風尤古雅淳朴、自ラ一家ノ風趣アリ、實ニ一代ノ大手筆ニシテ、信實朝臣以來ノ壹人ト云テ可ナリ、自ラ大和繪中與ヲ以テ爲ニ己任、



宜哉朝臣風俗ノ日ニ月ニカハリユキ、下キヨリ下ニツキ賤シキヨリ賤シキニツクヲ熟視シテ、深ク憂レ之、コ、ニオイテ類從古圖ノ志アリ、其ノ趣キハ圖書集成ノモヨウニヨリ、大日本國裏今現存スル處ノモノ、古畫、古繪卷、古文書等ニヨリ、殿舎、官宅、日用調度具ハ申スマデモナク、上ハ皇帝ヨリ下百姓ニ至ルマデ、皆悉ク模レ之、分レ部收メ類ヲ以テ集メ一ニ集之、盡未來際大道ヲシテ隱沒セザラシメンコトヲ、若シ臣ガ思フ如ク編集セバ、凡ソ一萬卷ヲ成スベシト、物談ノ次、話ノコ、ニ及バザルハナシ、其ノ深志思ベシ、願クハ大有力ノ人アリテ、爲ニ朝臣一其ノ力ヲ助ケ、爲ニ將來ニ大願ヲシテ成就セシメンコトヲ、至禱至禱、朝臣先<sup>レ</sup>是古圖管見抄五十卷ヲ著ス、古畫及ビ繪卷等ヲ見ルニ隨テ、其ノ設色墨痕筆勢等ヲ考究シ、運用精神ノアル所ヲ鑒定シ、其體裁ヲ評論ス、其所論ミナ至當ノ論ナリ、付スルニ僞畫考一卷ヲ以テス、實ニ人間一部ノ書ト云ベシ、此ノ道ニ志サス人ハ壹部ヲ收藏申シタキモノナリ、此ノ朝臣余ト同甲ナリ、余願海九月十五日生ル、朝臣ハ十七日ニ生ル、余朝臣ニオケル二日ノ兄ト云ベシ、然ルニ朝臣ハ早ク頭角ヲ顯ハシ、赤幟ヲ一方ニタチ一大家ヲナス、其ノ勢如<sup>ニ</sup>神龍一シカリ、爾ルニ余ハ未ダ居所スラ一定ノ所モナシ、古人ノ所謂ユル駑馬ハ未ダシ、蟾蜍位ノモノナリ、造物者果シテ私アルカ、シカラズハ何スレゾカクマデ高下スラン、實に怪々奇々。

爲恭以て瞑す可きだ。願海の碩學高德は一山に重きを爲してゐたにも拘はらず、安政三年の夏頃事情があつて叡山を轉退することになつた。それは彼が餘りに獨自性に富み、妥協性を缺いてゐた事が原因だつた。當時の宗教家は多く因襲や傳統に囚はれ乍ら自らそれに満足してゐる有様だつたが、獨り彼だけは全く時流

に媚びず、獨行の境地を開拓しつゝ勇往邁進教化運動に努力するので、それが反つて一部の人々の排斥する處となつたのは止むを得無きことだつた。それから一年ばかり梅尾石雲院に寓し、又東叡山に還つて、頭を毆つて出奔した師の坊に詫びを入れて、勸善院に足を停めてゐるうち、紀州粉河寺學頭御池坊の住職に推薦されて此處へ來た事は前段にも記して置いた。御池坊は當時表向寺領三百石と云はれてゐたが、その實は三分の一位の收入しか無かつた。其の上願海自身も流浪の揚句で赤貧洗ふが如き有様だつたので、輪王寺門跡への禮祿等も、翌年の春知行米を賣り拂つて漸う濟ませた程だつた。それにしても「如<sup>ニ</sup>浮雲<sup>ニ</sup>似<sup>ニ</sup>水萍<sup>ニ</sup>」と自身で云つてゐた願海に取つては、とにかく落ち付き場所を得た事は喜ばしい事だつた。

紀州へ來てからも願海は尊勝陀羅尼の宣布に全力を捧げてゐた。そこへ爲恭が亡命して來たのだ。

### (六) 梅雨袂別

粉河寺へ來てから、爲恭は大概毎日繪筆に親しんで暮した。此處へ來てからはさう隠れてばかりはゐなかつたので、自然に爲恭が來てゐることが分つて、方々から繪を頼まれた。彼は願海の爲めに數點の力作をした。其の中でも主なる物は「佛頂尊勝陀羅尼神明佛陀降臨曼荼羅」一幅「山越阿彌陀如來圖」一幅と、それから願海上人一代記の繪卷物二卷等がある。此の繪卷は「忘形見」と題し、每畫題詞を羅溪慈本が書いてある。是等は皆彼の生涯の傑作となつて残つた。

翌年の冬、願海は爲恭のために山後の墓地に壽碣を建てた。其の碑の裏面に左の文を刻した。



式部大夫兼近江守菅原朝臣爲恭者、平安城人、京極黃門之裔也、出冒岡田姓、稱菅原、朝臣之爲人、雄偉超群、氣宇冲邈、性好畫事、慕皇國上古畫風、以復古爲己任、精勵刻苦數十年于茲、於是其道大進、世稱日本古様之畫之中興、以余見之、其功業不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>神禹之下<sub>一</sub>、文久二年秋八月、依<sub>レ</sub>病辭<sub>レ</sub>官、而入<sub>二</sub>佛道<sub>一</sub>、稱<sub>三</sub>卍字坊<sub>一</sub>、吉祥乃建立壽碣於粉河寺御池坊三昧側、以結<sub>三</sub>淨因<sub>一</sub>、云<sub>二</sub>心蓮坊光阿<sub>一</sub>者、大行滿願海所<sub>レ</sub>授之名也。

文久三季癸亥正月二十五日預修供養畢

御池坊現住願海大悲誌

其の頃高野の高僧古岳上人が、粉河寺からは餘り遠くない藤ノ川に閑居してゐたので、爲恭は願海の紹介で古岳とも親しく交際を始め、折り<sub>レ</sub>は藤ノ川へ行つて泊つて來たりするほどになつた。爲恭は古岳上人の肖像を描いたが、之れも非常な傑作だつた。其の他彼は倉田何庵等とも交はつた。何庵は佐藤一齋の門人で、紀州竈山神社の宮司を勤め、頗る慷慨の士だつた。岡崎邦輔等は何庵の門人だ。

かうして爲恭は周圍に知己を得、悠々として畫事三昧に耽つてゐれば、別段一身上の不安とは無かつたけれども、矢張り其の生活は物足りなかつた。日を経るに従つて、京都に残してある妻の事が強く思ひ出されて、夜半の寢覺めに枕を濡すことも屢々だつた。佛道に入つたとは云へ愛慾の念は容易に斷てなかつた。妻を呼び寄せる事は勿論叶はない事だが、手紙の便りすらも容易でなかつた。それでも妻からは折り<sub>レ</sub>消息があつた。彼女は近來は、多備前守の家にはかりも居られないので、八幡の實家へ歸つたりあちこちして

ゐた。良人に別れた後の堪へ難い淋しさを彼女は書信の度びに訴へて來た。それを讀むと爲恭は一層悲しみを唆られて、二十そこ<sub>レ</sub>の若者かなんぞのやうな物狂ほしい戀心を妻に寄せた。

「俺は何時になつたら綾衣に會へるだらう……？」

それは幾ら考へて見ても當ての付かぬ考へだつた。此の儘生涯妻にも會はれず、懐かしい京都の土も踏むことは出来ないかも知れない——と思ふと、全く世の中に生甲斐は無いやうに感じた。

爲恭の其の惱みに同情して呉れる者は願海の外には無かつた。

「私は何故かう凡夫なのでせう。お上人を見ると羨ましく存じます」

と爲恭が云ふと、願海が、

「わしぢやとて、心蓮さんのやうに美しい奥方があつたら、坊主になつては居られぬわさ」

と云つて、呵々大笑した。

御池坊へ出入してゐる平兵衛と云ふ者があつたが此の平兵衛は至つて正直者だつたから、これを京都へ使ひに遣つて、種々の用事を辨じさせたりした。此の平兵衛については面白い話がある。それは或日平兵衛が常の如くお寺へ遣つて來ると、お上人が出て來て、

「平兵衛、用があるから裏へ廻れ」

と云ふので、仰せの儘裏の縁先へ廻ると、

「手桶へ水を汲んで來い」



と云ふ。少し變だなど思ひながら水を汲んで来たところが、いきなり頭から水をぶっかけられた。冬の事で寒さに顫へ乍ら家へ歸つて衣類を着替へて、再び御池坊へ遣つて来ると、今度は座敷へ通れとの仰せだから、又候水をぶっかけられるのかと思つて恐る／＼奥へ通つて、願海上人の居る座敷の縁先へ出ると、

「先刻水を掛けた代りに其方に天狗を見せて遣らう。俺の袖の下から裏の山を見よ」

と云ふので、恐々袖の下から山を眺めると、高い／＼松の木の枝に、果して天狗が掛つてゐた。

「どうぢや、天狗が見えたか」

「へい、見えました。どうも有難うございます」

それ以来平兵衛は益々お上人を崇拜してやまないのだつた。さういふ奇瑞を現はした事は他にも澤山あつた。これは願海歿後の事だが、粉河の醫師の近藤元真といふ者は深く願海に歸依してゐた。或る年名手川の橋で遽かの洪水に押流されて今にも溺れ死なうとした時、ふと眼の前に願海阿闍梨の姿が現はれ、手を曳いて淺瀬に導いて呉れた。元真が氣が付いて、「上人はもうおかくれになつたではありませんか」と云ふと、其の姿が消えてしまつたが、洵に不思議な事だつたと彼は遇ふ人毎に話して居た。

晩年信州へ巡錫した時、或酒造家の井水が涸れて出なくなつたのを、願海に祈禱をして貰つた處が、昔よりもよい水が滾々として湧き出るやうになつたので、酒家では態々、願海が隠棲してゐた江州葛川迄お禮に來た。其の信州巡錫の時、善光寺に足を留めてゐたが、或時願海は羊羹を食べたくなつたが金の持ち合せが無い。彼は恐ろしく羊羹が好きだつた。そこで止むを得ず白無垢の綸子を持ち出して之れを持つて羊羹を買

つて来るやうにと云ひ付けた。彼の者は早速承知して羊羹を求めて來たが、到底持ち切れないので荷車に積んで引き込んで來た。これには上人も驚いたが、負けない氣なので黙つて受取つてうんと食べた。それ以來胃を悪くして決して羊羹の事は云はなんだ。

文久三年になつても京都の形勢は依然として險惡だつた。其の八月には、主上大和行幸仰出され、討幕の議を決せられた。然るに、此の議は實際になつて挫折した。もと／＼大和行幸は主上の御本意でなく、三條實美を盟主とする朝臣及び長藩の急進派の劃策になれる事で、主上は寧ろ之れを好まされなかつたので、八月十七日俄かに御中止を仰出され、同時に會薩二藩に命が下つて禁闕を守護せしめることとなり、翌十八日には、大和行幸の首謀者たる諸公卿を罰せられることになつた。茲に於て尊攘派は再び失脚して朝政は公武合體派の支配に歸しやがて七卿の都落となつた。然し乍らそれが爲めに長藩及び尊攘派の浪士の憤激は極度に達し、藤本鐵石等の大和五條の擧兵を手初めに、但馬や常野の各所に亂が起り、天下は麻の如く亂れ始めた。

公然の勢力を失墜して失意の境に陥つた浪士共は、却つて前よりも盛んに暗殺をやり出した。爲恭に關する世間の評判は悉く危険な材料ばかりだつた。文久二年の七月爲恭の室町通榎木町の家を襲つた浪士は、野野口隆正の門人長尾郁太郎等だつたが、彼等は爲恭を遁した事を非常に残念がつて其の後でも「屹度彼の首を取つて見せる」と云つてゐた。處が此の他にも爲恭を狙つてゐて「長尾等に一泡吹かせて遣らう」といふので専ら爲恭の在所を探索してゐる連中があつた。それは長州の浪士大樂源太郎等だつた。大樂は長州藩衆



屋氏の臣で、名を弘毅、號を西山と云ひ、幼い時から詩を能く作つた。十三歳の時初めて佐波川に遊んで、

細々風從林越生、夜來偏覺髮根情、

碧瑠黎上一痕月、流到前灘碎有聲。

といふ一絶を賦して人を驚かせた。吉田松陰の歿後松下村塾に入つて、久坂玄瑞とは最も親しかつた。

やゝ長じて四方の志士と交り、頼三樹三郎の紹介で水戸に遊んで櫻任藏の許に在つて國事を論じ、京都へ歸つて品川彌二郎、長松幹等と最も肝膽相照して活躍した。後年、明治四年三月十六日に、彼は筑後川で、吉田博文、山路三郎、松村雄之進等の爲めに殺された。

兎に角、さう云つた具合で、爲恭の境遇は少しも安泰の方へは向つてゐなかつた。叔父の永岳や奥村蒿菴等は内々幕府側の有力者にも運動して保護を乞ふて見たが是れも無効だつた。幕府側の人達は反つて爲恭を勤王派の人類として視てゐるのだつた。爲恭はどつちへ行くことも出来なかつた。

さうかうするうち、意外な、爲恭に取つては非常に不幸な出来事が突發してしまつた。それは外でもない彼の唯一の保護者である處の願海上人が、文政三年の五月、急に粉河寺を隠退しなければならぬやうな事情が湧き起つたのだ。どういふわけから隠退を餘儀なくせしめられたのか其の理由は判然しないが、願海は前にも云つたやうに獨自性が強く、人と妥協することが出来ない性分なので、此處へ來てからも一山の人達と折合ひが悪く、遂にそれから排斥を受けるやうになつたので、自分から隠居を願ひ出たのだとも云はれてゐるし、或ひは又、爲恭を匿まつた事が其の身に累を及ぼしたのだといふ説もある。何れとも判じ難い。が

兎に角さういふ結果になつた。

爲恭としてはまことに大木の許を離れる心地で困難此の上もない仕儀だが、此の場合自分の事を兎や角云つてはゐられなかつた。併し、一步外へ踏み出せば、自分の首を狙つてゐる人間がある。迂濶な處へは行かれない。彼も途方に暮れてゐた。併し、願海としては、爲恭の一身の落ち付け場を拵へて遣つてからでなければ、自分も退くわけにはいかなかつた。すると、粉河寺の末寺天福寺に惠穩といふ住職があつたが、願海に氣に入られて屢々御池坊へ出入をしてゐた。この惠穩に爲恭の事を相談すると、惠穩は暫く考へた後で、「それではかうなすつたら如何でせう、一時塚の方へお忍びになつては。それなれば愚僧が何とかお計ひ致しますが」

と云ふ。惠穩は當時塚の光澤寺に兼任してゐた。塚では都へ餘り近くなるので危険なやうな氣もするが、反つて燈臺元暗しで便利が得られるかも知れないと思ふし、第一他に何處へ行くといふ目當も無いので、それではといふので萬事惠穩に一任することになつた。そこで差し當り惠穩からの依頼状を持つて、天澤山と關係のある湊の安樂院といふ山伏の處へ行つて厄介になつてゐることに極まつた。

爲恭が愈々御池坊を去つたのは、文久三年の五月十五日頃だつた。願海の心を痛ませるのが心苦しいので爲恭は殊更元氣に振る舞つてゐたが、胸中は悲愁に滿されてゐた。二人はついに永久に相見ることが出来なかつた。

それから四日遅れて、五月二十日に願海も御池坊を退いた。其の日什物の引き渡しを行つた後で、本堂は



じめ諸堂社へ暇乞の禮拜をして、鬱陶しい雨がしと／＼と降つてゐる中を淋しく彼は退出して行つた。

(七) 綾 衣

堺へ落ちて行つた爲恭は、豫定通り安樂院へ身を寄せることが出来た。院主も親切な人物で、爲恭の境遇を凡そ承知し乍ら、表向は心連といふ只の僧侶として泊めて置いた。やがて粉河から惠穩和尚も遣つて來ていろ／＼親切に世話をして呉れるので、先づ一時小康を保つことが出来た。

とかくするうち此の土地にも、素性を明した上での知己が二三人出來て來た。其の中の一人に大徳といふ人物があつた。これは本名が辻本徳次、屋號が大和屋といふ肥料穀物問屋の主人で、通稱を大徳と云ふのだ。堺でも屈指の物持である。大徳は随分多趣味な人で、茶事、能樂、狂言、刀劍、書畫等は就中好きで、皎月獨齋と號して表千家の茶を能くした。夏は紺緞の蚊帳を用ゐた程のすき者だつた。當時は家業を弟の徳兵衛に任せて、自身はさうした仲間の風流者とばかり交際してゐた。彼は顎に美髯を貯へてゐたので、世間では「髯ハン」と呼んでゐた。

髯ハンの大徳は、商人ではあるが性來任侠に富んでゐたので、大層爲恭の身の上に同情した。尤も、大徳へは、爲恭の叔父の狩野永岳や、其の父洞玉等は以前から出入をしてゐた關係だつたから、爲恭とも滿更縁故が無いわけではなかつた。この大徳が、

「先生、此處においてになつても何彼と御不便で御座いませう。私の宅は商人の家でドサクサしていけませ

んが私の親類の間惣といふ者の別荘が市の町に御座います。まことに静かな處で繪でもお描きになるにはもつて來いの處です。誰に御遠慮も入りませんから、其處へお移りになつては如何です」

と云つて呉れた。爲恭は大變喜んで、

「それでは御厄介になり度いものです」

身輕なので直ぐ様市の町の方へ引き移つた。奥の離れ座敷、三室位の茶席風で、庭は随分寂びてゐる。其處にゐると市中の氣はしない。此の別荘には、間惣の女隠居と、其の孫の彦四郎といふ十五六歳の少年と、下女が一人しか平常は住んでゐない。それでも大徳は注意に注意を重ねて、食事は彦四郎に離れへ運ばせてゐた。隠れ家には眞に屈竟だつた。

爲恭は毎日繪筆を握つたり、讀書をして暮したりした。大徳は油断なく注意してゐたが、浪士の探索も此の土地迄は届いてゐないらしかつた。爲恭もいつかのんびりした氣持で暮すやうになつた。其のうちに折を見て京都の妻や、叔父の永岳の許へも報らせると、永岳は早速遣つて來た。

「先づ／＼お互ひに生きて遇はれてよかつた」

永岳は涙をこぼし乍ら爲恭の顔を見詰めた。爲恭は京都を出て後の自分の状態を話したが、それよりも彼は京都の話が聞きたかつた。其處には懐かしい物や、懐かしい人ばかりである。堺へ來て以來は、京都が近くなつたと思へば、一層其の土地が戀しくなつて來た。

「京都へ行つて見度い——」



それより外の思ひは無い。つい此の頃も食事の時、箸紙へ何氣なく「しびれ」と書いた。すると給仕をしてゐた彦四郎がそれを見て、

「何の意味で御座いますか」

と不思議さうに尋ねるので、爲恭が笑ひ乍ら、

「彦四郎さんは『しびれ〜京へ行け』といふことを知つてますか」

と云ふと、少年はまだ臍に落ちぬやうな面持をしてゐた。

「何でもありません、解らなくても宜しいのです」

そんな事もあつた。永岳は京都の噂をいろ〜話した。

「お出でになる時、綾衣にも會つて来て下さいましたか」

爲恭が待ち切れなくて切り出すと、

「いや、今度は急いだったので會つて來なかつた。綾衣は八幡へ歸つて居るさうぢやの」

と叔父は何だか不愉快さうに答へた。爲恭は失望した。其の後でも永岳はいろ〜の人の噂をして、みんなが爲恭の身の上を心配して懐かしがつてゐる話をするけれども、どういふわけだか肝心の綾衣の事になると、話をそらしてしまふのだ。

「綾衣は別に病氣も致しませんやうですか」

「いや、あれは病氣もしまいで」

「八幡の方にも變りは無いやうですか」

「さあ、確とした事も知らぬが」

永岳は冷淡な調子で云つた。爲恭は少しむツとしたけれども黙つてしまつた。「綾衣との間に何か不快な事でもあつたのに違ひない」と推量した。綾衣はあの通り氣位が高く萬事に贅澤な女だ。だから最初から親類間の氣受は餘り善くない。そこへ自分が居なくなつた爲めに一層親類との折合ひが悪くなつたのだらう——と、そんな風に彼は解釋した。

「私も近く京都へ行つて見ようと思つてゐます」

爲恭がさう云ふと、

「さう——併し、まだ油断しては成らぬ。成る可く外へ出なさらぬ方が宜しいな」

と永岳は押へるやうに云つた。それから暫く經つてから爲恭はふと思ひ付いて笑ひ乍ら、

「叔父上、私の最近の腰折を一つ二つお目に掛けませうか」

「や、それは是非拜見したい」

爲恭は、寫し物の端へ書き付けて置いた和歌を見せた。

只ひとり物思ひいる軒近くなくさめ顔に飛ぶ螢かな

いにしへを思ひつゞくる袖の上に秋のふかけき月ぞ宿れる

叔父は心を紛らさうと思つても、自然に其の顔は曇つて來た。



錯	法	作	掃	再	最	最	最	最	法	同	同	渾	混	弧	法	古
斜	算	式	清	訂	上	上	上	上	算	同	同	池	交	法	算	古
垂	式	起	算	算	流	流	流	流	差	同	起	招	招	約	積	並
斜	術	源	法	評	珠	秘	開	立	法	同	源	法	法	率	術	分
術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術
同	同	同	同	會	市	佐	會	同	同	同	同	會	建	會	同	同
				田	瀨	藤	田					田	部	田		
				安	惟	一	理					安	賢	安		
				明	長	清	正					明	弘	明		
編	著	編	著	著	著	編	編				編	編	編	編		

文化三年二月

(九)

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
同	水	鈴	遠	村	甲	平	星	武	遠	水	內	同	丹	內	水	白
	口	木	藤	井	斐	松	野	田	藤	口	海		後	海	口	田
	久	久	利	伊	隆	誠	琴	ツ	利	久	菱		關	與	久	彌
	兵	兵	貞	兵	道	一	十	ネ	貞	兵	助		太	平	兵	右
	衛	衛	舊	衛	藏	院	子	子	舊	衛		郎	郎	治	衛	衛
		徹	藏	藏	院	寫			藏				郎	治		門

弧	同	同	弧	法	法	法	法	法	法	法	法	法	法	法	法	法
背			背	法	法	法	法	法	法	法	法	法	法	法	法	法
綴			術	將	戲	變	數	(卷上)	術	術	術	術	術	術	術	術
術			解	同	會	安	島	直	圓	述	著	著	著	著	著	著
解			同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	日	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	下	誠	嗣	遺	稿	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著
編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編

嘉永元年

前行と同書  
手稿

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
春	同	遠	湯	丹	佐	長	武	水	甲	丹	內	水	鈴	岡	鈴	遠
日		藤	川	治	藤	沼	田	口	斐	治	海	口	木	本	木	藤
今		利	孫	庄	峰	安	ツ	久	隆	庄	菱	久	木	則	木	利
朝		貞	兵	之	太	忠	ネ	兵	道	之	助	兵	徹	錄	貞	貞
藏		舊	衛	助	郎	忠	子	衛	藏	助	助	衛	徹	藏	舊	舊
		藏	衛		院				院					院	藏	藏
					寫				寫					寫		

(八)



「まあ、少し氣永に時節を待つことだ、其のうちには何とかなる。かういふ時世もさう何時迄も續きはしまいから」

と云つて爲恭を慰めた。

叔父が歸つた後、爲恭は又獨りで物思ひにばかり耽つてゐた。綾衣の事が一番氣懸りだつた。氣懸りと云へば爲恭が京都へ書面を出したので、叔父の永岳はあゝして遣つて來て呉れたのに、綾衣からは今日まで何の返事も無いではないか。彼はそれが心配だつた。「綾衣は屹度病氣をしてゐるに違ひない——」愛する妻が病床に呻吟してゐる姿を想像すると、居ても起つてもゐられないやうな氣持がした。圓頂黒衣を身に纏へる爲恭は、戀に寔れた若者のやうに煩悶した。

「さうだ、自分で京都へ行つて様子を見て來よう」

彼は遂にさう決心した。すると急に蘇つたやうに勇氣付いた。京都へ行くといふ事が、今迄考へてゐた程恐ろしい事のやうには思はれなかつた。そこにはあの懐かしい町がある、あの美しい山水がある、戀しい妻がある——此の儘生涯京都へも還れず、妻の顔さへも見ることが出來ずに生き延びるくらゐなら、萬一此の命を一朝にして縮めるやうなことがあつたとしても、京都へ行つて自分の想ひを晴して來たいと爲恭は思ひ詰めた。

大徳に向つて其の事を相談すると、

「さあ——併し、京都へお出になるのはまだ少し早くはないでせうか」

と彼も心配さうに云つた。

「早いかも知れませんが、併し、何時になつたとて、私が公びらに京都へ還れる時は來ないかも知れない。私は生きてゐる間に是非一度京都へ行つて見度いのです」

かう思ひ詰めてゐたのでは留めても留るまいと大徳は考へたので、

「それでは十分御注意なされて行つていらつしやいませ」

と云つた。爲恭は小兒のやうにイソ／＼喜んで、直ぐ様仕度を整へ、駕に乗つて京都へ向つた。時刻を計つて發つたので、京都へ着く頃には日が暮れるやうになつてゐた。男山八幡の門前で駕を返して、綾衣が歸つてゐる筈の林の家へ行くと、林の家内は爲恭であることが分ると顔の色が變る程驚いたが、兎も角も直ぐに座敷へ通して、主人の林も其處へ出て來て一別以來の挨拶を交した。

「何がさて、御無事で、お目出度い事で御座います」

夫婦は幾度びもさう繰り返した。

「綾が御厄介になつて居るさうで御座いますな」

と爲恭が云ふと、家内はアリ／＼と當惑の表情を浮かべて、

「はい……もう久しく宅においで、御座いますが、……此頃はちとお加減が悪くて……」

「臥つて居りますか」

「は……」



「私が参つたことは、綾にお知らせ下すつたのですか」

「はい、直ぐにお知らせ申して置きました」

「では、一寸見て遣り度う御座いますから、病間へ御案内を願ひ度いのですが」

併し林の家内は何故だか躊躇してゐた。爲恭にはその様子が一寸不愉快に感じられたが、それも妻に逢ふといふ強い欣びの爲めに掻き消されてゐた。爲恭は胸を轟かせ乍ら妻の病室へ這入つて行つた。

「あれッ！」

と先に立つて行つた林の家内は駭きの聲を擧げた。爲恭が見ると、褥の取つてある病室の畳の上に突伏してゐるのは正しく妻の綾衣だが、彼女の緑の黒髪は根本からゾツキリ斷ち切られて、而も今が今切つたばかりの其の髪の毛を手に掴んだ儘、綾衣は堪へ入るやうに泣いてゐるではないか。爲恭には一切譯が分らなかつた。

「綾、何んでそんな眞似をしたのだ」

綾衣は泣くばかりで答へなかつた。

「是れには餘程深い仔細がある事せう。お宅で御存じならばお話しが願ひ度いのです」

彼は急ぎ立つ心を押へ乍ら林の家内を語るやうに云つた。併し人の好い家内はどう云つてよいか分らず只只うろたへるばかりだつた。すると漸う綾衣が口を開いて、

「事情は私からお話し致しますから、お母様はあちらへお引取り下さいまし」

林の家内はそれをしほに立ち去つた。

「さあ、どういふ事情だか云へ」

「妾は恐ろしい罪を犯しました。貴郎にお目に掛る面目はありませぬ」

「何、罪を犯した。どんな罪を犯したのだ」

爲恭はにじり寄つて妻の肩に手を掛けたが、其の時突如として或る考へが頭に浮んだ。それは妻のしなやかな肉體の誘惑が、直ちに彼の考へを其處へ引つ張つて行くのであつた。さうして彼は呼吸も止りさうに感じた。

「そちは不義をしたのだな。相手は誰だ、さあそれを云へ」

綾衣はそこまで云つてから中々云はなかつた。

「云はぬか、相手は誰だ」

爲恭は恐ろしい嫉妬に身を顛はせ乍ら幾度も叫んだ。それを聞くのは、自分で自分を墓穴へ突き落すやうなものだ。

「忠古さんです」

「何、忠古と——」

爲恭の憤怒は極度に達した。双眼からは熱い涙がほとばしつた。忠古といふのは、多備前守の養子で、爲恭の姉たつのためには義理ある子だ。



「何といふ淺ましい事になつたものだ——」

併し爲恭は、引き續いて彼女の口からもつと／＼悲痛な告白を聞かなければならなかつた。綾衣は獨り寢の淋しさについ忠古と不義の關係を結んだが、何の因果か男の胤を宿してしまつたのだ。そして今から一月ばかり前其の兒を生み落した。生れた子は二三日經つと死んでしまつたが、彼女は其の後肥立ちが悪くていまだに病褥を離れ得ないでゐるのだつた。

先達ての叔父の言葉付きが之れですつかり了解された。して見ると此事はもう世間にも知れてゐるに違ひ無い。世間の人達は自分を何と云つて嘲つてゐるだらう……。

「忠古との關係は何時から始まつたのだ」と彼は糺して見たかつた。然し、そんなことは糺さなくとも、胎兒を分娩した時期から指を折つて見れば、それは彼女が多家へ預けられると間も無くからだといふことが想像される。恐らくそれは爲恭がまだ神光院に居た時からの事だらう。「あの頃の俺は恐ろしい災難に脅やかされて夜も晝も生きた心地は無く暮してゐた。それなのに、妻は、もう其の時から俺の事などは忘れてしまつて仇し男の肌に戯れてゐたのか」と思ふと爲恭は餘りと云へば女心の頼み無さに腹が立つた。十年餘りつれ添ふた自分との間には出来なかつた子までももうけたといふことが、物狂ほしい嫉妬の情を咬り立てた。彼はどうしたらよいか分らなかつた。

爲恭は、世の中の全部の物から見捨てられてしまつたやうな氣持がして、淋しい、哀しい氣分に引き入れられた。

「俺は來るではなかつた。遠くの國へ行つて、一生恁んな事は知らずに暮せばよかつた」

「申し譯はございません。妾を存分にして、お腹の癒えるやうにして下さいませ」

「どうした處で俺の腹が癒えるものか。俺の此の頭を見い、此の姿を見い、勿體ない事だが俺は佛に仕へる心は微塵も無くて恁んな姿になつてゐた。佛罰も降らば降れ、俺はどんな態になつても生き永らへて、もう一度お前と暮すことを夢みて居たのだ。何といふ外道だ——」

綾衣は良心の呵責に堪へ兼て只泣くばかりだつた。然し、其の取り亂した姿も、産後の寢れの見える透き徹るやうな顔も、やがて爲恭の眼には又なく美しいものに見えて來た。不義の女であらうとも妻は妻だつた此の妻無くしては一日も此の世に在る甲斐は無いのであつた……

夫婦は擁き合つて泣いた。

### (八) 浪士追窮

堺の隠れ家は、意外に明るい生活に爲恭を招いて行つた。浪士も此處には少しも氣が付かぬやうだつた。爲恭は段々呑氣になつて、時々表へも獨りで出たりした。濱新地の常盤家といふ料理屋は格別懇意にして、よく其の家へ遊びに行つた。家に居る時は多く畫作をした。丁度其の頃大徳の娘に縁談が纏つて急に嫁入りといふことになつたので、爲恭は其の娘のために六曲屏風半双に極彩色の御所繪を描いて祝つた。

彼が京都から歸つてから數日後には、綾衣が堺の夫の隠れ家へやつて來た。そして二晩も三晩も泊つて歸



つた。其の後綾衣は度々やつて來た。爲恭の方からも月に一度位は隠れて京都へ行つた。

大徳は近來爲恭が餘り大膽に振る舞ふのを見てそれとなく忠告したが、爲恭は事實左程氣に掛けてゐる風は無かつた。彼は何時でも喉元過ぎれば熱さを忘れてしまふ性の男だつた。殊に大徳は爲恭が隠れ家へ妻を呼び寄せることは何より危険だと思つたけれど、他の事と違つてさう厳しくも云ひ憎くかつた。

切り髪にした綾衣の幽艶な後家姿は全く人目を引き易かつた。彼女は昔から髪の長くて美しいことで評判の女だつた。其の昔爲恭が戀をして「黒髪はたけにあまりて心根のすなほにきよき人ぞ戀しき」と詠嘆したこともあつた。其の髪を切れば切つたで、何處となく惱ましげの姿が一層蠱惑的に人目を惹いた。

妻の不義を知つたことは、爲恭に取つて終世癒すことの出来ない心の深手だけれども、不思議に彼女に對する愛着は以前よりも募るばかりだつた。そして今でも忠古との交渉を危ぶむので、彼女が側に居ない間は常に不安だつた。

併し、綾衣の身邊には、絶えず恐ろしい浪士の眼が光つてゐた。彼女も爲恭もそれには氣付かなかつた。が、何時となく、堺の町を天誅組の浪士があちこち歩き廻るやうになつた。

或日大徳の店へ三人連れの浪人體の武士がぬツと這入つて來た。

「これ〳〵、我々は少し尋ねる仔細があつて參つた者だ。當家の主に面會致し度いと先に立つてゐる一人が云つた。

「へい〳〵、只今主人に申しますから、暫時お待ち下さりませ」

番頭が此の事を奥へ取り次ぐと、大徳は「はッ」と思つたが、直ぐ様店先へ出て來て、何氣ない様子を裝つて、

「これは入らつしやいまし、私が當家の主徳次で御座います。何の御用で御座りまするか」

「其方が主か。然らば尋ねるが、岡田式部は何處に居る？」

「岡田式部と仰しやいますと？」

「亭主、白ばくれても駄目だ。お尋者の岡田式部、それで分らなければ冷泉爲恭と云ふ繪かき坊主を、其方が匿まつてゐるといふ事は、我々確かな筋から突き留めて來たのだ。隠し立て致すと其方の爲めにならぬぞ」

「これは近頃御無理なお尋ねで手前甚だ迷惑致します。成る程冷泉爲恭といふ人は、名前だけは聞いて居りましたが、私に取つては一面識も無い人、それを何で隠したり匿まつたり致しませう。何かのお間違ひかと存じまする」

「黙れ亭主、貴様が匿まうて居る事は明白なのだ。有體に云はんと許さんぞ」

と後の方に居た武士は刀の柄を丁と叩いて見せた。

「是れは面白い。手前も町人乍ら些か此の土地では知られて居ります。全體何を證據に貴君様方は、私が爲恭とやらを匿まうてゐると仰せられるのです。さあ其の證據を拜見致しませう」

と大徳はあべこべに強く出て膝をにじり出した。前の武士は仲間の者を眼で制して、



「何處迄も其方が知らぬと云ひ張るなら今日は引き取つて遣らう。だが徳次、若し貴様が匿まつてゐた證據が上つたら何とする」

「其の時は如何様の御成敗でも受けませう。大徳は決して遁げ隠れする卑怯な男では御座いません」

「よし今の一言を忘れるなよ。さあ各々、引き取らう」

浪士達は漸う立ち去つた。

其の夜大徳は爲恭の隠れ家へ行つて、晝間の出来事を話して、

「まだ此處迄は突き留めたわけではありませんが、然しかうなつて來ては、此の土地に居らつしやるのは危なう御座います」

「いや左うでしたか」

と云つたが爲恭は、久しく忘れてゐた危險が身近く迫つて來たことを知ると、急にあたりも暗くなるやうな氣持がした。「かうして勢子に圍まれた兎のやうに何處迄も追はれて行く自分の運命の、行きつく先は何處だらう……？」然し、遁れ得るだけは遁れなければならない。否、何んとしても遁れ了せなければならぬ。俺はまだ澤山したい事が残つてゐる。繪も描かなければならぬ。世間の者は俺の繪を賞めるけれども、俺はまだほんたうに自分の満足する繪を描いたことはない。著述もやり度い。それでなければ俺が三十年を費して調べた事が無駄になる。それに、それに、俺には綾衣といふ者がある。綾衣の爲めにも俺は死ぬことは出来ない……」爲恭の頭腦は果てしもなく混亂するばかりだ。



大樹寺藏



「さういふ譯なら、早速當地を立ち退くことに致しませう」と溜息と共に云ふ爲恭の顔を大徳は氣の毒さうに見て、

「私も及ばず乍ら、何處迄も先生の御世話を致すつもりで居りましたが、かうなつて來ては、一時何處かへお忍びなされるよりほかはありません。處で、此處からどちらへお出でになるお考へで御座いますか」

爲恭は暫く考へてゐた後で、

「一先づ大和内山の永久寺へ行つて見るつもりです。彼處の住職の亮珍上人と仰つしやる方には、古くからお馴染になつてゐますから、頼つて行けば滿更ら悪くはなさるまいと思ひますから」

「いや、それはよい處へお氣が付かれました。永久寺へ入らつしやれば安全です。彼處なら滅多に浪士の手も届く筈は御座いません」

大徳は漸うそれで安心して、其の晩のうちに仕度を整へ、翌朝未明に駕へ乗つて爲恭は大和を指して落ち延びた。

内山永久寺は、奈良から南へ二里ばかり離れた、丹波市町の程近くで、畿内では聞えた眞言の巨刹だつた。永久寺の現住職亮珍上人から爲恭が行成卿の書卷を貰つた事は前に書いて置いた。突然爲恭が行つて是れ迄の事情を物語つて一身の庇護を願ふと、上人は快く承知して呉れた。そして寺内の蓮乗院と云ふへ爲恭を置くことになつた。

爲恭の方はこれで片付いたが、片付かないのは堺の後始末だつた。それから餘程後のこと、或日白晝大徳



の店へ五六人の浪士がドカ／＼と這入つて來た。そして驚いてゐる番頭や手代に向つて、

「我々は當家の主人に用があつて來た。主人の居る處へ案内しろ」

さう云つたと思ふと、みんな一度に土足の儘上へ上り込んでしまつた。顛へてしまつた番頭を先に立て、一同は土足の儘でドヤ／＼と續いて奥へ這入つて行つて、いきなり大徳の居間を襲つた。利かぬ氣の大徳だが此の時ばかりは青くなつた。

「こら徳次、其方はよくも／＼我々に一杯喰はせたな。今日は其の復讐に來たから覺悟をしろ」

先達て來た男はかう云つてギラリと刀を抜いた。あとの者はグルリと徳次の周りを取り圍んだ。

「これは飛んでもない、何をなされます。私が貴君方に一杯喰はせたなぞと、覺えの無いことで御座ります」

「黙れ／＼、今日は其の手には乗らんからさう思へ。爲恭を何處かへ遁がして遣つたのは貴様だ。さあ、其の行先きを云へ、云はねば是れだ」

と白刃を眼の前に突き出した。

「めつさうな、全く以て私は——」

「大樂、手緩い／＼、面倒だから、早く血祭りに上げて終へ」

一人がさう云ふと同時に一同刀を抜いた。

「大徳、何處迄も云はんか。云はねば貴様も國賊と見なして、家内中をみな殺しにして遣る。さあどうだ」

大徳は頭を垂れ眼をつぶつて考へてゐた。天誅組の亂暴が實際どの程度までのものかといふことは知つ

てゐる。故で云はねば自分の命は勿論無いが、一家眷族と雖も無事では濟まない——さうかと云つて爲恭の居所を明かしてしまへば、自分は助かるけれども信義が廢る。信義を捨てるのは心苦しい、と云つて自分の身も遁がなければならぬ……。

「面倒臭い、やつて了へ」

「あ、どうぞ、お待ち下さいませ」大徳は白刃の前に手を出して「仕方が御座いませぬ、申します。其の代り私はお許し下さいまするか」

「おう、云へば貴様は許して遣はす。爲恭は何處に居る」

「先生は大和の内山永久寺に居られます」

「確かにさうだな」

「決して嘘は申しません」

大徳は心の中で「爲恭先生どうか許して下さい」と云つた。

浪士達は刀を收めたが、歸りがけに大樂といふ男が「若し此の事を爲恭に内通して、彼を永久寺から落ししてしまふやうな事があれば、其の時こそ再びやつて來て一言と無く一家を襲殺してしまふからさう思へ」と脅した後で、

「場合に依つては其方に手引きを頼むかも知れぬから、其の積りでゐて貰ひ度い」と云つた。大徳はもう何處迄も弱い人間になつてゐた。



「宜しう御座ります。もうかうなれば、どんな御用でも勤めませう」と彼は答へた。

(九) 端午の節句

爲恭が、内山永久寺へ身を落付けたのは、文久三年が二月二十日から改元されて元治元年となつた。其の春も終りかけた頃だつた。爲恭は、何處へも踏み出すことは出来ないで、蓮乗院の庫裡の奥座敷でばかり起き臥しをして、退屈な日を送つてゐた。何故だか繪を描く氣にもならなかつた。奈良へ行けば澤山知己もある。奈良は彼に取つては京都に次ぐ懐かしい土地だ。以前はよく其處へ来て、法隆寺や東大寺の寶物を模寫したりして、幾月も滞在してゐたものだ。

「奈良へでも行つて見度いなあ」

と思ふことがあるが、流石にそれも危険だと思ふから出られなかつた。毎日青葉の山々や、霞の掛つた山を眺めてゐると、自分が行つたこともない遠い國の事などが考へられた。願海上人からよく話に聞いてゐる、上人の故郷の上野國などといふ土地の事が妙に自分を引き付けたりした。願海とは紀州で別れた以來互ひに消息は無かつた。紀州で別れる前に願海は、

「今度は體が閑になるから、少し巡錫でもして見ようと思つてゐる」と云つてたから、今頃は何處かの遠い國を旅してゐるかも知れないなども爲恭は考へた。

「自分も旅へ出て見ようかしら」

と思ふこともあつた。業平朝臣や、西行法師の足跡を眞似て旅をすることは悪くないやうな氣がするが、京都で育つて、旅らしい旅はしたことのない爲恭には、いざとなれば到底心細くて出来ないのである。

或日、京都から人が來たと云ふから、急いで出て行つて見ると、それは尼僧姿に身をやつした綾衣と、吉兵衛といふ下男とであつた。爲恭は驚いて妻を自分の居る處へ連れて行つた。

「其の姿はどうしたのぢや」

「かうでもしなければ、來ることが出来ませんもの」

爲恭の煩惱の絆は何時が來ても斷ち切る時はないのだつた。

綾衣は其儘寺に留つてゐた。下男も附いてゐた。

端午の節句が來た。が、寺にゐれば常と變つたこともなかつた。それが、世の人との交りの出來ぬ佗しさをしみんと感じさせた。尙古趣味の爲恭は、さうした古雅な年中行事には人並以上の興味を有つてゐた。京都に居る頃は、端午の節句には、鎧櫃を飾つた床の前で、衣冠束帯に姿を正して、粽に菖蒲酒を祝つたりしたものだ。

「綾、節句でも寺方は詰まらないな」

「ほんとに左様で御座いますわ。幟は立つてはなし、菖蒲も葺かないのですもの、端午の氣持は致しません」  
「實方朝臣が陸奥へ流された時、陸奥には菖蒲といふものが無かつたので、菖蒲のかはりに、安積あさかの沼のか



つみといふものを採らせて、軒に葺いたといふ話があるな。俺は今になつて初めて實方朝臣の氣持が解つて来た」

「ほんとに早く京都へお歸りになれる時が來たら、どんなに嬉しいで御座いませう」

「そんな事は何時の世の事だか分らない。それよりも俺は、いつそのこと奥州へでも逃げて行かうかと考へてゐるよ」

「まあ厭な事」

「しかし恁んな都近くにゐて、何時首を取りに來られるかと、年が年中ビク／＼脅やかされ乍ら暮す位なら陸奥の山の中へでも隠れて、山かつても何でもして、全く世の中を見ずに生きてゐる方がまだしもだと思ふ時がある」

「それはさうですけど、奥州なんて國はどんなに偏鄙な處なんでせう。陸奥の山の中には、今でも鬼が棲んでるさうではありませんか」

「鬼も居るかも知れないな。鬼よりもつと恐い者も居るかも知れん」

「あれ、そんな恐い處へ行くのは妾は厭で御座いますわ。實方朝臣のお話で思ひ出しましたが、其のあさかの沼といふのは、あさかの山のある處なんでせうか」

「無論さうだらう」

「では屹度淋しい處ですわ。あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものかは——はあのあさか

の山のある處でせう。そんな處に住んで變り果てた自分の姿を寫して見たなら、大納言の姫でなくても妾だつて屹度死んでしまひますわ」

「死ぬといふことは、口で云ふ程樂な事ぢやない。俺も以前は、生き甲斐の無い生き方をする位なら死んだ方が増しだといふやうな考へ方をした時代もあつたが、今では頓とそんな氣はしない。俺は自分の此の首を狙つてゐる奴があると考へると、どうでもして其奴から遁れることしか考へられない。生きてゐてどうするといふこともないが、唯生きてゐたい。あゝ／＼俺は命が惜しい」

爲恭はしまひは冗談に紛らかして云つたが、併し其のどうでも生きてゐたい氣持だけは實感である。頭を圓めて僧體になつても、それでもまだ憎い程媚めかしい妻の顔を見ると、若し此處で死んでも死後まで妄念が残りさうな氣持がした。

丁度爲恭夫婦がそんな話をしてゐた頃、丹波市から七八丁南、奈良初瀬街道の西に當る御靈神社の前を三挺の駕が威勢よく西から東へと通り過ぎた。そして後の二挺の駕の脇から長い朱鞘の業物がはみ出てゐた。麥は十分に伸びてゐるが、まだ刈り取るには早かつた。それは丁度菜種の收穫期なのに、あたりの田圃では百姓がセツセと菜種を揉んでゐた。一行は初瀬街道へ出ると、北に向つて丹波市の方へと行つた。

町端れに扇屋庄兵衛といふ宿屋がある。其の宿屋の直ぐ前の處から東を指して山の方へは入つて行く道が内山街道だ。駕は其處で止まつて、後の駕へ乗つてゐた武士だけが二人降りた。そして前の駕の側へ行つて何か囁いてから、二挺の駕はあとへ歸して、武士は扇屋へ這入つた。



残りの一挺の駕は、淨國寺前を東へ向つて、内山道を急いだ。駕は永久寺の西門をはいつて蓮乘院へとつ  
けられた。

小坊主が爲恭の居間へ来て、

「心蓮様、堺からお客様が見えました」と執り次いだ。

「堺から？ 何といふ名前の人ですか」

「大徳と仰つしやつてみました。長い髯を生やしたお爺さんです」

「ほう、それでは確かに大徳ぢや。どうかこちらへ案内して下さい」

「畏りました」

と小坊主が出て行つたが、間もなく大徳を案内して来た。

「これは珍らしい客人ぢやな。今も今、今日は端午の節句なれど人も来ず、頓と淋しい事だと話をして居つた處です。ようこそその御入来ぢや」

「有難う存じます。私も、参らう／＼と心に掛けて居りましたが、何や彼やと俗用もあり、それに、人目といふ奴もありますので、つい／＼御不沙汰を致してしまいました。然し、先生も御壯健で何よりで」

「いや、近頃のやうに無爲徒食を致すと體は盛々たるばかりで」

爲恭はムツチリと肥えた腕を擦り乍らさう云つて笑つた。

綾衣が次の間から挨拶に出て来たのを見て、大徳は呆れて、

「奥様は何時の間に、其のやうにお髪を卸しなされました」

「つい此頃です、いつそ此の方が、主人と似合ふだらうと思ひましてね」

「さやはや」

爲恭は流石に極り悪げに、

「解脱の出来ぬ僧が二人、未だに迷の雲が晴れなくて困ります」

一つ二つ世間話をした後で大徳は、

「時に先生、本日伺つたのは外でも御座いませんが、間惣が此頃中参りまして、是非至急に先生にお頼み申し度い事があるから、御案内をして来て呉れとのこと、誠に御迷惑で御座いませうが、手前と一緒にござしが願ひ度いのですが、如何でせう」

「然し、堺へ行つても大丈夫ですか」

「いやそれは少しも御心配に及びません。あの後の當座は浪人が迂路ついてゐた事もありましたが、もう堺には居ないと見極めをつけたのでせう、近頃は頓と影も形も見せません」

と大徳は云つたが、彼は咽喉を締め付けられるやうな苦しさを覺えた。然し己れの身、己れの家には替へられないと思つた。

爲恭は何となく氣が進まないが、匿まつて貰つた恩人のことだから厭とは云へない。

「それでは御同道致さうか、直ぐ参るのかな」



「道程もあることですから、早いに越したことは御座いませんな」

「乗物は」

「一挺だけは手前が乗つて來たのを待たせてあります。先生がそれへお召しなれば、私は、棒ばなあたりで拾つて乗ります」

「ではお氣の毒だがさうして貰ひませう。然し、もう時分どきだから、食事だけはしたゝめて行くことに致さう」

爲恭は勝手へ膳部を命じた後で、

「米谷さんの子が初節句だと云ふから、お祝ひにしようと思つて此頃描いて置いたのです。幸ひのことだから今日持つて行きますせう」

と云つて、帛紗へ菖蒲が描いてあるのを出して大徳に見せた。大徳は繪を見るところの氣持ではなかつた。膳部を前へ据ゑられても、飯も喉へ通らなかつた。

綾衣も蟲が知らずか浮かない顔をしてゐた。

「貴郎、何時お歸りになります」

「行つて見なければ分らぬが、二三日は暇取るだらう——いや、成る可く早く戻つて來る」

爲恭は妻の顔を見て云つた。

爲恭一人駕に乗り、大徳は後へついて寺を出た。少し下り坂の道を可成り急いで本街道迄出ると、駕は南

へ向つて、扇屋の前を通り抜けた。其の時大徳は扇屋の店二階から顔を出してゐた武士に向つて手を舉げて合圖をした。武士は合點いて引つ込んだと思ふと直ぐ二階から下りて來て、一人は本街道を、一人は町裏へ出て細い近道を走つた。大徳は反對の方向へ遁げ出した。

何事が起らうとも思はれない麗かな初夏の眞晝の街道を駕は走つて、町を出端れてから、田圃の間を二三丁ばかり南へ進んでゐた。若い百姓のかみさんが辨當の包を提げ乍ら駕の後棒へくつついて行つた。そこらの田圃では菜種を揉んでゐた。

「其の駕待てつ！」

と云ふ聲が背後でした。駕かきは吃驚して何かと思つてヒョイと足を停めた。すると、其の途端に道の西側の麥の畝の蔭から、秋水一閃……駕を刺し通した。

爲恭は太股を刺された。深手を忍び乍ら、反對の側の垂を揚げて這ひ出さうとした時、駕の後ろから廻つた武士のために、バツサリと首を討ち落された。

駕かきと百姓のかみさんは、血しほを浴びて腰を抜かしてしまつた。然し武士だけは悠々としたもので、まだ首の斬口からガバ／＼音を立て、血が迸つてゐる胴體の襟がみを掴んで道の端迄引き摺つて行つて、仰向けに寝かし、それから一人は懐中の料紙を取つて、一通の斬奸狀を認め、それを死骸の胸の上に置き、有りあふ土塊を拾つて鍾鐺にした。

首級は、薄納戸色のブツサキ羽織に包んで一人が小脇に抱えた。



「さあ行かう」

二人の武士は、現場から少し行くと池があつたので、其の池で首を洗ひ、めい／＼の手に染つた血しほを洗ひ落して、畑に立てゝある手頃な竹を抜き取り、それで首をさし擔ひにして、田圃道を西の方へと急いで立ち去つた。

柿色の法衣を着た、首の無い爲恭の體に、初夏の陽が照りつけてゐた。

(十) 梟首

現場の跡には大きな騒ぎが起つた。村方の役人が出張し、代官所へも急報されたので時を移さず檢死の役人が出張した。數人の目撃者の申し立てに依つて殺害當時の情況も明かになり、又駕かきの言葉で身柄も判つたので、永久寺へも直ぐ様報ぜられた。何しろ白晝、而も街道筋の出來事だから、其の騒ぎは一と通りでない。

斬奸狀には次の文言が書いてあつた。

岡田式部

右の者癸丑寅以來人徒黨の大姦謀を工み候處、諸事顯れ候より、數年奔竄致居候處、近來落髮、名を心蓮と改め畫師と稱し諸方遊歴致居候處天誅のがる可からず、今日此處に於て令斬戮首級携歸り候へ共、死骸は其儘拾置候間、始末萬端領土人に托し候。

五月五日

付、罪狀委曲は梟首の處に可揭示もの也。

處が、此の死骸が取殘された現場は、永原、三味田兩村の境界線に當つてゐて、而も此の二村は各々領主が異つてゐた爲めに、これが取片付け方に就いて非常に難かしい議論が生じた。兩村の庄屋、年寄は勿論、大庄屋の立合となり、果ては兩村地頭の立合檢死となるやら、二日二夜の間捫着を重ねた。永原村は植村藩(高取)に屬し、三味田村は藤堂藩(津)の領分だつた。夜になると兩村の者は東西に分れて松明を焚き乍ら、互ひに張番をしてゐた。其の間冷たい爲恭の屍は、木欄の法衣に包まれた儘、一枚の蓆を被せられて横たはつてゐたのである。

漸う話が纏まつたのは三日目の晩の事であつた。即夜永原村の年寄中村直藏が付き添つて、丹波市町勾田善福寺の境外無縁墓地に運びつけられ、唯形ばかりに埋められた。

殺された翌日の朝、爲恭の首は、大阪南御堂の石燈籠の火袋の中に梟けられてあつた。そして、奪ひ去られない爲めにか耳に穴を明けて鎖で縛つてあつた。其の下に貼紙をして左の如き罪狀が擧げてあつた。

岡田式部

此者王城の下に生育しながら、尊攘の大典を忘却し、前に長野義言に黨し、後に酒井若狹に媚び、私欲を遂げんが爲め正義を排し、正士を害し、其罪枚擧に遑あらず。就中廢流獻毒の逆謀に預り候は、天地に不容大罪なり。是を以て先年同志の者斬戮せしめんと欲し候處不幸にして打洩らし、其後探索し候得



共行衛不詳、然る處去秋剃髮名を心運と改め、紀州粉河より泉州堺に潜居し、謂ゆる天網恢疎而不漏、昨端午晝時、大和國丹波市路上にて生捕即刻天誅を加へ、當地まで持歸り令<sub>レ</sub>梟首<sub>一</sub>者也。

嗚呼尊王の大義を失ひ攘夷の明詔に背き候者、遂に白刃にかゝり候自然なり、豈唯此者耳ならんや。

爲恭を討つた者は、大樂源太郎と其の部下だつた。大樂も後年人手にかゝつて殺された事は既に第六章に記して置いた。爲恭は享年四十二歳だつた。最後に爲恭の生涯に最も關係の深かつた二三の人物の、其の後の成り行きを報じて、本傳を終ることしよう。

妻の綾衣は、蓮乘院に居て夫の凶變を聞き、泣き悲んだ様は哀れだつた。彼女は夫の首を取り戻すべく、僕の吉兵衛を随へて、くらがり峠を越えて大阪へ向つたといふことだけ分つてゐるが、南御堂の曝し首を何れかへ彼女が埋めたものか、其の目的を遂げ得なかつたものか、其の邊は不明である。

爲恭が梟首されると、何しろ高名の畫師だけにゑらい評判で、種々の風説が傳へられたが、其の頃恁んな落首が出た。

時は今尼を圍ひしきさきかな

綾衣は其の後再び髪を貯へた。多忠古と關係を續けてゐたとか、爲恭の門人岡本恭儀とも關係したとか、香ばしくない話ばかりで晩年は頗る零落したといふことだ。

堺の大徳が最初の俠氣に似もやらず浪士に脅迫されて爲恭殺戮の手引きまでしたことは、男らしくない振舞ひだが、天誅組の暴行がすべて正義化されて見られてゐた當時に於ては、彼の行動を露骨に批難する者も

なかつた。然し大徳は一番寢さめが悪かつたに違ひない。爲恭を匿まつてゐた頃嫁入りさせた彼の娘は、爲恭が殺された翌年病に罹つて死んだが、其の日は爲恭の命日に當つてゐた。其の娘の嫁入道具として爲恭に描かせた六曲屏風半双は、娘の荷物と共に送り還された。大徳はそれを淨光寺へ寄進して、現在も残つて爲恭の傑作の一つとなつてゐる。大徳の家は其の後兎角不幸が續いて、明治になつてから家も没落し、人も死に絶えて、今は跡方も無くなつてゐる。

神光院の月心律師の子覺樹律師は明治二十四年六十四歳で遷化し、弟智滿律師は神光院の後を受け、明治四十二年七十五歳で示寂した。智滿が書を能くしたことは前述の通りで、一雨道人と號し、現に其の遺墨は多數の人から愛好されてゐる。

次に願海上人の事蹟を述べる。願海粉河寺を出た後、一時前に往つた叡山の常樂院に引取り、更に翌元治元年からは江戸へ行つて東叡山養樹院の師主の許に在つて二三年を費した。一所不定の身となつた願海は寂しくはあつたらうが、同時に更に或る強い人生觀を得たことに相違無かつた。そして二三年の後、江州比良山の西、葛川明王院に隠棲することになつた。

明王院は相應和尚の草創で、往昔和尚は葛川第三の瀧に於て生身の不動尊を感じたといふ靈域である。古へは高貴の人の參籠もあり、叡山の同峰行者が瀧詣りと稱して參籠する慣ひがあつたから、願海も嘗て參籠したことがあつた。彼は明王院の奥の二の瀧の畔に草庵を結び、修禪念佛に餘念が無かつた。

當時の願海の生活は非常に簡素なものだつた。彼が弟子の亮海に與へた消息に、

冷泉爲恭



「タマニハ一斤壹分位ノ茶飲タク候へ共、モハヤ此生涯中ニハソノヨウノ果報ハ願海ノ境涯ニアラズ。セメテ番茶ナリトモ斷ヘヌヨウニ願ヘ候也。鹽斗リニテハ何ニカ不足ノヨウニ思ハレ、時アリテハ味噌醬油ホシク候へ共、ソレモ願海房ノ境界ニテハナシ。他ノ大果報ノ事トアキラメ居候也。來世ハドウナリトシテ彌陀大慈大悲父ノ大願業力ニ加祐サレテ、極樂世界ニ上品上生スルコトヲ得テ、寶池寶林寶樓寶閣大寶宮殿中ニ寢タリ起タリ、百味ノ飲食百寶莊嚴ノ寶衣ニテ諸上善人俱會一處ニ逍遙遊樂申ス樂ミニ、今ノ貧乏ヲ堪忍念佛申居候也」

とあるので窺はれる。然し其の物質とは反對に精神生活は甚だ富裕だつた。同じ消息中に「充飢燒黃粟、待客摘溪芹、紙被生涯好、身貧道不貧」或は「薄粥度三歲月、此心未會貧」と云つてゐる。

願海が明王院へ棲むやうになつても、村人達は恐れ憚つて餘り近寄らなかつた。たゞ、藤八といふ夫婦者がお氣に入りで常に出入りしてゐた。と云つても定まつて行くわけではなく、竿の端へ木の札をした吊物が用意してあつて、用事のある時はこれを立て、目標にした。藤八は毎日其の庵の前を通つて炭焼に行つてゐたので、其の竿が眼につくと立ち寄つて用を辨じてゐたのだ。

そんな中でも書畫を樂むことだけは止めず時折は表具師などを呼び寄せたりした。願海が持つてゐた爲恭の作品は大概佛畫で、其の方面の傑作を網羅してゐて、葛川隱棲後も愛藏してゐたが、願海歿後弟子の亮海か誰か一車積んで運ばせて行つた儘何處ともなく散逸してしまつた。

明治六年五月七日、願海は此の葛川の草庵に於て遷化した。享年五十一歳であつた。

## 追記

## (一)

冷泉爲恭は逆賊の名を冠せられて志士の刃に斃れ、末路の悲惨なること、古今を通じて餘り類があるまい。彼の晩年の運命は、幕末維新といふ時代が造つた最も哀れな、最も残酷なる一篇の活悲劇だ。從來爲恭の事は餘り多く世の中に紹介されて居らなかつた。夙く篤志の爲恭研究家が居なかつた點もあるが、人は彼の末路を嫌惡するの餘り、其の作品をも愛好するに至らなかつたのが、一時爲恭の忘却された原因だつた。以前は關西地方などでも、爲恭と云ふと、「あれは曝し首になつた繪師だ」といふわけで一概に擯斥された。彼が殺された當時の話に、其の繪を破つて捨てたり、酒を附けるから只で貰つて呉れと云つたなどといふくらゐだ。明治以後我國は益々皇室尊崇の氣風が濃厚になり、其の結果として幕末慷慨志士の筆墨が大いに尊重されるやうになり、文人墨客と雖も時に筆を投じて國事に奔走すると云つたやうな人物でなければ、其の作品が重んじられない傾向があつた。然るに爲恭に至つては、眞偽は兎に角として、其の身は朝廷の繪所を預る身分であり乍ら、幕府の權臣と交り、大逆人の汚名を被つて田圃路傍に醜骸を曝した程の惡運の持主だからこれを勤王志士の畫家の光輝ある生涯と比較する時は、眞に天地霄壤の差違がある。爲恭が行はれざりしも



道理である。

爲恭の畫をやかましく云ひ出したのは僅々數年このかたの事だ。それは藝術上の立場から彼の作品が正當の理解と賞讃とを博して來たのである。當然の事とは云ひ乍ら喜ばしい現象だ。同時に爲恭の傳記や事蹟を研究する人もポツ／＼出て來た。全然捨てゝあつたとは云ふものゝ維新以後六十年の今日だから、歴史としてはさう古い事實ではない。材料は湮滅せず在つた。二三篤學の研究家の探索考證した結果、現在ではほぼ完全な傳記が出來てゐる。私の知れる範圍に於て、近來爲恭研究に就て有益なる發表された人々は、京都の藤堂祐範氏、江藤徵英氏、大阪の角田羽仙氏、丹波市の桂芳朗氏、東京の吉川靈華氏、紀州の逸木盛照氏等である。尤も爲恭の畫については從來定評があり識者は眞價を認めてゐたのだから、傳記方面でも古くから簡單な事だけは知られてゐる。故人前田香雪氏なども其の著後素談叢に「冷泉爲恭」の小傳を書き、其の末尾に「畫道の爲裨益を得んとて公武のいづれにも偏せず往來せしより、あらぬ疑ひを受けて非命に終れることかへす／＼もたましけれども、其危険なる時勢にくらして奇禍を得たるが即ち畫家の本分ならんかし」と云はれてゐる。正に爲恭にとつての知音と云ふ可きだ。大正十二年六月角田羽仙氏が大阪日日新聞に連載された爲恭の記事は非常に興味深く且つ有益な物だつた。氏は多く大阪堺邊の故老から直接聞き得た活材料を土臺にして書かれたやうである。それだけに頗る機微に亘つてゐる。最近では、今年五月京都の中外日報社から出版された逸木盛照氏の「冷泉爲恭」がある。逸木氏は粉河寺御池坊の現董主である。是れは一冊の傳記として殆んど完成された好著で、殊に爲恭と願海上人との關係などは、是れに依つて初めて闡明された形である。

ある。

大正十一年五月には、谷森眞男、吉川靈華、靱山半三郎三氏の主催で、東京日本橋俱樂部で爲恭追弔展覽會が催され多くの名作が出陳され、其の翌月上野寛永寺に於て爲恭六十年遠忌法要を修した。

同年十月五日には、奈良、丹波市の有志の手によつて、丹波市善福寺の無縁墓地なる爲恭の墳墓の上に一基の墓石が建てられた。それ以來、大阪、紀州、京都の各地に於ても、それ／＼有志の手に依つて爲恭の法要や展観が催された。

爲恭は今や古畫界に於ける最新流行兒となつた觀がある。信實以來の大手筆と稱された彼としては當然の事だ。

私は從來爲恭に就いては殆んど何も知つてゐなかつたが、唯斷片的に知られてゐる彼の藝術家氣質——それよりも古人によく見る處の類型的なものではなく、人間味の豊富な、謂はゞ近代的のほひのする藝術家氣質を面白く感じてゐた。其の藝術家氣質が禍して思はぬ悲惨な末路を見るといふ處にも、活きたドラマとしての興味を有つてゐた。で最初は之れを小説か戯曲にして見ようとも考へたが、然し畫人傳中にも逸す可からざる巨擘だから、ともかくも斯くの通りの物を書いて見た。が、筆が時々想像の世界へ飛び込むので、小説風の心理描寫を恣にし、是れでは或ひは故人から苦情が來ないとも限らないが、私の傳記は毎も斯うなんだから、看者は其の積りで御讀了を願ひ度い。

爲恭の生涯を通じて、繪畫製作の方面を除いたる最も重要な諸點は、浪士に狙はれたる眞の原因と、次が



願海上人との交渉、いま一つが妻との交渉——此の三つであらうと思ふ。浪士襲撃の原因に就いては本傳中に詳説して置いた積りだが、爲恭は決して佐幕派ではなかつた。事實は寧ろ勤王家に近かつた。少くとも其の何れにも偏してゐるのではなく、只畫事熱心の餘り朝暮何れの人々とも交際してゐたために遂に浪士の誤解を蒙るに至つた——といふのが、在來諸家の見解の一致する處だ。三條公なども、後年爲恭の事を物語りする都度彼の冤罪を憐んで「彼は故實を知るも、國事に奔走する如きものに非ず。故に雅事には面白き人物なりしも、遂に志士に誤られ、其の手に斃るゝに至りしは誠哀憐に堪へざりし」と語つたと云はれるし、又爲恭を殺した張本人の大樂源太郎でさへも後に至つて「別に殺さねばならぬ程明白な罪状はなかつたが、疑はしかつたから遣つ附けたのである。今考へると、斬らなくとも宜かつたと思ふ」と云つたといふ説などもある。事實とすれば亂暴極まる話だ。しかし、是れ等は皆爲恭を辯護する側の人達の云ふ處だ。兎角人は最眞目で見ると善い方ばかり考へたくなるものだ。例へば爲恭の王朝趣味を擧げて、彼は正しく王政復古を冀ふ者なりと判断するやうなものだ。何しろ現在の處では爲恭附きの辯護士ばかりで判檢事が居ない。此の邊の眞相に觸れるには往年の志士の先生にも出廷を求めて見なければ埒が明くまい。私としては、其處は幾分曖昧であつても構はない。假りに、若し彼が動かす可からざる佐幕派であつたとしたところで一向差し支へない。畫人冷泉爲恭の價値はそんな處には掛つてゐないのだ。

次に、願海上人との接觸は、彼の信仰的生活の一面と、學問上の見識とを窺ふことが出來、是れを深く詳しく研究することは爲恭を描く上に於て極めて重要な點だが、私の書いた傳記は其の重要な點に就いて甚だ不完全であることを恥ぢてゐる。

最後に妻の綾衣との交渉だが、茲に至つて人間爲恭の面目が最も躍動する。綾衣といふ女は非常な美人であつたゞけに頗る虚榮心が強かつたので、妻の虚榮心を満足させる爲めに爲恭は餘程無理な働きもしなければならなかつたと云はれてゐる。事件は此の邊に深因を發してゐるかも知れないのだ。

## (II)

八月の中旬頃京都へ行つた。畫の間は堪へられぬ程暑いけれども、東山の翠巒滴るばかりで京都は四季をわかたず氣持がよい。一日私は内藤湖南博士の紹介で、東山妙法院前の中外日報社に江藤徵英氏を訪ね、更に江藤氏と同道で知恩院山内信重院に藤堂祐範氏を訪問した。二家共に熱烈なる爲恭讚仰者で且つ其の研究家だ。藤堂氏は爲恭の代表作の一たる「忘形見」の所藏者で、其の他數種の作品や澤山の爲恭研究の資料を蒐集してゐる。大正十三年五月、關西考古會の發起で、知恩院に於て爲恭と蓮月の追慕會を催し、法要及び遺作展覽をし、其の時會員には藤堂氏の執筆になる「田米知佳」の一書を頒布した。瀟洒たる小冊ではあるが、爲恭研究の手引きとしては好箇の書である。猶表題の「田米知佳」といふのは、從來爲恭の名前の讀み方に就いてはいろ／＼あり、關西では多く「タメヤス」又は「タメチカ」と呼んで居り、關東では「タメタカ」と多く呼ばれてゐるが、「タメヤス」は俗間の稱呼で、彼自身は「タメチカ」又は「タメタカ」と呼んでゐたらしく、彼の自筆の文書の中に「堂米堂加」又は「田米知加」と萬葉假名で書いた物があるさうだ。該



書の表紙の體字は、其の「田米知佳」とある物を寫眞版にして載せたのもだ。

「忘形見」は非常にいゝ物だつた。是れは本傳中にもある通り、彼が粉河寺に在る間に描いた物で、願海上人の一代記が二卷の繪卷になつてゐる。卷頭に一片だけの別の繪が描いてある。春の野邊に童子が櫻の枝をかざして立つてゐるそれだけの圖だが、其の小さな畫面からは何とも云はれない幽玄な氣分が漂ふてゐて、たとへば尊い御寺に參籠してまどろむひまに得た夢のやうな暗示に富んでゐる。私は恍惚として卷を展べることを忘れたくらゐだつた。繪傳は密あり疎あり變化自在で、上人が參内して玉體を加持するの圖などは、殿上の有様及び御所林泉の實景を謹嚴に極密に描いてゐる。其の他の畫面を見ても、運筆の精練と意匠の巧妙に驚かされる。此の畫卷が藤堂氏の有に歸したのは近年の事ださうだが、どうして氏の手に入つたのか其の來歴を詳かにすると面白かつたらうが、聞き漏らした。猶、江藤氏と藤堂氏と協力して、知恩院にある爲恭の「法然上人繪傳」四十八卷の複製出版を計劃して居られるさうだ。是れが完成したならば美術界に貢獻する處多大であるべきは論を俟たない。一日も早く其の實現を望む次第である。

其の翌日私は大和丹波市なる爲恭が遭難の地を見舞はふと思つて、午前九時何分の汽車で京都を立つた。奈良から王寺行の汽車に乗り換へる。此の線へ乗るのは私は初めてだ。京終、帶解、櫛本——其の次が丹波市だ。茲は名におふ天理教本部の所在地だから、汽車の窓から眺めると、西も東も、天理教關係の建物ばかりだ。

先づ爲恭の墳墓に詣でようと思つて、驛から俾て善福寺へ向つた。善福寺は行基菩薩の開基といふ由緒のある古い寺で、現今は淨土宗であるが、天理教の中山家の舊菩提所であり、教祖のみき女も此の寺で五重相傳を受け、一時は此の寺に埋葬されてゐたといふので、有名になつてゐる。善福寺の現任職は桂芳朗氏と云つて、非常に篤學な郷土史の研究者で「大和史學」といふ雜誌を同人と共に出してゐる。大和史學に同氏が載せられた爲恭の記事は、土地の出來事だけに遭難前後の様子が詳しく分つて興味深いものだつた。序でに記すが、爲恭が隠れてゐた内山永久寺は維新後廢絶になつたさうだ。

丹波市町の南の端れに近い處から東へ入る道が内山へ行く道路だ。それを入つて狭い村道を十二三丁も行くと善福寺に達した。丹波市町のうち勾田といふ處で既に山にかゝつてゐる。玄關で案内を頼むと無造作にそれへ出て來たのがどうもそれらしいから「貴君が御住職ですか」と尋ねて見たら果して左うだつた。磊落で坊さんよりも讀書子といふ風采の人だ。座敷へ通されると直ぐ、貴君は西瓜は好きかと聞かれるから好物だと云ふと、臺所の方から眞紅な西瓜を澤山お盆に載せて持つて來て下さる。暑中炎天をやつて來た後だから其の西瓜の旨かつた事は今に忘れられぬ。私が爲恭の墓に詣つたり遭難の場所を見たりして行き度いと云ふと、

「では私が案内して上げませう」と、桂氏は云はれるのだが、今日の暑さは格別だ。餘りお氣の毒だから斷ると、

「然し、墓の方はとにかく、殺された場所は私が行かなければ分りません。それから、爲恭が殺された時それを目撃してゐた人が二人ありましたが、昨年一人歿して、まだ一人は達者で生き残つて居ります。生き證



人で是れ程確かな話はありませんから、御都合でそれへも御案内しても宜しいのです」

といふ話、私は大いに興味を唆られて萬端桂氏を煩はすことにした。間もなく氏は袈裟法衣に改め、念珠を頸に掛け、大きな扇子を持って出て来て、

「序でに一軒棚經をやつて来ようといふわけです」

寺の前の籤の際の細道を一丁餘り東へ行くと、向うの山との間に少しばかり田があつて、こつち側は雑木林になつてゐる。林の下に草蓬々たる平地が少しばかりある。其處には新らしい爲恭の墓が建つてゐる。碑石は三尺ばかり、臺石は二重で、立派な墓である。以前は墓も何もなく唯檜の木が一本立つてゐたばかりださうだ。檜の木を切つて其の跡へ墓を建てたのださうだ。碑面には「岡田爲恭墓」と刻してある。墓銘は、丹波市町の人で御歌所參侯を勤めた歌人桑原嚴雄氏の筆だが、桑原氏は大なる爲恭の讃仰者であつたが、今は古人となつてゐる。奈良市鍋屋町に彫刻家竹林高行といふ人がある。履中齋と號し、獨特の藝風を以つて夙に有名の人である。竹林氏の先代は爲恭と非常に親しく、爲恭も屢々竹林家へ来て居たものだといふ。従つて爲恭の遺作が澤山家藏されてゐるさうだが、今の高行翁も頗る爲恭を崇拜してゐる處から、竹林翁や桑原翁其の他二三の人々の盡力に依つて先年此の墓が建てられたのだ。

墓の側らに立つて前方を見ると、青田をへだて、松林の山が幾層も續いて見える。遠い山の彼方には白い雲がフウハリと浮いてゐる。山間で人を見ることもない。暗い感じはないけれども、周圍が草深く物佗しい。爲恭の骸はかういふ場所に葬られてゐるために、今では却つて人の同情を引いてゐる。が、都育ちで華

美な生活を慕ふてゐた爲恭は最後の瞬間までそんな事は考へてゐなかつたらう。彼は矢つ張り早晩は都へ歸れるやうな氣持がしてゐたに違ひない——さう思つて私は爲恭の非運に新たなる同情の涙をそそいだ。足許を見ると雑草の中に美しい鬼あざみが咲いてゐた。

再び寺の前を通つて可成り急な坂を下り、先刻通つた村道を桂氏と話し乍ら戻つて来る。と何時の間にか本街道へ出た。其處に「扇屋」といふ宿屋が昔ながらの古風な構へで残つてゐる。其の前を通る時桂氏は宿屋の主人らしい人が店にゐたのに向つて、

「今日は、お暑う御座います」

と聲を掛けると、先方でも、

「今日は、どちらへお出掛で？ えらうお暑いことですか、一ぶくしていらつしやいませんか」と云ふ。

「浪士が此の宿屋の二階に居て爲恭が永久寺から出て来るのを待つてゐたのですが、現在の人は其の時分の扇屋庄兵衛の子孫ではありません。代は替つたんですが屋號は同じで、家も此の邊は昔とさう變りはありませんからね」

と桂氏は歩き乍ら話す。扇屋から一丁ばかり行くと町は盡きて兩側田の處へ出る。風は無くて足を運ぶ度にポッポッと白い埃が舞ひ立つて焙じられるやうな暑氣だ。町から約三丁ばかり南へ行つた處で桂氏は「此處です」と立ち止つた。そして道の東側の西瓜が造つてある畑を指して、



「此の西瓜畑の處が、爲恭の屍を捨て、置いた場所です。昔は街道も恁んなに廣くはなく、漸う駕が往き返り出来る位の程度ですから、向う側の麥の畝の中からじかに駕へ突き刺したといふ話です」

半丁ばかり西へ寄つた處に永原村の用水池が今も残つてゐる。浪士が首を洗つた池だ。大徳と浪士とを乗せた三挺の駕が其の前を威勢よく通つたといふ永原村の御靈神社の森が田の中に見える。其の駕の中から朱鞘の業物がはみ出してゐたのを目撃した、植村松藏といふ老人は今でも存生でゐるさうだ。

東だけは山が近いが、他の三方は豁然として展開した田野のつながりで、遙かに西南にかけて、金剛、畝火、笠置、香久山の連峰が繞つてゐて、更に遠く吉野連山の雄姿が眺められる。北には生駒山が望まれる。

大和一圓を一陣に集めてゐる感がある。此の邊は十尺の地と雖も曾て歴史上の大事件を其の跡に印してゐない處は無いだらう。歴史ほど其の土地を美化するものはない。天の香久山を望み、金剛、笠置の山々を見てゐると、私の心は自から顛へて来る。眼を回して自分の立つてゐる足許を見遣れば、そこには何の奇も無い田舎道だが、曾て昔茲で一代の畫聖爲恭が凶刃に斃れ千古の憾みを傳へた場所だと思へば、路傍の草や土くれまでが彼の爲めに哀歌を囁いてゐるやうに感じられ、私は低徊去るに忍びない氣持がした。

暫くして元來の方へ戻る。町端れから一丁ばかり態々裏道へ入て見たりした。何の爲かと云ふと、それは二人組の浪士の一人が裏道を走つて、先廻りして駕の來るのを待ち伏せてゐたといふ其の裏道だからだ。片側は青田で、片側には古い板扉だの、壁の剝落した蔵だの、屋敷内の野菜畑などで、境に下水の溝が流れてゐる。

「此處こそは全く當時の儘でちつとも變つてゐる筈はありません」と桂氏はさも快心らしく保證する。

古めかしい町を五六丁も戻つて來た處に、雜貨、菓子、味噌、醬油等を賣る店があつた。其の店の前で、往來の上へ張つてある簀の子の日除けの下の椽臺に腰を掛けて、孫と遊んでゐるいゝお婆さんがあつた。桂氏は私に、

「此のお婆さんです」と云つて、それからお婆さんの背中をちよいと叩いて「お婆さん、今日は」と聲を掛けた。

「あれ和尙かな。どちらへお出掛やな」

とお婆さんは太鼓の胴みたいに圓くなつてゐる背中を起して和尙様の顔を仰ぎ乍らニコ／＼笑つてゐる。

「いや今日はネ、お婆さ、お前の話を聞き度いといふお客様が來たから御案内して來たんだよ」

「あれ、さうですかの」

と話してゐるところへ奥から主人も出て來た。

「此の家は私の處の親戚ですから御遠慮は要りません。とにかくお寄んなさい」

と桂氏は云ふ。店へ這入つて上り框の處へ腰を掛ける。と間もなくお婆さんが側へやつて來たので、桂氏は席を譲つてお婆さんと私とを差し向ひに掛けさせた。

「ようお出でなされました。どういふ御用か知りませんが、わたしはなあ、今年八十八になりましたの、もう永い事隠居して孫の守ばかりして居ります。六か敷い事やつたら知りまへんが、わたしで分ることなら



お話し申します」

お婆さんは最初會體の知れない私に、一體何事を尋ね出されるのか知らんと、少し心配やら警戒やらしてゐる風に見えたが、

「何、六か敷い事を聞くわけぢやないよ。それ、お婆さんが昔、街道で人が殺されたのを側で見てゐた話さ、あの話を聞かして貰へばいゝんだよ」

と桂氏が側から云つて呉れたので、お婆さんは急に安心して、

「はあ、あの事やつたら、いまだにわしはよう覚えて居りますよ。えらい恐い事でした」  
と前置きして其の恐かつた見聞談を綿密に話して呉れた。爲恭が殺された場所から少し先の畑で、當時廿幾歳だつたお婆さんはつれあひと一緒に茶種揉みをしてゐたが、午近くなつたのでお婆さんだけ家へ歸つて大急ぎでひるを食べ、つれあひの辨當を詰めたのを手に提げて元の畑へ出掛けた處が、町端れへ行くと自分の前を一挺の駕が行く。良人が嘸空腹だらうと思ふので其の駕の後棒にくつついてチョコ／＼走りにやつて行くと、突然彼の事件が起きたのだ。突かれる、這ひ出す、首を落される——とそれがすべて極く短い間の事だつた。お婆さんは遁げる暇も何も無い、駕にくつついた儘べつたり腰を抜かしてしまつたので、さつと迸つた血が其の裾にまで飛び散つて來た。あんな恐い事は無かつた——とお婆さんは云ふ。其首の斬り口はとうど鮪の輪切を聯想させるやうなもので、それから後永い間お婆さんは鮪の輪切りが食べられなかつたといふ話である。

お婆さんの話は大變よく分つて私は満足した。しかしそれにしても八十八歳などいふ高齢の人と相對して話しをした事は初めてだ。六十有餘年昔の出來事と云へば、我々の氣持では最早完全に歴史化されてしまつて現實味は殆んど乏しくなつてゐる。然るに此のお婆さんにとつてはそれが目前に見た生ま／＼しい經驗で、而かも當時既に二十五六歳であれば女盛りだつた。私は何となく、なが生きをするといふ事はエライ事だといふ氣持がした。此のお婆さんの名前は藤井ゑいといふのだつた。

厚く禮をのべて其の家を辭し、桂氏と一緒に停車場の方へ戻つて來、驛の前で桂氏と別れて間も無く私は奈良行の汽車に乗つた。

(三)

九月初旬、此の稿を起し始めて二三日経つた一日、私は三州岡崎へ行つた。岡崎の大樹寺の爲恭の畫を見て來ようと思ひ立つたのだ。岡崎といふ處は云ふ迄も無く徳川氏發祥の地で戰國の歴史では有名な土地だが、太平の世になつては所謂岡崎女郎衆と八丁味噌とを以て名が賣れてゐる位のもの、殊に市街が鐵道の驛から一里も北へはいつてゐるために、現今は益々時代から閑却されさうになつてゐる。驛から町まで電車が通じてゐる。其の電車に乗つて大樹寺までの切符を買つた。大樹寺の名は其の儘附近の地名になつてゐるのだ。町の手前に乙川といふ川がある。それから暫らく電車は町の中を走つて又やがて町を端れる。すると其處が大樹寺だ。名所案内が出てゐて大樹寺迄約五丁としてある。線路を踏み切つて村道を眞直ぐに西へ行くと自



づと大樹寺の門前へ出る。兩側一丁ばかり坊の跡で土塀ばかり残つてゐる。正面に大きな樓門があり、其の突きあたりが本堂である。境内は可成り廣く松が多くて閑寂としてゐる。

そも、此の大樹寺の縁起を尋ねると、後土御門天皇の御代文明七年松平四代の祖佐京進親忠の建立にかり、開基は勢譽愚底上人と申す。勢譽上人は後永正元年勅命に依り總本山知恩院二十三世の法統を襲ぎ、八年の後再び當寺に隱退し、永正十三年此の處で遷化した。左京進親忠は深く上人に歸依し、祖先親氏以來三代の廟所を當寺に移し、爾來松平家代々の菩提所、並びに祈願所たり、天文三年松平清康七堂伽藍を造營した。

永祿三年五月義元桶狭間に於て敗戦の時、徳川家康は尾州大高城に在つたが、義元の變報を聞いて近臣僅かに十八人を具して大樹寺に落ち入り、父廣忠の墓前に至つて死を決した。其の時當山十三代の住僧登譽天室和尚は家康の死を止め、欣求淨土の法味を説き、天下の治むるの道を悟らしめた。然るにすでに織田の軍勢は寺門を圍んで押し寄せた。登譽上人は少しも騒がず一山の大眾を集め武器を取らせ、白布を裁つて旗として厭離穢土欣求淨土と大書し、是れを押し立て、敵に對した。

此の時當時の納所に祖洞和尚と云ふ七十人力に堪ゆる豪力者があつたが、家康に隨つて表門へ向つた。敵兵は既に寺門に迫つてゐたが固く鎖してあるので攻め入ることが出来なかつた。家康時に十九歳血氣の若大將だから、早々門を開け、織田の勢を追ひ拂ひ呉れんと、佩刀をもつて門の貫木かんぎに二太刀三太刀斬り付けた。祖洞は今暫らく敵の進退を計らせ玉ふべしと逸る家康を押し止め、時期をおし計つて門扉を開き、祖洞和尚

家康の馬の口に従つて貫木を振り廻し、敵兵狼狽する間に味方の兵士も打つて出た。住持登譽上人も裏門から突出し、大いに戦ひ、遂に勝利を得、家康は首尾よく岡崎城に入ることが出来た。是れを大樹寺の陣と云つた。

家康は深く登譽上人に歸依し、天下を統一した後、右の貫木を神と崇めて祀らせた。舊幕時代には毎年貫木を江戸城に奉送し將軍禮拜するのが慣例となつた。

寛永年中二代將軍秀忠は更に寺内の規模を擴張し、三代家光に至つて完成した。現在の建物の中多寶塔は家康の建築であつて特別保護建造物となつてゐる。山門鐘樓總門裏門土藏等は此等將軍の遺物として今も保存してゐる。然るに偶々安政の初め祝融の災に罹り、本堂開山堂大方丈小方丈の諸棟は烏有に歸したので、十三代家定が是の再建に着手したが、同二年十月の大地震で再建築費節約となり、堂宇は建てたが華美な裝飾は見合せることになつて、従つて襖繪の如きも無く白の間に合ひの紙の素張りであつたので、時の住職は甚だ之れを遺憾に思ひ、自分の計ひで京都から爲恭を招いて畫かせたのであつた。爲恭は知恩院とは親しい間柄であり、又大樹寺は知恩院の有力なる末寺であつたから、其の緣故から爲恭が襖繪の相談に與つたのであらう。恁んな因縁から、京都を餘り出なかつた爲恭が斯かる遠隔の地へ來て、彩管を揮ふべき機會が造られたのだつた。

之に關する爲恭自身の筆になる目録文書が寺に残つてゐる。

御靈殿 母屋御障子 蓮の繪

冷泉爲恭



右安政第四曆九月日藏人所衆關白直廬預正六位下行式部少丞藤原朝臣爲恭

御裝束  
奉仕之時  
昇殿

菅

菅原朝  
臣爲恭  
之印信

大方丈

上段圓融院天皇子日御遊之圖  
下段三條左大臣實房公茸狩之圖

鶴之間

牡丹之間

鐵仙之間

杉 戸

東遊、柳陰浴馬、花籠、蘇鐵麝香、鶯鶯鳴、布袋和尚、郭公、巖鷹

右永德十一世孫伊勢守永泰三男

安政四年秋九月日藏人所關白直廬預正六位下行式部少丞菅原朝臣爲恭

小方丈

御障子

春秋山水

杉 戸

松 櫻

瀧 楓

淵明觀南山

右安政四年秋九月日藏人所衆式部少丞爲恭

印

印

印

借て些か拜觀の際の印象を記して見よう。

大方丈上段下段二の間は何と云つても爲恭が最も全力を注いだ物で、また彼の特色が遺憾なく發揮されてゐる。是れは御成りの間で、二室とも八疊敷だが、上段の間は六尺の床、脇床は違ひ棚になつて居り、明り通りの書院窓があるほか、片方の壁、他の二方は襖である。そこで繪は天井を除く外の此の室全體へ一つの畫題が描いてある。二つの床は勿論、側面の壁、鴨居の上の小壁まで、隙き間なく描かれてゐる。金箔金泥極彩色の密畫で精緻絢爛の妙を極めてゐる。一口に云ふと繪卷物を室全體へ擴大して描いたやうにも見えるが、繪卷と相違する點は、畫面に首尾兩端の無い事で、何處を見ても繪は聯絡してゐるのである。障壁全部に畫くことは昔は寺院などによくあつた形式ださうだが、かういふ極密極彩色の畫を見るのは私は初めてだ。床の壁のやうに凹凸のある箇所や、襖や小壁のやうな全然異つた物の集まつてゐる澤山の面を集めて、それへかゝる老大な一箇の畫圖を箆め込むといふことは、構圖を立てるばかりでも容易な業ではあるまいと、素人乍らも作家の苦心に想到した。それから彩色の點だが、箔も泥も繪の具も極上の物を使つてゐるから絢爛眼を奪ふやうであり乍ら、下品なケバ／＼しさが微塵もない。勿論數名の助手を使つてやつた仕事には相違無いが、色の調子に何處といつて狂ひは無い。運筆の老練は云ふ迄もない。實に何の點から云つても驚く可き大手腕と云はなければならぬ。

下段の間も同じ意匠に成る物だが、此の方は四面共襖で、且つ床といふ物がないから、上段の間に比べたなら餘程仕事は樂な道理である。



此の二室を見て私はいろ／＼いゝ經驗を得たが、細かい筆の上で感心したことは、人物を描くに當つて、主上の玉影や其の他重要な人物は謹嚴なる筆を以て寫し彩色も丹念に施してあるが、他の多くの人物になると誠に無造作な筆つきで描いてあり、衣服其の他の着色も側へ寄つて見ると可成り亂暴で粗忽で繪の具を落したかのやうにボタ／＼に施してあるから、一寸見ると何んだか失敗してゐるやうな氣がするが、それが少しく距離を置いて眺めて見ると悉く人物が生動して來て、彩色の亂暴で汚らしいのが却つて深味を持つて見えて來る事だ。徒らに丁寧に塗り上げてある繪ではない。

右の二室と並んでゐる鶴之間、牡丹之間と私は順序に見た。此の二室は十二疊敷で、四面襖である。其の次が鐵仙之間十五疊位ある。此處で一ぶくし乍ら茶をよばれた。案内をして下さる所化さんが、

「昔は鶴之間へは五十萬石以上の大名でなくては入れなかつたものださうです」

といふ。それから最後に小方丈を見た。此の室には例の御貫木が祀つてある、がそれは無論拜まれない。兩面の襖八枚に水墨の春秋山水が描かれてゐる。非常なる略畫で、僅かに數筆を以て瀟洒たる風景を描出してあるが、其の輕妙なることは土佐派の筆とは思はれない。先づ探幽とか文晁とか云ひ度いところだ。

廊下に、直徑三寸長さ五尺位の八角の杖が箱に入れて置いてあつた。例の貫木を振り廻はして敵勢を追ひ拂つた祖洞和尚が、九州から上つて來る時、此の杖を突いて來たのださうだ。重さが五貫目あるといふ話だ。後庭を見ると、神君お手植の椎の木と松の木が、三百何十年の雄姿を誇つて、碧空一杯に枝をひろげてゐた。

河 鍋 曉 齋



(一) 畫 鬼

舊幕の頃、下總國古河の藩主土井家の家臣に、河鍋喜右衛門といふ者があつた。喜右衛門は元來は武家の出でなく、同地の穀商龜屋某の二男だつたが、河鍋家の養子となつて其の家を相續したのだつた。喜右衛門の妻は名を豊と云つた。石州濱田の松平氏の藩主三田某の女だつた。夫婦の間に男子二人をもうけた。長子を直次郎と呼び、次子を周三郎と呼んだ。次男が生れたのは、天保二年卯年四月七日だつた。處が、其の翌年のこと喜右衛門は急に土井家から暇を取つて江戸へ出ることになつた。それは、幕府の定火消同心に甲斐某といふ家があつたが、仔細あつて其の株を喜右衛門が買つて出たのだつた。火消同心などといふものはお話しにならない小身ではあるが、それでも直參であり、それに何彼と相應に役得はあるのだつた。で喜右衛門は一家を擧げて江戸へ移住し、爾來甲斐姓を名乗つて、御茶の水の火消屋敷に住むやうになつた。併し、喜右衛門は、舊姓の河鍋家を斷絶させてしまふことは忍びないところから、次男の周三郎に河鍋の姓を繼がせることにしたのだつた。

周三郎は極く幼い時から繪が好きだつた。どんなに泣いて困る時でも繪をおもちやに與へれば屹度おとなしくなつた。繪を描くことは知らないで、只それを玩具にして遊んでゐるのだつた。彼が三つの時だつた。母は其の子をつれて上州館林在青柳村といふ處の田口七右衛門といふ親類の家へ行つたことがあつた。周三郎は母と一つの駕に乗つて伴を一人つれて行つた。其の途中、田圃路で伴の者が蛙を一匹つらまへて駕の中



の周三郎に遣ると、周三郎は其の蛙を紙袋へ入れて脇へ置いて、それから茹で玉子を取り出して殻をむき、小笹の枝を短く折つて玉子の腹へさして蛙の形をこしらへて母と伴の者に見せた。親類の家に着くと直ぐに紙を貰つて、矢立の筆で、袋の中の蛙を取り出して眺め乍ら蛙の繪を描いた。自然に筆法が備はつてゐる其の繪を見て人々は驚いた。周三郎が自分で繪を描いたのはそれが初まりだつた。四つ五つになるともう習はなくても上手に描けるやうになつた。で父の喜右衛門は「此の子は繪師にするに限る」と考へてゐた。

喜右衛門は、周三郎が七歳になると、一勇齋國芳の許へ悴を入門させて正式に繪を習はせることにした。國芳は姓は井草、俗稱孫三郎、一勇齋と號した。又朝櫻樓とも號した。江戸の産で、元は京紺屋の徒弟だつたが、性來畫才があつて習はずして染物の上繪を巧に描いた。後一世豐國の門に入つた。文政の初め、錦繪を二三枚畫いたところが是れが比較的よく賣れて多少世間に認められるやうになつた。そこで地本問屋から俳優の似顔繪を描いてくれと云つて來たので、國芳は承諾して腕を揮つて畫いて見たが、此の方はさつぱり受けなかつた。當時、彼と兄弟弟子であるところの國貞の繪が専ら世間に行はれてゐた。國貞の繪の濃艶なのに比べて武骨な國芳の繪は少しも世間から歡迎されなかつた。爰に於て國芳は大いに考へて、貧苦を忍んでますます畫法を研究した。そして文政の末年に至つてから、水滸傳中百八の像を描き、錦繪として賣り出した處が是れは素晴らしい好評だつた。それが國芳の賣り出しだつた。當時評して、武者繪は國芳、俳優繪は豐國と云つた。國貞が三世の豐國を襲いでゐるのだつた。

一勇齋國芳

國芳は、浮世繪以外の畫法をも研究して、筆力の秀勁なること、歌川の門流多しと雖も、彼に及ぶ者は一

人も無かつた。彼は性質甚だ江戸つ兒的仁侠の風を有つてゐた。羽織袴などは着たことがなく、夏なれば縮緬浴衣に三尺帯を締めて何處へでも行くといふ風だつた。交際する人間も、火消だとか、町奴だとか、所謂市井無頼の徒に近い者が多く、其の行狀甚だ下等だつた。

喜右衛門は、一旦悴を國芳の門に入れたことは入れて見たが、つらく國芳の性行を見るに餘りに下賤なので、周三郎が其の風に染まることを畏れて一年ばかりで廢めさせてしまつた。そして今度は前村洞和といふ狩野派の繪師を師匠に取らせた。

前村洞和

狩野洞白  
(駿河臺  
狩野)

前村洞和は山内家の繪師で、本郷に住つてゐたが、彼もまた頗る異數の經歷を持つてゐる人物だつた。其の家は非常に貧乏だつたので、洞和が若い頃は父と二人で市中を引火奴を賣り歩いて漸く糊口を凌ぐ有様だつた。で毎日商ひに出ると、駿河臺觀音坂の狩野洞白の邸の前を通るのだつた。彼も繪が好きだつた。そこで門内へ這入り込んで覗いて見ると、廣い畫室で大勢の門人達が思ひ／＼に繪を描いてゐる。それを見て彼は「あゝ羨しいなあ」と思つた。自分もあの人達のやうに立派な先生に就いて繪を習つて見度いものだと考へた。が、引火奴を賣つて歩く境遇では、そんな事は夢にも覺束ない。仕方がないから諦めてまたしほしほと引火奴を賣つて歩く。翌日もまた駿河臺を通る。彼の足は識らず／＼狩野家の門へ引き寄せられて、窓の外に停んで羨しさうに覗いてゐる。それが何時しか洞白の眼に留つた。洞白はめずらしく思つたので、或る日其の若い小商人を中へ呼び入れ紙を與へて繪を描かして見た。すると、習つた繪ではないが不思議に能く描くので、洞白は感心して、若干かの金を與へて自分の家塾に置いて修業させることになつた。卒業して、



洞和といふ名を師から貰つた。それから一家を成したのだつた。

洞和は大に周三郎を愛して、其前途に望を囑してゐた。洞和はいつも此の少年の弟子を呼ぶのに「畫鬼畫」と云つてゐた。それほどに少年周三郎は天才的だつた。

或る年、それは周三郎が九歳の年だつた。夏の初め頃五月雨が降り續いて、其の揚句の大雨で諸所の川が一度に出水して大騒ぎになつた。神田川も水が岸に漲つて渦巻いて流れてゐた。平常見られない有様だつた。周三郎は其の頃寫生に熱中してゐた。彼は初めて見た物は何でも寫生せずにはおかなかつた。で、川の出水を見ると、水流を寫生しようと思つて、雨があがつたのを幸ひ御茶の水の櫻の馬場の前から谷間をさして下りて行つて、船荷の揚げ場へ行つて水勢を眺めてゐた。と其の時、何やら藻のやうな物が流れて來て彼の足許へ引つ掛つた。何氣なく其の藻のやうな物を掴んで引き上げて見ると、それは男の生首だつた。「きやつ」と云つて抛り出すと、生首は揚げ場の上でコロ／＼と轉がつた。周三郎は仰天して直ぐ様遁げて歸らうと思つたが、其の時ふつと彼は考へて「此の生首を寫生して遣らう」と思つた。これまでも人形師の作つた人形の首ならば何遍も描いたことがあるが、實物の生首を見るのは今が初めてだ。「恠んない、お手本はないぞ」と周三郎は考へた。そこで水流の方は後廻しにして、其の生首を拾ひ上げて袂で隠しながら抱えて我が家へ戻つて來たが、家には大勢人が居るので持つて這入ることが出来ない。周三郎はあたりを見廻したが思はしい隠し場所が無いので、一先づ物置の中へそれを入れて置き、何喰はぬ顔をして家に戻つてゐた。それから少し後のこと、下婢が、薪を出さうと思つて物置の中へ這入つて行つた。すると、うす暗がりの處に何か變

な物があるので、側へ寄つて見ると、炭俵の上に生首が載つてゐて、半眼に開いた眼で彼女の顔を睨めてゐる。「きやつ」と下婢は悲鳴を上げて物置の外へ轉がり出た。人々は其の聲に駭いて飛んで行つて見ると、此の有様なので仰天したが、段々調べたところそれは周三郎が神田川から拾つて來た物だといふことが判明つたので呆れてしまつた。併し、せつかく周三郎が寫生しようと思つて拾つて來た熱心を思ふと頼母しくもあるが、後難が恐ろしいから、元の場所へ持つて行つて、其處で寫して來たらよからうと云つた。周三郎は又もや生首を風呂敷に包んで以前の荷揚げ場へ持つて行つて、其の場で寫生をした。往來の人がいつの間にか是れを見だして、大勢周りに立つて眺めてゐた。周三郎は描き終ると、家から持つて來た觀音經を書いた紙で生首を包んで、川の中へ押し流してやつた。

國芳の許へ通つてゐる時分のこと、或る時國芳は李龍眠の水滸傳の人物畫を出して周三郎に見せて、自分が武者繪の筆法を會得するに至つたのは、此の李龍眠の繪が非常な助けとなつた。お前も後來は此の繪を研究するがいと云つた。それから猶師匠は、武者繪を描くには、譬へば突然人を投げ出したり、投げ出されたりする時の身振りや、或ひは組み伏せて、反ね返さうとする體などを、平常よく心を留めて置き、其の意氣込みを描かなければいけないと云つて教へた。

周三郎は何時も國芳の言葉を胸に置いて、喧嘩でもあると眞つ先に驅けて行つて、取つ組み合ふ様子を側へ寄つて眺めてゐた。

「何處かに喧嘩はないかな」周三郎は喧嘩を探し／＼歩いた。



其の頃の江戸ツ子は氣が早いので直ぐに喧嘩が始まつた。口論をする暇は無く、ボカ／＼となぐり合ふのだつた。一寸盛り場へでも出掛けると屹度一つや二つ喧嘩に遇つた。さうして周三郎は活物教育を授けられた。或る日も周三郎は裏町を歩いてゐると、突然長屋の方から罵り合ふ聲と、ドタンバンといふ格闘の物音が聞こえて來たので、彼はソラ來たとばかり長屋をさして飛び込んで行つた。

「さあ此の阿魔ア、太え阿魔だ」

「何んだい此の宿六め、殺さば殺せ、ヒイ」

長屋の者は毎度の事と見えて、ひっそり閑と鳴りを鎮めて仲裁に行く者もない。周三郎が一人門口に立つて熱心に眺めてゐた。終ひに亭主の方がそれに氣が付いた。亭主はかみさんを組み伏せてゐた手を弛めてノツソリと起き上ると、極り悪さうな顔から痲癩聲を張上げて、

「やい小僧、何が面白くつて人の喧嘩を見てゐやがるんだ」

周三郎は驚いて遁げ出した。

### (二) 駿河臺狩野

天保十二年頃から、師の洞和が病氣になつた。病は腦の病氣だつた。それがだん／＼悪くなつてしまひには繪の稽古も出來難くなつた。そこで洞和は自分の師である狩野洞白の許へ周三郎を紹介して入門させた。今度は通學は許されず其の畫塾で生活をしなければならなかつた。併し入門したと云つてもまだ本統の門人

に列したわけではなく、學僕として住み込むので、終日内外の雜用に使はれて畫學の時間とは少しも無かつた。師からは手本も貰へなかつた。周三郎は夜だけ自修の時間が得られるので獨りで畫を稽古して、鶏鳴を聽くまでは決して床に入らなかつた。居ること二年で初めて臨本を與へられ門人に列した。狩野の家法として、最初は寶珠を描かせ、次に花卉翎毛を學ばせ、運筆や自由になつた處で古人の遺墨を模寫させるのだつた。

そも／＼狩野家は、足利以來の畫史の名家で、代々徳川將軍の繪所を預る家柄だつた。宗家は中橋にあつて、是れを中橋狩野と云ひ、萬石以上の格式を有つて暮してゐた。支族凡そ十二家あつたが、守信を祖とし鍛冶橋に住する者を鍛冶橋狩野と云ひ、尙信を祖とし木挽町に住する者を木挽町狩野と云ひ、宗家を併せて以上を三家と稱へた。三家に續く者は、蜂信の後裔である築地狩野、益信の裔たる駿河臺狩野等が最も顯はれてゐた。季頼、知信、長信、宗也、重郷、各々それらを祖とする支族があり、木村永光を祖とし世々京都に住する者を京狩野と稱へた。此の外門下から出て、一人一世狩野を稱し畫史を以て諸侯に仕へる者は數ふべからざるほどあつた。

當時駿河臺の狩野洞白は、狩野派を通じて名手だつた。周三郎は、古畫の臨模をする傍ら暇さへあれば寫生して歩いた。

或る日は彼は雜司ヶ谷の法華宗妙法寺の仁王尊を寫生に出掛けた。此の寺は有名な鬼子母神のある處で、其の仁王尊は古來運慶の作と傳へられてゐる。周三郎は餘念なく寫生をしてゐたがふと氣が付くと、陽はすで

狩野三家  
中橋狩野  
鍛冶橋狩野  
木挽町狩野  
京狩野



に彼方の森に沈み、四邊は暗くなりかけてゐる。彼は驚いて歸途に着いた。目白臺から水道町へ下り、水戸侯の百軒長屋（現今の砲兵工廠の一部）の邊り迄來た時はもう夜の八時頃だつた。此の邊は一面の屋敷で、夜になれば火の影も見えず、人通りも稀であつた。其の時突然道の傍から白刃を提げた男が三人現はれて周三郎に襲ひ掛つて來た。周三郎は駭いて遁げ出した。すると後から賊が追ひ掛けて來た。一生懸命走つてゐるうちに、運よく賊の一人が小川に架けた石橋を踏み外して川の中へ箆り込んだので、他のものがそれを救ひ出してゐる暇に周三郎は漸う遁げのびて、水道橋外の青木新五兵衛と云ふ人の家に遁げ込んだが、其處は知り合の家だつたので一晩泊めて貰ひ翌朝狩野塾へ歸つた。其の話をすると人々は駭いて、

「先づ怪我がなくつてよかつた」と云つた。

が周三郎は、前夜夢中で逃げた時、大切な寫生畫帖を落してしまつた。折角色々な物を寫生して保存して置いた其の畫帖を失つたことは、彼に取つては可成り大きな損害だつた。周三郎がしよげてゐると、其の日の午過ぎ、一人の僧が狩野塾を訪れて、

「御當家に河鍋周三郎といふ人が居りますか」と尋ねた。

周三郎が出て對面すると、僧は、

「愚僧は傳通院の正眼と云ふものですが、今朝早く水戸邸の傍を通ると、往來に斯様な品が落ちてゐました。拾つて改めて見ると駿河臺狩野塾河鍋周三郎といふ名前が記してあるので、只今用事の戻り掛けでお届けに參つたのです」

と云つて彼の畫帖を渡して呉れた。周三郎は喜んで、實は斯々爾々と昨夜の出來事を物語つた上、其の有様を繪に描いて見せたので、僧は面白がつて其の繪を持つて歸つた。

周三郎の寫生に對する熱心は非常なものだつた。其の頃の狩野派の畫家は、大概粉本に依つて畫を稽古してそれで善しとする風があつたが、彼は粉本以外に何でも彼でも寫生するのだつた。宇宙の森羅萬象悉く形を究めなければ承知出來ないと云ふ調子だつた。勢ひ彼の寫生癖を裏書きするやうな逸話が幾つもある。

弘化二年丙午の正月十五日、本郷丸山阿部侯の土地から出火した火が、折柄の西北の強風に吹き煽られ本郷を焼き拂つて止まらず、神田に燃え移り、日本橋、京橋と一直線に焼き拂つて、最後に佃島迄燒いて鎮火した。有名な丸山火事といふのがそれであつた。此の火事の時、周三郎は實家へ歸つてゐた。本郷三丁目の方から二丁目一丁目と進んで來た猛火がしまひにお茶の水をも襲つたので、彼の家では附近の櫻の馬場へ避難した。しかし、櫻の馬場は其の界限唯一の避難所なので、八方から遁げ集つて來る人と荷物とでさしもの廣場も身動きのならぬ程になつてしまつた。其の頃、本郷三丁目に住んで、幕府へ諸鳥類の御用達を勤めてゐた越前屋といふ家があつた。此の家では平常、雁、鴨、鶴、孔雀などあらゆる鳥を飼つてゐたが、矢張り火を避ける爲めにそれらの鳥を悉く籠へ入れて櫻の馬場へ運ばせた。處が、後から／＼と人々が荷物を運び込むので、最後には其の荷物にまで火が燃え付いて來た。其時分は周三郎の家の火消屋敷が旺んに燃えてゐた。廣場へ遁れた人々も今は生きた心地は無かつた。荷物にまで火が付いて來ては自分達も此處で焼け死ぬかも知れないと思つた。其の時越前屋の主人は「どうせ此處も危険だとすると此の先鳥を持つて遁げることに



は所詮不可能だ。さうして見す／＼焼き殺してしまふのは不びんである」と思つたので、籠の蓋を開けて鳥を放つて遣つた。籠から離れた澤山の鳥は一度に空に舞ひ立つた。火の光が翼の色に映じて、ちやうど花と紅葉とを一度に撒き散らしたやうだつた。特に孔雀の美しさに人々は「アレヨ／＼」と云つて、火事の恐ろしさも忘れて空を見上げてゐた。すると、鳥は明るい方へばかり飛んで行くので、最後には皆火に焼かれ、或は煙に巻かれ、空にも居溜らず、クル／＼と舞ひ落ちるのだつた。其の有様は、何とも云ひ難い哀れな、併し珍しい光景だつた。

周三郎は、恁んな時でも手放さない例の寫生帖を取り出して荷物の上に跨がり乍ら、家の焼け落ちる様や鳥が空に舞ひ立つ有様を寫生してゐるのだつた。すると手傳ひに来てゐた彼の親類の人がそれを發見して大層憤つた。「此の騒ぎの中で吞氣らしく繪など描いてゐるとは何事だ」と云つて周三郎はひどく叱られた。彼はあやまつて漸う勘辨して貰つた。

後年彼は鯉を描くことに妙を得た。所謂三十六鱗の割り出し方なども特別の方法で研究したのでつた。鯉魚の圖は、古來應學に及ぶものはなかつた。應學は游泳中の鯉も描いたが、鯉の瀧登りに至つては殊に迫眞の趣があつた。瀑布登鯉の圖は、高田敬輔から出て、楫取魚彦等が専ら描いた畫題だつた。高田敬輔は名は隆久、竹隱齋と號し、法眼となつた。享保頃の人で、近江日野に生れ、僧古磻に就いて畫を學んだ。

楫取魚彦は下總の人で、國學を加茂眞淵に學び、畫を建部綾足に學び、殊に鯉魚と梅花の圖を善くした。けれども、鯉魚の圖は應學に至つて初めて完成したのでつた。鯉の瀧登りの如き事實に見られぬ畫題を描いて

高田敬輔

僧古磻

楫取魚彦

而も全く迫眞の氣がある處に、應學の寫生の巨腕が知られるのだつた。應學或る時鯉を描くと、一漁夫が是れを見て「是れ生魚に非ず、死魚なり」と云つた。應學が駭いて其の仔細を尋ねると、漁夫が答へて「鯉の游泳する時は晴眼が必ず一方に偏してゐるものだ。然るに此の鯉は晴眼双つながら同じ位置にある。即ち死魚の眼である」と云つたので、應學は大いに感服してます／＼寫生に丹精を凝らしたといふ傳説がある。近年福田平八郎が帝展に鯉魚の圖を出品して一躍畫名を噪がれた。傳へ聞く處に係ると、彼は三年間別府温泉に在つて鯉の寫生のみしてゐたといふことである。鯉魚の千態萬形は悉く腦裡に納められて、そしてあの作が生れたのだとすると、彼もまた寫生の名手と稱すべきである。

或る時周三郎は大川へ網打ちに行つた。諸所で網を入れたが目ぼしい獲物も無かつた。段々上手へ漕いで行き、最後に三圍の土手下で網を投じると、驚くべし三尺もある金鱗の大鯉があがつて來た。周三郎は狂喜して早速網を納め、船を漕いで神田川を戻つて來て昌平橋から陸へ上つた。塾へ歸ると大盤臺に水を張り、其の中へ鯉を放つた。一同の者も、周三郎の手柄話をき、此の鯉を見ては流石に駭いた。周三郎は直ぐ様鯉の寫生に取り掛つた。彼は八方から鯉の形を寫生した。

「どうだ河鍋、もう鯉の寫生は濟んだか」其處へ大勢朋輩達がやつて來た。

「濟みました。どうか一つ見て下さいませんか」と云つて周三郎は何枚もの寫生畫を出して見せた。

けれども朋輩達は繪の方などは顧みもしないで、

「どうだ、よく肥えてゐる鯉だな」



「是れが所謂正銘江戸前の鯉といふ奴さ。やつ張りこく鹽が一番いいだらうな」

そんな事を云ひ乍ら、やがて俎板を持つて来て縁側の方へ据ゑる者もあれば、大皿や大鉢を運んで來るものもある。一人が庖丁を持つて俎板の前に控えると、大勢で鯉の盤臺を縁側の方へ運び掛けた。最前から駭いて見てゐた周三郎は、

「何をするんです。此の鯉は池へ放して遣るつもりなんです」

「莫迦な事を云へ。貴様が寫生したいだけ寫生したんだから、後は一同が腹中へ葬つて供養をして遣るのが當然だ」

「否え、それは成りません。私は今此の鯉を寫生して大變發明したのです。だから此の鯉は私の爲めには鯉を描く事の師です。私は此の鯉を不忍池へ放つて遣る積りで居るのだから、殺させるわけにはいきません」

「何を生意氣な。ふだんは人一倍亂暴な小僧のくせに今日に限つて殊勝らしい事を吐し居る。食ひたくなければ貴様だけ食はずに居れ。さあ〜運んだり〜」

周三郎は何故か、此の鯉を殺すに忍びなかつた。彼は一生懸命盤臺の縁を押へてゐたけれども、一同の者は頓着なく奪ひ取つてそれを縁側の方へ運んで行つた。一三人掛りで鯉を捕えて俎板の上に載せた。そして一人が庖丁を把つて、まさに料理に取り掛らうとした瞬間であつた、鯉はすさまじい音を立て、高く跳ね上つた。

「あッ」

駭きながら見ると、其の時鯉の口中から、何やら金色の氣の様なものを吐き出したのだつた。一同はそれですつかり恐れてしまつた。早速元の盤臺へ移し、一同でそれを擔いで不忍池へ持つて行つて放して來た。

鯉の口の中から吐き出した金色の氣のやうなものは、みんな見たと云つたがそれは何であつたか解釋は付かなかつた。が、周三郎は此の時から鯉を描くに當つて、人の心付かない不思議な筆意を得たといふことであつた。

それはとにかく、周三郎の畫道は其の頃から長足の進歩を遂げた。古畫の鑑定などにも長けて來た。狩野塾には毎月一回鑑定會といふものがあつた。其の日は諸家の所藏の古畫を借りて來て、會席に臨んでは、落款印章を隠し、投票に依つて筆者の名を中てさせるのだつた。中らなかつた者は金一朱を罰金として徴收される規則で、會員は大概二十人位だつたが、其の罰金を集めて當日の會費を償つてもまだ餘りがあつた。周三郎は滅多に一朱を取られるやうなことはなかつた。

塾生の生活も年長になれば可成り自由だつた。晝の間は自身の研究をしたり、師匠の仕事の手傳ひをさせられたりするが、夜は何處へも勝手に行かれた。淨瑠璃端唄の稽古に行く者もあれば、踊の師匠へ通ふ者もある。或ひは寄席へ行つて遊んで來る者もある。周三郎は能が好きだつたので能の師匠の處へチヨク〜通つてゐたが、月謝が高いから熱心に通ふわけにもいかなかつた。すると、洞白の妾に石川姓の婦人があつて後に貞光院と云つた婦人だが、此の人が或る時周三郎に向つて、

「そなたはよく勉強するさうだが、それでも何か道樂がありますか」と云つて尋ねた。



で周三郎は、私は能狂言が好きだけれども費用が掛るので稽古が出来ませんと云つて答へると、貞光院は大層喜んで、自分も幼い時から能狂言が大好きである。そなたもそれほど好きな事であるならば今後其の費用は妾が辨じて上げるから良い師に就いて學んで見たらよからうと云つて呉れた。周三郎は大に喜んで、貞光院の後援を受けて狂言師大藏彌太夫の門に入つて稽古をした。貞光院はよく周三郎に向つて「そなたが三番叟を踏む處を一遍見度いものだ」と云つてゐたが、遂に其の約を果さぬうちに貞光院は歿してしまつた。周三郎は其の事を大に悲しみ、後の事だけれども、貞光院の三回忌に相當する日に、彼は上野護國院の其の墓前に於て、笛、太鼓、大鼓、小鼓の囃し方を集めて、生前の約に従つて三番叟を舞つて手向けをしたのだつた。

嘉永二年十九歳で彼は卒業した。そして剃髮して、師の洞白陳信の一字づゝを貰つて、洞郁陳文と稱するやうになつた。卒業をする時は免狀を貰つたが、是れは中橋の宗家から出るのだつた。其の報酬金は二百匹（金二分）だつた。さうして一人前の畫工になると同時に、剃髮して僧體になるといふことも、狩野家に古來定められてゐるところの家法だつた。

(三) 放 縦

嘉永年間、日光東照宮の御神忌に當り、總御廟修繕の工事があつた。幕府は天下に令を下し國內の名畫史を選んで古畫の手入れをさせることになつた。狩野洞白は繪所の畫史であるから勿論其の選に入つて、門人

狩野櫻春、河鍋洞都外二名の畫工を引き連れて日光へ行つて久しく仕事をして來た。其の出來榮えが宜しかつたところから、續いて西丸紅葉山御殿の修復について御用附屬を蒙り、又古畫の修繕をした。其の後芝山内黒本尊御堂修復の時も洞白が命を蒙り、洞郁等が助手として働いた。其の時洞郁は狩野探信の描いた雄の孔雀の彩色をしたが、出來榮えが拔群であつたので厚く賞された。此の數度の幕府御用の畫事を勤めたことに依つて、河鍋洞都は俄かに世の中から認められて來たのだつた。

卒業する前頃からの洞郁の性行は、急に變つて來て、彼は其の頃から酒と女の味を覺え始めた。併し、遊蕩はしても一方畫事にかけては人一倍熱心なので、師匠も比較的大目に見てゐた。すると嘉永三年のことで或る時師の洞白から養子に行くことを勧められた。先方は矢張り洞白の門人で秋元藩の御抱畫師坪山洞山の處だつた。洞郁は養子に行つて窮屈な思ひをするのは餘り氣乗りがしなかつたが、恩師の周旋と云ひ、殊に彼の兩親などは大喜びで賛成しちまつたので、斷ることが出来なくなつて到頭養子に行くことになつた。坪山洞山名は成章、濱町の藩邸に住んでゐた。先方には娘があつてそれと夫婦になるわけだが、其の娘といふのも餘り纏綴はよくなかつたので、洞郁は内心それも氣に入らなかつたが、併しどうでも厭だと云ふほど嫌ひでもなかつた。満足したわけではないが、我慢して、その後は品行も慎み、溫和しくしてゐた。養父の洞山は極く濃厚で、昔から品行方正の人だつた。が其の代り繪は誠に下手だつた。

かうして半歳位は洞郁も至極神妙にしてゐたが、もとい／＼自分から進んで來た養子でないだけに、考へて見ると莫迦々々しくなつた。養家の娘に對しても愛情は持てなかつた。以前の自由な生活が戀しくなつた。



が今更急に離縁して呉れとも云へないので弱つた。養家へも氣の毒だが、師の洞白に對してもそれでは義理を缺くことになる。で辛抱してゐたけれども、其の辛抱が續かなくなつた。彼は又もや以前のやうに遊蕩をやり出した。酒を飲み歩いて家に歸らないやうなことがしばしば出来てきた。持ち前の性分もあるが、かうして遊蕩三昧をやつたならば、最後には養父も愛想を盡かして離縁してくれるだらうと洞郁は考へたのだつた。養家でも呆れてしまつた。併し養父は養父で、矢張り仲人の駿河臺の先生に氣兼ねをして、不埒な養子を離縁することも出来ずにゐた。それともう一つは養子の腕前に惚れ込んでゐるのもあつた。

其の頃、霞ヶ關の黒田家で、普請が出来して、畫の用が澤山あつた。黒田家には、尾形洞宵、同探香等の畫師がゐたが、此の時に限り、秋元家の畫師坪山洞山、養子洞郁、其の外數名の町畫師が雇はれて行つて、書院、障壁、襖等の繪を描いた。多くの畫工の中へ立ち交つても、洞郁の技倆は獨り立ち勝つて見えた。其の筆力縦横で意匠の卓拔なものには誰れでも感嘆しないでは居られなかつた。そこで黒田家では洞郁に對しては養父に拂ふよりも數多い報酬を與へたのだつた。此の畫事は三年の長時日を費して漸く完了した。

此の畫事に従事してゐる時の事、或る日洞郁が黒田邸の繪所の物見へ出て往來を眺めてゐると、丁度其の下を盛装した御殿女中が五六人揃つて通り掛つた。すると洞郁は何んと思つたのか急いで降りて行つて、邸を出て、其の女中達の尻に隨いて行くのだつた。さも好色らしく女の尻の邊を眺め乍ら四五丁も隨いて行つて漸う戻つて來た。するとそれを或る人が見てゐて、後で養父洞山に向つて是れ〱だつたと云つて告げたので、物堅い洞山は大に怒つて早速洞郁を呼び付け、

「かういふ事を人から聞いたが事實か」と云つて糺した。

「左様で御座います」

「誠にどうも呆れ返つた次第だ。天下の畫史ともある者が、而も勤務中、往來の婦女子の尻にくつついて歩くなど、は怪しからんはなしだ。俺は其の話を聞いたばかりで實に赤面してしまつた。それほど女の尻に隨いて歩き度かつたなら、繪師を廢めて藝者の箱屋にでもなるがい」

かう云つて叱られると洞郁は駭いて、  
「否、それは違ひます。私は決して、好色の爲めに女の尻に隨いて行つたわけでは御座いません。實は其の御殿女中の締めて居つた帯の模様が誠に珍しい模様でしたから、それを寫生して見度くなつて後を隨いて行きましたのです」

と云つて、寫生帳を出して見せたので、養父は一言もなく沈黙して了つた。

狩野洞榮

嘉永四年六月、狩野洞白が歿して、其の子洞榮が駿河臺狩野の家を繼いだ。

洞郁の放蕩はますます劇しくなつて、今では殆んど邸へも歸らない有様になつた。洞山もほと〱愛想が盡き、嘉永五年の暮になつて離縁にしまつた。養家を追ひ出されても洞郁は無論悲觀しなかつた。寧ろ束縛の無くなつた現在の境遇を喜んだ。併し、實家の方でも彼の放埒を怒つてゐるので殆んど足踏みも出来なかつた。又、駿河臺の師匠の家とても義理が悪く、それに恩師洞白が歿して洞榮の代になつた今日では殊に其處も面白い行先ではなかつた。何處にも行き所の無くなつた洞郁は放浪生活をしてゐた。それは反つて



彼自身の性分に適してゐるやうに思はれた。

かうなつても彼は決して生活には困らなかつた。それは彼の技倆が助けて呉れるのだつた。彼は雜貨屋の仕入れの風の繪だの、羽子板の繪だの、或ひは繪馬などを描いて錢を取つた。そして、さういふ雜貨屋だの繪草子屋などといふ家に居候をしたり、懇意な髮床屋の二階にくすぶつてゐたりした。髮結床の障子の繪なども描いて遣つた。錢がはいれば直ぐ様妓樓に走つて行つて有るだけ飲んでしまふのだつた。

さういふ荒んだ生活はしてゐても、畫の研究は一日も怠らなかつた。彼が最も自由に他流の繪畫を研究したのは此の時期だつた。土佐、光琳派、圓山、四條、浮世繪から漢畫の範圍まで、一切に亘つて研究した。健腕無類の洞郁の畫は日に月に進歩するばかりだつた。

腕達者の洞郁は、仕入物の繪を描くばかりでも可成の錢が取れたが、彼は常に囊中一物もなく、汚れた着物を着て、あちらこちらとさ迷ひ歩くのだつた。

#### (四) 地獄極樂

安政五年、二十七歳の時洞郁は妻を迎へて初めて一家を成した。妻は於清と云つて、鈴木其一の次女だつた。其一是抱一の門人で、當時光琳派の大手だつた。其一是洞郁の非凡の手腕に敬服して、浮浪人同様の生活をしてゐた洞郁に愛娘をめあはせることになつたのであつた。

本郷四丁目の藥師堂境内にさゝやかな借家をして、世帯を持つた。其の費用は父の喜右衛門が出して呉れ

た。そして父は洞郁に一ヶ月分の生活費を與へて、其の月中に次の生活費を自分で稼ぐやうにと云ひ付けた。洞郁も眞面目になつて働いた。其の頃世間の人が、毎月繪馬を荒神様に上げる習慣があつて、其の仕入の繪馬を雜貨屋で賣つてゐた。洞郁は主に此の繪馬を描いて生活費を稼いだ。畫料は一枚が文久二文即ち三厘だつた。洞郁は畫の間は自分の勉強に費し、夜業に繪馬を描いたが、熱心に描いたので、最初の一月に一兩二分を働いた。處が、夫婦の生活費は三分で足りたので、一ヶ月で三分餘分が出来たのだつた。

其の後彼は錦繪を主に描くやうになつた。横山町の辻文、兩國の大黒屋、芝の和泉屋等が當時一流の繪草紙屋で、洞郁はそれらの店から、注文を受けては描いた。更に後には日本橋の萩原、通四丁目の金花堂などといふ店の物も描いた。洞郁の描く錦繪は、浮世繪風の艶麗な美人もあつたが、主に武者繪が多かつた。それが國芳の感化から來たものであることは云ふまでもなかつた。彼は全體非常に國芳を崇拜してゐた。幼年時代に彼の父は國芳の悪感化を恐れて彼を國芳の門から去らせたのだつたが、併し其の感化は既に腦裡に浸み込んでゐて遂に生涯を支配するやうになつてしまつた。彼は國芳を尊敬して、其の繪を見る時には必らず拜一拜して、然る後展べて眺めるのだつた。國芳の影響には長所もあれば短所もあつた。彼は遂に生涯を通じて素行も十分傳承して、放縱不羈に流れ、殊更に下等社會に興味を有つやうになつた。彼は遂に生涯を通じて素行は修まらなかつたが、然し乍ら恩義に感ずることは非常に厚かつた。彼の二度目の師である前村洞和が歿したのは、彼が家を成す前の嘉永六年だつたが、洞郁は師の病中にも絶えず見舞ひに行つて小遣錢などを貰いでゐた。洞和は永の煩ひで窮してもゐたが、腦病が進行したので晩年は痴呆の様になつてゐた。洞郁は洞和



が死ぬと、父を亡つたやうに嘆き悲しみ、其の後は自分で洞和の肖像を描いて掛軸に作り、忌日々々には必らず其の前に茶菓を供へて拜するのだつた。後には更に面打師出目源助に依頼してそれを肖像に彫刻させ、佛壇に入れ置いて朝夕禮拜してゐた。

洞和は斯うして世の中へ乗り出した。畫史として、江戸の一隅に旗幟を立てた。併し社會は容易に彼を認めて呉れなかつた。それは時世も非だつた。文化文政の黄金時代を一轉期として社會の景氣が下火になるにつけて、繪畫の流行は日に衰退に赴くばかりであつた。そこへ例の文人畫の壓迫を蒙つて來たので、文人畫以外の繪畫を以て優越の地歩を占めようといふのは容易ならぬ業だつた。餘程の特色を見せない限りには世人は顧みて呉れなかつた。

彼は、何か新機軸を出して世人を驚かせやうと考へた。そして、鳥羽僧正の筆意に倣つて一種の狂畫を描き始めた。其の時分から彼は惶々狂齋と號した。

鳥羽僧正は所謂鳥羽繪の元祖である。僧正は名を覺猷と云ひ、覺圓僧正の弟子で、大僧正となり、天台座主に補せられたが就かず、長承六年に青蓮院に寂した。鳥羽僧正の父は、今昔物語の著者宇治大納言隆國である。僧正は畫技に長じ、特に戲畫を描くに巧だつた。其の構圖が奇抜で、筆致の雄勁にして輕妙なること後代の名匠も及ばず、平安末期に於ける縉流の畫家中最も傑出してゐた。多く鳥羽に住したので、世に鳥羽僧正と號するのだつた。

狂齋の戲畫は巧みに世人の嗜好に投じた。其の飄逸簡狂の筆は前後に無類と稱せられた。それに依つて彼

は一躍畫界の流行兒となることが出來たのだつた。けれども、其の畫風は彼の本意ではなかつた。

文久二年の八月、兄の直次郎が歿した。直次郎は幼少より父の側にあつて學問武藝を學び、砲術に長じてゐた。爲に江川太郎左衛門の配下に屬してゐたが、資性沈勇にして慈愛の念に富んでゐた。或年中濱萬次郎と一緒に鯨獵をしたことがあつたが、其の船が南洋で颶風に遇つて覆へるばかりになり、船中周章狼狽して爲す所を知らなかつた時、直次は一刀の下に帆柱を切り倒して漸く一行の命を救つたのだつた。彼は非常によく弟を愛して其の面倒を見て呉れた。狂齋が放浪生活を送つてゐた時分、親知己の悉くが彼に愛相を盡かしてしまつても、兄の直次郎だけは見捨てずに可愛がつて呉れたのだつた。で母親などはよく周三郎に向つて「お前も早く兄さんのお世話にならぬやうにならなければいけない」と云つたものだつた。其の兄に死なれたことは狂齋に取つて精神上の大打撃だつた。

其の頃の話である。或る日狂齋の家の門口へ一人の乞食が來て合力を乞ふた。躰車に乗つて獨りで押し歩いてゐて、齡頃は七十に近い老爺だつた。丁度其處に狂齋が居合はせたので見ると、其の老爺は確か以前彼の實家などへ仕事に來たことのある左官の佐十といふ男に相違無かつた。併し其の佐十なら立派な腕を持つてゐる職人だつたから、いかに老い朽ちたにしても乞食にまで落ちぶれるとは餘り意外だつた。

「お前は佐十ぢやないか」と狂齋が云ふと、躰足は驚いて狂齋の顔を見て、

「へえ……左う仰つしやる貴君様は？」

「見忘れたかな、火消屋敷の甲斐の二男の周三郎だよ。お前よく家へ仕事に來たつけぢやないか」



「へい、甲斐様の若旦那様で。どうもお見せもうして失禮致しました。併し恁んな態でお目に掛つてまことに面目次第も御座いません。お屋敷の皆様はお變りも御座いませんか」

「うん、親共は壯健だが、去年兄貴が死んだよ」

「それはどうも、一向存じませんでした。確かお兄様は直次郎様と仰しやいましたな。まだお若いのに御愁傷様で御座います」

「どうも壽命で仕方が無い。時に佐十、お前も見れば片輪になつて氣の毒だが、物貰ひをして歩くといふのはよくくだらうな。とにかく此處では話しも出来ない。家へ這入つて茶でも飲んで行くがい」

「滅相な旦那様、恁んな汚ない態でお宅へ上れますものですか」

「構ふもんか、俺んとこだつて乞食小屋同様なんだ。それ、手を貸して遣るからまあ一寸上るがい」

狂齋は無理に佐十を家の中へ引入れて、それから種々事情を尋ねた。此の佐十といふ男は、元越中の生れだが、職人で若い時から江戸へ出て暮らしてゐたのだつた。佐官としては滅多に人に負けないだけの腕はあつたが、生涯子供を持たずにしまつた。處が近年齡を取つて仕事が出来なくなつた所へ、脚の病を煩つて躓になつてしまつた。女房はたうに死んで、誰れ一人世話をする者も無い。國元の親類と云つた處で、何十年も不通にした後で、躓になつてから世話をして貰ひ度いとも云つて遣れず、此の土地の知り合ひの者として、躓になつた佐十を見ては皆顔を反向けてしまふのだつた。

「是れもみんな若い時分から極道をした罰が中つたんだと諦めちやあ居りますが、情無いことに死に切れず

に恁うして今ちや乞食とまで落ちぶれたやうなわけで御座います」と佐十は云つた。

「左うか、それあどうも困るだらう。併し、其の體で物貰ひをして歩くのも大變なわけだ。何かいゝ工天がありさうなものだがなあ」

狂齋は、如何にも佐十が氣の毒で、どうかして救つて遣りたいと考へた。彼は暫時腕を拱いて思案してゐたが、

「や、いゝ事を思ひ付いた。俺に一つ工夫がある。そいつをやればお前も滿更乞食をしなくても濟むだらう」  
「有難う御座います。どんな事をやるんで御座んすか」

「いや、もう少し待て、二三日中によく考へて置くから、今日はまあ歸んなさい」

と云つて狂齋は若干かの錢を佐十に與へて、二三日過ぎてからもう一遍訪ねて來いと云ひつけて其の日は歸した。云はれた通り二三日経つと佐十はやつて來た。すると狂齋は其の間に大幅に地獄極樂の圖を描き上げてあつた。それは細川玄以が作つた能狂言朝比奈地獄めぐりから思ひ付いた畫意で、近年地獄界が不景氣になり、閻魔大王以下の冥官一同生活難に脅やかされてゐるのに反して、極樂界は非常な好景氣だと聞いて魔物の物共何れも極樂へ行つて仕官の道を求めるといふ筋で、貧乏な鬼共は各々角を切り、角細工にして旅費に充て阿彌陀の本廳へ行つて勞働に従事するといふ、諷刺と滑稽に富んだ複雑な戲畫だつた。狂齋は其の畫意を丁寧に佐十に教へて、

「お前はこれから縁日のやうな場所へ行つて、此の繪を掛けて置いて俺が今云つたやうな事を面白く話して



聞かせるのだ。別段見料を取るわけぢやなくても、屹度相當にお賽錢が上るだらうと思ふから試しに一つやつて見るがいゝ」

と云つた。佐十は大に喜んで狂齋の指圖通りにやつて見た。すると果して見物人は、其の繪の奇拔な構圖を口々に賞め、或ひは極樂の諸菩薩に隨喜して、各々其の場で賽錢を投げるのだつた。佐十が覽車を押してやつて来たから狂齋は、

「どうだつた」と云ふと、

「先生様、どうもハヤ大した御利益です。お賽錢が恁んなに上りました」

と云つて佐十は錢を出して見せた。

「左うか、それは先づよかつた。ではこれから毎日方々へ出張るがいゝ」

「へい、もう恁んなに儲かつちや私も廢められません。處で先生様、どうか此の内から宜しいだけ貴君の上前をお取んなすつて下さゝい」

「莫迦ア云へ、俺が乞食の上前をはねられるものか。お賽錢はそつくり貴様の物だ」

「それぢや餘りうま過ぎて冥利が盡きやすねえ。濟みませんで御座んすねえ」

「なあに、いゝから仕舞つとけつてば」

佐官の佐十はそれから毎日縁日を廻つて歩いては、地獄極樂の繪を諸人に見せた。彼はそれに依つて意外の利益を得て、神田橋本町に一戸を買ひ、氣樂に餘命を養ふことが出来たのだつた。

### (五) 戸隠の畫龍

慶應元年三月下旬のこと、狂齋は信州旅行を志して、門人松本留吉を伴れて江戸を發つた。一體狂齋は旅行嫌ひで、これまで滅多に江戸を外にしたことはなかつた。出たと云つても大概武藏或ひは房總地方に限られてゐた。だから自然彼の畫は多く市井の生活や物象に題材が取られてゐた。彼は、人物、神鬼、翎毛、麟甲の類を描くの妙を得、狂怪戲諷の筆を下すに當つては變化窮り無く、奇想百出人をして絶倒せしむるの才があり、又神怪氣形を筆端に驅使するの力に至つては近世に其の比を見なかつた。確かに葛飾北齋以來の健筆だつた。が、山水は彼の長所ではなかつた。彼が旅行嫌ひであるのも所因のあることだつた。

其の狂齋が信州旅行を志したのは珍らしい出来事だつた。併し彼は其の頃頻りに山を描いて見度くなつた。峻巖の陰晴、幽谷の雲霧、激流岩に咽び、瀑布玉を吐くの有様、さういふ物が描いて見度くなつたが、それには親しく實地を目撃するの必要があるので、さてこそ今回の旅行を思ひ立つのだつた。

狂齋と留吉は上州を経て、赤城、榛名、妙義の山々を寫生して、信州に入った。往々信州の諸山を寫生して、同國高井郡小布施村といふ處に高井三九郎といふ人を訪ねる目的で、須坂町を経て小布施に向つた。其の日は空も晴れ渡り、風は無く暖かで、絶好の春日和だつた。旅の楽しさがひとしほ加はつて來るのだつた。狂齋と留吉は道々話し乍ら景色の佳い山道を歩いて行つた。すると行手に當つて一本の松の大本があつたが、其の枝振りが實に面白いので寫生することにした。



「留吉、お前火をたいて酒の支度をしろよ」  
「宜しう御座います」

留吉は枯枝を拾つて来て路傍で火をたいて、用意の酒道具を出して瓢の酒を温めた。狂齋は先づ酒を煽つて、それから寫生に取り掛つた。留吉も寫生を始めた。さうして二人が餘念無く寫生をしてゐると、突然背後から、

「やいッ」と呶鳴つた者があつた。驚いて振り返つて見ると、年頃四十位の雲助みたいな人相の悪い男が尻をまくつて突つ立つてゐた。

「やいッ、うぬ等あ誰れに斷つて己れの地所で火をたきやあがつた。さあ勘辨ならねえぞ」と、其の男は云つた。

狂齋は餘り其の男の出様が荒いのでぐツと癢に障つた。それに彼だつて酒の勢ひがある。

「何、勘辨ならぬ。火をたいたのが何が悪い。燃える物も何も無い原つばぢやあないか」

「此の野郎太えことを吐かしやあがる。原つばだつて磔だつて人の地所で黙つて火をたきやあ火付けも同じ事だぞ」

「火付けだと、火付けなら逆磔刑だ。磔刑に出来るものならして見るがい」

「野郎もう勘辨ならねえ。此處は松代領だぞ。今に見てみやあがれ」

かう云ふかと思ふと、其の男は踵を返してとツと向ふへ驅けて行つた。

「口程にもない。こつちが二人で敵はないと思つて遁げて行きやあがつた」

「どうも先生は氣が強う御座いますね。彼奴にやられた日にやあ二人だつて敵やしませんよ。私はビク／＼して居りました」

「臆病な男だ。江戸子が信州邊りの田吾作に脅かされて溜るもんか」

狂齋は喧嘩に勝つたやうな心地で、いゝ心持だつた。それから道具を仕舞つて、火を消して、一丁ばかり來ると茶店があつた。茶店へ寄り込んで濫茶を啜り乍ら、婆さんに今の話しをすると、

「それは此の村に住んでゐる權十といふ奴でがんです。悪い奴でがんですよ。屹度仲間を伴れて來てお前様等を捕めへて、お金でも強請る氣に違えございませんだ。早く遁げてしまはつしやらぬと飛んだ目に遇ひますべし」と婆さんは云つた。

すると狂齋は忽ち蒼くなつてしまつた。

「留吉、大變な事になつた。早く遁げよう」

茶代を置いて其處を出たが、此の道を歩いて行けば直ぐに捕まつてしまふと思ふので、二人は道の無い雜木林の中へ紛れ込んで滅茶苦茶の方角をさして遁げだした。石に躓き蔓に搦まれ漸うのことで林の中を出ると、行手に谷川が流れてゐて橋は架つてゐない。途方に暮て立つてゐると、其處へ一人の牧童が牛を牽いてやつて來た。これ幸ひと狂齋は牧童に頼んで二人を牛へ乗せて向ふ岸へ渡して貰つた。それから三里ほど歩いて漸う小布施の高井の家へ着いた。



高井三九郎は土地の豪家で、代々其の家は酒造を営んでゐた。三九郎は畫を好んで、青年時代に京都へ遊んで岸駒の門に入つた。すると或る時岸駒が門人を集めて、當代の畫史の品評をした後で「今京阪其の他に畫工は多いけれども、我が腕に敵する者はない。唯一人おそるべきは江戸の葛飾北齋である」と云つた。其處で三九郎は直ちに江戸へ來て北齋に入門したのであつた。さういふわけで北齋とは師弟の間柄であるので、北齋も天保二三年の頃此の土地に遊んで、三九郎の家に一年間滞在した。信州を遊歴する畫工は大概一度は高井の家に草鞋を脱ぐのが常だつた。

主はもとより狂齋の畫名を慕つてゐたので、其の來遊を非常に欣んで迎へた。狂齋は數日滞在して、諸方から依頼される畫を揮毫して、小布施を立つて善光寺へ向つた。其處から善光寺へは三里だつた。善光寺では佐渡屋といふ旅籠へ泊つた。そして此處でも依頼の畫を描いたり、留吉を伴れて方々寫生をして歩いたりした。もういつの間にか五月雨の時節となつてゐた。

其の雨が連日降り續くので狂齋師弟は外出が出来ず、宿屋で酒許り飲んでゐた。さうかうしてゐるうち雨量ますます多くなつたので、到頭諸川が大洪水となり、殊に筑摩川が氾濫したので沿岸の村々は水難を蒙つて大騒動になつてしまつた。宿屋で退屈してゐた狂齋は其の話を聞くと、態々水害地へ出掛けて行つて其の慘狀を寫生した。

其の頃、戸隠神社の中院の本社の建築が落成したが、其の天井の龍を描くものがなくて、一山の神官僧侶が悉く是れで頭を悩ましてゐた。戸隠山は善光寺の西方五里、四面巍峨たる高山を以て圍み、當山の中院は



河鍋曉齋筆 龍頭觀音像





思兼命、寶光院は表春命、奥院は手力雄命、地主神は九頭龍權現鎮座し、三谷一山に坊舎三十六院、社領千石、造營料三百石、御供米料八十石の大社だった。

さて天井の畫龍を揮毫さすべく畫工が無くて困つてゐる折柄、近頃河鍋狂齋が善光寺へ來てゐることが分つたので、三十六坊會議した上、別當勸修院から使者を遣はして狂齋を迎へることになつた。狂齋は快諾して、奉納で描くことを約束した。翌日彼は戸隠へ向つた。

狂齋は山へ登つた日から毎夜御手洗の瀧を浴びて、それから三十丁ある奥の院に參拜して祈願を籠めた。そして結願の後漸く筆を執ることになつた。

中院の拜殿は天井の大き十間四方で其の周圍が小張りの合天井になつてゐた。其の日は一山の神官僧侶は勿論遠近の人々が聞き傳へて見物に來たので、さしもの本社も立錫の餘地なく人の山をなすばかりだった。狂齋は先づ、三合入の大盃を三杯傾けた後で、筆を執ると、十間四面を頭一つで掩ふかと思ふばかりの大龍を描き出した。人々は息を呑んで眺めるのであつた。

其の畫龍は七日間で描き了つた。そして上へ張り上げて見ると其の出來榮えは更に一入だった。雲も風も見る人の頭上に迫つて來るやうに感じられた。それは狩野派正統の筆法を用ゐて描いたもので、筆力の豪宕古今に比類があるまいと思はれた。諸人の驚駭譬へやうもなかつた。此の畫は彼が生涯を通じての傑作の一つだった。

そこで一山の人々は、更に龍の周圍の格天井をも揮毫して貰ひ度いと云つて頼んだ。それは全部で六十八



枚あつた。そして是に對しては畫料は望みに任せようと申し出たのだつた。けれども狂齋は今度は斷つた。彼は思つた。今から更に六十八枚描いてゐたら描き上げる時分には冬になつてしまふ。冬迄此の山に引き留められてゐては叶はないと彼は考へた。初めは珍らしくて有難かつた山上の生活も最早其の單調さに飽き飽きしてしまつた。早く山を下りて白粉臭い巷の旨い酒でも飲まなければ遣り切れなくなつてゐたが、そろそろ江戸も戀しくなつてゐた。江戸の事を考へるともう一日も山に居る氣はしなかつた。で、遁辭をまうけて斷つたのだが、人々は承知しなかつた、是非共描いて貰ひ度いと云つて歸して呉れなかつた。仕方が無いので狂齋は格天井を描き始めた。そして漸う八枚描いた。餘す處まだ六十枚、前途遼遠だ。彼はうんざりしてしまつた。別當所では狂齋主従が遁げて行くことを恐れて、門番に命じてあつて二人を門の外へは一步も出させなかつた。

「留吉、どうも弱つたな、何とかして遁げ出す工夫はないだらうか」

「さうですね。併し晝間は見張りが厳しくつて、とても見付からずに遁げるといふことは六か敷う御座いますね」

二人はゴソ／＼相談して、或る晩こつそり荷拵へをして、闇に紛れて別當所の庭から崖を下りて遁げ出さうとした。が何分暗さは暗し、勝手が分らぬのでマゴ／＼してゐるうちに或る家の裏口へ行き當つた。其の家は門前の掛茶屋だつた。そこで茶屋の者を呼び起して「どうか内證で表へ出して貰ひ度い」と云つて頼むと、先方はもとより狂齋の顔を知つてゐるので「はい、承知致しました。少々お待ち下さいまし」と云つて

待たせて置いて早速此の事を別當所へ注進してしまつた。二人は又もや引き戻されてしまつた。併し、最早所詮留まる意志の無い事が分つたので、一山の人々協議の上狂齋主従の下山を許すことにした。格天井の残りは明年の春再び登山して揮毫して貰ひ度いと云ふので、狂齋は唯々として承諾したのでつた。

當山中院天井畫御奉納の所時季冷氣御揮毫難相成依テ來陽御登山皆成候様奉願候以上

八月一日

戸隠山別當所印

河鍋洞郁様

かういふ書付を貰つて狂齋は戸隠山を下りたのだつた。併し彼は其の後再び戸隠山へ登らなかつた。格天井の繪は八枚だけで、残りの六十枚は現今でも白木の儘である。

狂齋は山を下りると直ぐ松本の方を志して發足した。松本から四里手前の稻荷山といふ宿で泊つた。此處は商家が軒を並べて繁昌の地だつた。すると此の土地に油屋五郎右衛門といふ人があつて、風流閑雅で畫を好むところから、狂齋を我家へ招待してさまざまにもてなした。頃しも中秋明月の時で、空も晴れて靜かだつた。狂齋は同好の人々の案内で更科の月を觀に出掛けたりした。そして江戸へ歸つて來たのは九月の初めだつた。

(六) 醉 狂

明治の世となつた。狂齋の畫名はますます／＼高くなつた。明治初年東京の畫壇で文人畫以外の大家として並



び稱せられたのが、柴田是真と狂齋であつた。是真と狂齋とは、繪畫の上に於て全く同じ傾向を有つてゐた。是真は岡本豊彦に就いて四條派の精髓が學んだが、一家を成すに當つては、古今の雅俗を自家の藥籠中の物として獨特の意匠を以て、所謂町繪風の輕妙にして洒脫な繪を描いた。それはちやうど狂齋が狩野の正統から出て浮世繪を描き、飄逸怪奇の狂畫を描いたのと同じであつた。そして此の二人は、亡びてしまつた江戸時代を代表する掉尾の畫家であると同時に、やがて来る内外諸流融化的の次ぎの時代をも照すところの大きな明星であつた。

狂齋は本郷から湯島四丁目の當時大根畑と云つた處へ住居を新築して引き移つた。其處では能舞臺などを建て、頗る宏壯な建築だつた。彼は旺んに畫作をした。洞郁陳之、惺々狂齋の名の外に、畫鬼、畑狂者、酒亂齋、雷醉、惺々庵、賣畫、狂者外史、賣畫道人、惺々狂者、如空入道などと様々の號を用ゐた。

彼の道樂は能だつた。狩野塾以來能の稽古を續けてゐたので今では餘程上達してゐた。併し自身もそれが大自慢で少し酔ふと直ぐさま舞ひ出すので、門人などは毎度弱らせられた。能面を蒐集する事も附隨した道樂だつた。しまひには古刻の能面を數百貯藏するやうになつて、暇さへあれば取り出して楽しんでゐた。

併し、狂齋に取つては、酒以上の好物は無かつた。若い頃のやうに放蕩はしなくなつたが、酒は何歳になつても止らなかつた。酒量は一度に二升位は樂にやつた。性質は淡白で、金づかひは綺麗だつた。何處へ行つても酒だけは遠慮無く飲んだ。畫の謝禮なども正直に金を包んで持つて来るより、酒の二升も提げて來れば本人は其の方が餘程喜ぶのだつた。

其の頃厩橋に能舞臺があつて、或る日狂齋は其處へ行つたが、酒を出されたので例に依つて飲んだ。鯨飲飽く事を知らず大醉して、歸途についたが、途中で路傍に倒れ石を枕として鼾聲雷の如く、通行人を驚かした。すると巡查がやつて來て引き起すと、狂齋は大いに怒つて巡查に向つて小便を引掛けるといふ體たらくで手が付けられないのだつた。さういふ失敗がしばしばあつた。甚だしい時は醉興に乗じて亂暴を働くのだつた。

彼は平常は非常に溫良な男で、物を云ふさへ遠慮勝ちな程だつた。それが一朝酒を飲むと此の有様なので數々の失敗を演じた上に、とにかく人から嫌はれるのだつた。此の酒癖の爲めに狂齋は生涯を通じて餘程の損をした。けれども、彼が一度び酒に元氣を得て筆を揮ふ段になると、筆端雲湧き龍躍り、墨痕縱横に飛動して眞に人を驚かさやうな畫を作るのだつた。だから、酒が一面に於いて彼を誤つてゐたと同時に、他の一面に於ては酒が彼を活かしてゐるとも云へるのだつた。不思議なことには、どれ程大醉した時でも、翌朝は必ず二時三時に起きて平常の通り畫作をした。決して宿醉をして仕事を怠けるやうなことはなかつた。それは彼が精力絶倫で且、萬事に規則正しい性格だつたからである。

明治三年十月六日の事だつた。其の日不忍辨天の境内の長蛇亭に於て、俳人其角堂雀志が主催で書畫會の催しがあつた。狂齋は其角堂とは年來の友人であるので此の日席上揮毫を頼まれたが、几帳面な男なので早朝から出掛けて行つた。すると會場には主催者の其角堂がたつた一人來てゐるばかりで、畫家も來客もまだ一人も顔を見せなかつた。其角堂は非常に喜んで早速酒を命じて二人で飲み始めた。其角堂も大の飲み手だ



つたので二人切りで盛んに飲んで、愈々會が始まる頃には三升餘りの酒を飲み盡した。狂齋は非常に酔つてゐた。

席上揮毫が始まると、狂齋は多くの人の依頼に任せて縦横に筆を揮つた。人々は狂齋に揮毫を頼む時は、めい／＼盃の代りに茶碗だの井を差し付けて「先生一つ献上致します」と云つて波々とそれへ注いでから、さて扇面なり唐紙なりを差出すのだつた。彼は酔ふに従つてますます健筆になり、奇々妙々の物を描き出すので、人々は争つて彼に大盃を差し付けては揮毫を依頼するのだつた。

狂齋は早や六七升も傾けた。さすがの彼も今は泥の如く酔つてしまつた。すると其の時彼の近くで誰だか分らぬが恠んなことを云つて聲高に話してゐた。

「今日私が王子へ行つた處が、一名の異人が騎馬で遣つて来て扇屋の店へはひるんです。馴染と見えて女中共が飛び出して来て、旦那今日はお一人で御座いますかと云ふと、その西洋人が、否え一人ではありません馬鹿を二人伴れて來ましたと答へるから、妙な事を云ふと思つて見てゐるとね、少し遅れて鬚を生やした立派な官員が二人矢張り騎馬で遣つて來たぢやないか。どうも驚いたよ」

其の話しが狂齋の耳に這入つた。すると狂齋は何と思つたか忽ち筆を執つて、有り合ふ紙へ、足長島の人物に或る人が二人で靴を履かせてゐる圖と、手長島の人物が大佛の鼻毛を抜いてゐる圖をも描いた。足長島と大佛の顔は西洋人を模してあつて、靴を履かせたり鼻毛を抜いたりしてゐる人物の面相は、當時廟堂に立つてゐた二二の大官の顔に似てゐるのだつた。

それから暫く經つた頃、突然數名の役人がドカ／＼と會場へ闖入して來た。不意の出來事に駭いて、忽ち會場は總立ちとなり、大混亂に陥つた。人々は譯も分らず周章てふために、取り持ちの藝妓達は悲鳴を擧げて泣き叫び、中には池の中に、落ち込んだものもあるといふ騒ぎだつた。其の中で役人は、狂齋の姿を發見すると忽ち取り押へて繩を打つて、引立ててしまつた。併し當の狂齋は、泥酔してゐるので、縛られたのも知らず、踊りながら連れて行かれるのだつた。此の騒動の爲め會は散々の有様で其の儘中止になつてしまつた。

狂齋が捕縛された理由は、足長島と手長島の繪が、高貴の人を誹謗し嘲弄するものとして、何びとかの密告に基いたのだつた。狂齋は翌朝醉が醒めるに及んで、初めて、前日からの自分の身の事を知つて、後悔臍を噛むと雖も及ばなかつた。泥酔中の戲筆で彼は殆んど憶へがなかつた。

其の月の十五日に彼は呼び出しになつて、取り調べを受けた。が、もと／＼憶への無い事なので殆んど答辯のしやうも無かつた。其の儘再び禁錮された。彼は前後百十日餘獄中にあつて、翌年正月三十日に至つて漸く放免された。

さすがの狂齋も、今度の失敗では、沁々と後悔したのでつた。そして此の事を心に銘ずるため、狂齋の名を改めて其の後は曉齋と稱することにした。其の上一度は酒も廢さうかと思つたが、併し是れだけは廢められなかつた。

彼は、酔へば斯の如き有様だけれども、平常は非常に溫良しくてそして几帳面だつた。朝は必ず二時三時



に起床して繪筆を執り、定められた日課を怠るといふ事はなかつた。彼は日課として、菅公の像と觀音像とを毎日描いた。菅公像は、龜戸、平川、湯島の三天神へ毎月五葉宛奉納し、觀音像は淺草、上野清水、京都知恩院觀音の三堂へ毎月十葉宛奉納した。生涯それを繼續した。

門人等に對しては非常に慈愛深かつた。平常門人と、同じ物を食べてゐて、自分だけ奢るといふことは決して無かつた。それで或る時恁んな事もあつた。或る繪の依頼者が彼の所へ馬鮫魚を一匹贈つて來た。曉齋は大いに喜んで、先づそれを觀音様に供へた。其の觀音は、駿河臺觀音坂に住んでゐた先師狩野洞白の家で代々護持した觀音で、洞白の家が没落した或る機縁から曉齋が引き取つて祭つてゐるのだつた。彼は何んな物でも先づ觀音様に供へるのが例だつた。

夕食の時馬鮫魚の照り焼を作らせた。例に依つて一同揃つて膳についた。すると曉齋は何思つたのか門人達の膳の上を見廻してゐたが、やがて自分の膳の上の皿を取ると、いきなり妻の膝の上に投げ付けた。そして彼は憤りにおのゝき乍ら云つた。

「何故儂の膳にばかり大きな切身を付けたのだ。お前が恁んな心掛では立派な門人が出來ないではないか。儂は馬鮫魚を食べたければ何時でも食べられる。が、門人達はそれが出來ないんだ。何故彼等の膳に大きなのを付けないのだ。お前のやうな猿間しい女と將來一緒に暮すことは出來ないから出て行け」

激し易い曉齋は恚う云つてハラ／＼と涙を零した。妻はさし俯向いた儘一言も答へなかつた。門人達が様様に云ひなだめて漸う其の場は納まつたが、折角の晩餐は是れがために減茶々々になつてしまつた。

「どうも面白くない。今夜は俺が皆に鰻を奢つて遣るから一緒に出掛けるとしよう」

曉齋はさう云つて、十人以上の門人を一人残らず件れて神田川へ出掛けるのだつた。

### (七) 觀 音

駿河臺狩野家の觀音が、曉齋の手にはいるまでには、一場の因縁話があるのだつた。

元來此の觀音は、狩野家に取つては由緒のある觀音であつた。駿河臺狩野家の先祖から四代目に洞春美信といふ人があつた。此の人が或る年淺草觀音の天井の天人を描いた。當時、淺草觀音は上野寛永寺と同じく天台宗であるところから、輪王寺の宮の支配下にあつた。そこで輪王寺の宮から、奇特の故を以て洞春に對して、淺草觀音に在つた御前立觀音を一體下賜された。洞春は是れを駿河臺の屋敷に安置したのだつた。以來狩野家の寶物となつて、代々是れを護持し、先祖からでは八代目の洞白の代に至つたのだつた。狩野家では何よりも此の觀音を尊崇して朝夕の御守りは門人が交替で勤めてゐた。然るに、洞白が歿して、其の子洞榮が九代目を相續したが、やがて戊辰の革命となつたので、狩野家は徳川氏と運命を共にしなければならなかつた。さしもの駿河臺の狩野の家も没落して、生計に窮し、一家轉々として流浪する境涯にまで零落した。其の際、右の觀音像と、今一つの家寶となつてゐた探幽の狂畫卷物二卷とが、本郷六丁目の倉田屋といふ質屋にはいつて、其の儘質流れになつてしまつた。倉田屋の主人は信仰の深い人だつたので、自分の家の内に特に持佛堂を造つて此の觀音を安置したのだつた。其の間は何事も無かつたが、主人が死んで養子が後を相



續すると、養子はそれを邪魔にして、持佛堂を毀して佛像だけ土藏の中へ入れて置いた。が後にそれも無駄だといふので取り出して、下金屋に金五圓で賣り拂つてしまつた。

下金屋は、其の佛像に少なからず金が填めてあるのを見込みで買つて來たので、其の金を取る爲めに、佛像を一と晩中水に漬けて置いた。すると翌朝起きてから、女房が蒼ざめた顔をして、

「ねえお前さん、妾あ昨夜妙な夢を見たんだよ。眞つ白い鬚をはやしたお爺さんが妾の枕許に立つて、此の観音を粗末に扱つては成らんぞ——と云つたんだよ」

「ふーん」

「妾あまだアリ／＼其のお爺さんの言葉が耳に付いてゐるのでね、今朝水に漬けてある観音様を見た時いやあな氣持がしたのさ。何だか氣味が悪いから、後生だからお前さん此の佛様を倉田屋へ返して來てお呉れな」

「うん、だが、惜しいもんだな。俺の見込みぢやあ金が十匁位は取れる積りなんだ」

「十匁取れたつて、二十匁取れたつて、若し罰が中つて眼でも潰れて御覽、詰まらないぢやないか」

「さう云へばさうだな、ぢやあ返してしまふことにしよう」

下金屋は早速観音を持つて行つて、譯を話して倉田屋へ返してしまつた。倉田屋では再び土藏の中へ入れて置いた。すると、それからといふものは店の小僧達が藏の物を取りに行くことを嫌つて容易にはいらうとしないのだつた。で倉田屋でも困つた。元の質入人の手へ戻して遣り度くも其の人達は何處へ行つたのか行先きも分らなかつた。

すると倉田屋の隣家の下駄屋の主が此の観音の來歴をよく知つてゐたので、それを話した後で、

「湯島四丁目に居る河鍋曉齋といふ繪師は狩野家の門人だから、あの人に頼んで引き取つて貰つたらどうでせう。金の十兩も付けたら引き取つて呉れるでせう」と云つた。

そこで倉田屋は、近くの松吉といふ料理屋へ行つて曉齋を招待した上で、右の話しをして、金十圓附けて引き取つて貰ひ度いがどうだらうと云つて相談した。曉齋は観音を引き取ることは承諾したが、金を附ける代りに、探幽の狂畫の巻物を貰ひ度いと云つた。其の巻物は道具屋相場では五圓位の物だつたので、倉田屋は一も二もなく承知して、直ぐ様其の二品を家から取り寄せて曉齋に渡した。曉齋は、圖卷を懐中へ入れ、観音像は羽織の中へ入れて自分で背負つて我家まで持つて來たのだつた。

明治十四年第二回勸業博覽會に、曉齋は墨畫で一羽の鴉が枯枝に留つてゐる圖を描いて出品した。それは彼が晩年特に好んで描いた處の一筆畫で、筆墨の輕妙極致を現はしてゐた。處が彼は此の畫に百圓の定價を附して出した。當時百圓の畫と云へば、大した物と云ふよりもそんな物は殆んど無かつた。同じ時出品した畫壇隨一の耆宿で古土佐の大家である菊池容齋の葡萄と栗鼠の圖が、破格の高價でもつて金二拾圓だつた。だから曉齋のたつた一筆の鴉の値段の百圓は殆んど無茶だつた。である人が、

「先生あれは戲談でせうね」と云ふと曉齋は答へて、

「いや決して戲れではない。が、是れは強ち鴉一羽の價だと思つて呉れては困る。私も幼少から畫を學び始めて數十年辛苦を極めて來た。で是れは其の修學の價値を世人に示さうとしたことであつて、購買者の有無



などは固より問題ではないのだ」と云つた。

處が、日本橋の榮太樓の主人が此の繪を一見して直ぐ様買約をしてしまつた。買約濟といふ札が下つたのでそれが非常な評判になつた。最後に審査の結果妙技二等の賞牌を授與された。

併し曉齋はもと／＼賣る積りで附けた定價ではなかつたので、榮太樓の主人から百圓受取るのは如何にも氣の毒に思つて、「五十圓に負けて上げませう」と云つた。すると榮太樓は承かないで、定價通り百圓で買つて、そして恚う云つた。

「鴉一羽が百圓だから買ふ氣になつたんだ。五十圓なら誰れが買ふものか」

曉齋は其の内五十圓を割いて、博覽會の監守人に慰勞の爲めに分配して遣つた。

神田明神の神官に月岡某といふ人があつた。或る年神前へ立てる衝立を新たに調製したについて曉齋に揮毫を依頼して來た。曉齋は承諾して請合つたけれども容易に描かなかつた。月岡氏は折り／＼催促したけれども曉齋は「其の内／＼」と云つて延ばしてゐて、早くも三年経つてしまつた。そこで神官の方でも少し腹を立て、來て、他の畫家に描いて貰ふ約束をして、其の向きを曉齋の許へ云つて斷つて遣つた。すると、他の畫家が愈々描かうといふ日の前々日になつて曉齋が走つてやつて來て「誠に遲滯して申譯が無かつたが、漸く畫稿が成り立つたから参りました」と云つた。神官の方ではもとより曉齋の繪を望んでゐるのだから、他の方は更に斷ることにして、曉齋に描かせることにした。

曉齋は直ぐに筆を執つて、其の金の衝立へ、墨で二頭の獅子が奮鬪するの圖を描いた。筆を揮ふこと、疾

風の如くだつた。僅か二三時間で描き上げた。それを拜殿へ立てた。墨色淋漓として金光の上に躍つて、猛氣殿に満ち、觀る人嘆賞しない者はなかつた。

成田不動の額に、大森彦七鬼女と闘ふの圖を描いて奉納し、湯島天神の額には、野見宿禰當麻蹶速と角氈の圖を描いた。それらの畫は、戸隠山の天井の龍と共に曉齋の生涯に於ける傑作だつた。

曉齋程腕の達者な畫師は古來稀れであつた。其の點に於て彼は古今無双と稱するも過賞でなかつた。併し、彼は學問が無かつた。平常書物を讀まず、手紙等も全部代筆代讀をさせてゐた。文字は落款以外は知らないと自身で云つてゐたが、眞逆それほどではなかつた。けれども兎に角文學的教養は甚だ乏しかつた。其の方面で彼の思想の背景をなしてゐたものは能樂位のものでつた。従つて、曉齋の畫には、審美的要素が缺乏してゐるやうな場合が往々にして少くなかつた。それは彼が殊更に怪奇の畫題を選ぶ場合に陥り易い弊だつた。或ひはまた筆力を示すの餘り、誇張の弊を伴ひ、風調野鄙に流れるやうな缺點もあつた。併し、それらの缺點があるにも係はらず、彼の偉大を認めなければならぬのは、其の縦横無碍の手腕であつた。意匠のみを重んずる大正現代の繪畫者流の大部分に最も缺乏してゐる方面をば、多きに過ぎるまで具備してゐたのが曉齋であつた。

彼は常に門人に向つて恚う云つてゐた。

「世間には、蘭竹などを只それ一つ學んで、それで畫家だと云つてゐる人がある。が、かういふのは所謂消閑の具で、他の職業に従事してゐる者が片手間に筆墨を弄するので、畫を以て職業にしてゐるのではない。



苟も看板を掛けて畫家だと云ふからには、天地間の森羅萬象を悉く筆端に操縦するだけの技倆がなければならぬのだ。これには寫生を學ぶより外に方法はない。寫生の經驗を積んで、春花秋葉、獸蟲、魚を初め、山川草木から服飾器財、およそ形のある物は皆其の形を詳かにし、其の態を窮めるやうになつて、初めて一人前の畫工と云ふことが出来るのだ」

彼は、如何なる場合如何なる畫期を求められても、立所に其の畫を作ることが出来た。あらゆる粉本が頭の中にあるのだつた。それであるから曉齋は席畫などといふ場合になると、到底人の眞似の出来ない事をして見せた。

或る時築地の延遜館に當代の縉紳の宴會があつて、藤堂凌雲、福島柳圃、曉齋の三人が招かれて席畫をした。其の時曉齋は人々の望みに任せて、絹地、畫箋、色紙、など取りまぜ八時間に百八枚描いた。すると其の後或る人が曉齋を批難して、

「曉齋は一日に百八枚描いたさうな。それほど樂に描けるのに、何んで吾れ／＼の依頼した物に限つて三年も五年も捨て置くのだ。して見れば、彼は貴顯紳士に詔ふのだと云はれても仕方がない。頼み手次第で描くのだと見える」と云つた。

其の言葉が曉齋の耳に這入つた。彼は、

「それこそ飛んでもない間違ひだ。決して左うではない。席畫は時に臨んで慰みの座興に過ぎない。だから後年に至つても、席上畫と云つて過失があつても別に咎めない習はしになつてゐる。處が、家に居て筆を執

る場合はそれとは異ふ。依頼の畫は後年永く残すべき物であるから、種々の圖を案じ、色々工夫を凝らさねばならない。其の物毎に依つて、古人の筆意を採つて、得手々々を研究してそれを基にして描くのだから、一枚を仕上げるのも實に容易でない。だから私は晝夜の分ちなく筆を執つて殆んど寢食を忘れて苦心してゐるのだけれども、それで猶約束の期日に遅れるのはどうとも致し方がない。私の處には十年この方の依頼の絹ばかりでも既に三百枚から溜つてゐる。一枚を七日で仕上げるとして是れだけで五年掛るわけだ。しかし最早齡も六十に近くなつてゐるのに、日増しに新規の依頼が加はるばかりだから、どうともすることが出来ない——」と云つて嘆息するのだつた。

### (八) 最後の戲畫

初代尾上菊五郎は幽靈變化の名人と云はれた人だつた。そして當時見物を驚かせた獨特の機械仕掛などは松緑自身が製造したのだつた。以來音羽屋は代々幽靈を得意として、家の藝となつてゐた。五代目菊五郎もそれが得意だつた。其の音羽屋の家には、昔から幽靈畫の傑れた物を澤山蒐集して秘藏してあるといふことを聞いたので、曉齋は一日菊五郎を訪問して見せて貰つた。が、終日見ても見盡されぬ程澤山あるのには曉齋も驚いてしまった。あとで菊五郎は曉齋に向つて矢張り幽靈を描いて貰ひ度いと云つた。

「それでは私が古人が誰れも描いてゐないやうな幽靈を描いて見ませう」

と曉齋は云つて、非常な工夫を凝らして、獨特の繪を描いて贈つたので菊五郎も大いに喜んだのだつた。



或る年、曉齋は房總地方を漫遊して、下總國相馬郡花野井村といふ處に、古來其の土地の寺に藏する甲冑小手臙當及び一筋の矢があつて、平親王將門の用ゐた品であると言ひ傳へてゐるのを一覽すると、げにも古代の作で將門の遺品であらうと思はれる程珍らしい物だつたので、彼は直ぐ様それを寫生したのだつた。其の圖は彼の著書である曉齋畫談の中に載つてゐる。曉齋畫談は、明治二十年の刊行で、内篇外篇全四冊にわかれ、繪畫研究者に取つては得難い好粉本である。

曉齋には可成り大勢の門人があつたが、晩年其の中に一人の外國人が加はつてゐたのは特に異彩を放つて見えた。それはコンテルといふ英國人で、彼は元來油繪と製圖の専門家で、其の技術を以て日本政府に招聘されて來て官途に就いたのだつた。彼は本國に居た時から深く日本畫に興味を持つて、探幽の粉本に依つて研究した程だつたが、日本へ來ると直ぐ、曉齋に私淑して、入門を乞ふたのだつた。併し曉齋は「私は到底貴下の師たる資格はない」と云つて再三固辭したが承かないので、遂に彼の乞ひを容れたのだつた。コンテルは間も無く非常に能く描くやうになつた。彼は曉英と號し、繪畫共進會に、雨中の鷺及び鯉魚の圖を出品して銅章を受けるほどになつた。

曉齋はよくコンテルと一緒に寫生旅行をした。或る年も二人で鎌倉に遊んで、鶴岡八幡、建長寺、圓覺寺などの古代の様式や寶物などを寫生して、それから新居の閻魔堂へ行くと、コンテルは頻りに其の像の異様なを珍らしがた。そこで又是れを寫生して歸つたが、後に調べると、其の閻魔の像は運慶の作で、應永の亂に戰死した人の亡靈を弔ふ爲めに造營した物だといふことが分つた。曉齋はコンテルと一緒に日光へも行つたりした。

曉齋は生涯に三度び妻を迎へたのだつた。最初の妻は子が無くて死んでしまつた。第二の妻も、男の子を一人生んで後死んだのだつた。第三の妻は女の子を一人生んだ。曉齋は二人の子供に繪を教へた。男子は曉雲と號し女兒は曉翠と號した。

明治十九年に曉齋は湯島大根畑から下谷根岸へ移轉した。それから後幾ばくもなく彼は病を得た。病氣は胃痛だつた。

それが次第に重つて行つた。彼は久しく病床に呻吟してゐた。彼も自分の不起を悟つてゐるのだつた。

或る日曉齋は家族に向つて、庭前にある一つの巨きな石を指し示し乍ら、

「儂が死んだならば、あの石で蝦蟇を彫刻して塚の上へ置いて貰ひ度い。決して世間普通の墓などは建てるに及ばない」

と云つた。それは彼の六十年の繪畫の生活が、三歳の時母の膝に抱かれて行つて、蛙を描いたのに創まつてゐるので、死後の墓しるしもそれに因んで蝦蟇を置き度いと考へたのだつた。

そのうちに明治二十二年の春になつた。曉齋の病は俄かに革まつて來た。門人や家族の者が日夜枕頭に付き添つて看病してゐた。

或る日、彼は突然舌が硬ばつて物が云へなくなつてしまつた。すると彼は手を擧げて何か物を求めるやう



な容子をして見せた。息子の曉雲が其の意味をさとつて、紙と筆を持つて來て父の枕元へ出した。曉齋は直ぐに筆を執つて得意の戲畫を描いた。それは、彼自身が嘔吐をして、それを見て醫者が仰天してゐる圖だつた。籤醫者に掛つた爲め、恚んな目に遇つたといふ意味らしかつたけれども、それ以上尋ねることも出来なかつた。

それが絶筆で、其の日のうちに彼は死んだのだつた。四月二十六日の事で、享年五十九歳であつた。遺骸は谷中瑞林寺中正行院に葬つた。

## 追記

本傳を書き了つたのが九月の末だつた。それから間も無く、十月一日から六日迄私は長野へ旅行した。此旅行の目的は、隠れたる南畫家、玉蘭堂、長井雲坪山人の傳記資料蒐集の爲めである。雲坪山人は天保四年越後沼垂に生れ、青年の頃長崎に遊んで鐵翁逸雲に師事すること多年、明治初年の頃支那に渡つて親しく彼の畫風文物を研究し、後一度は東京に來つて肆を開いたが、時世の容るゝところとならなかつた。山人一代の畫才を有して空しく世間から顧られないので、筆硯を携へて遍く江湖に放浪し、後信州に至り、善光寺の堂裏に草廬を結んで、世俗と隔絶して清節の生涯を送つたのであつた。それが爲めに山人の畫名は全く世の中から葬られてしまつてゐたが、土中の寶玉遂には地上に光を放つの時節があるが如く、近來其の作品が一部の識者に認められたのが動機となつて、歿後三十年に近き今日漸く南畫家雲坪の存在が世間に紹介される機運に遇つた。私も數年前から雲坪の畫を尠しは觀て、其の超脱せる筆致に甚だ敬服してゐた一人だが、未だ以て彼の大を十分に理解する處には達しなかつた。處が今回畫人傳の一篇として南畫家雲坪を物する事になり、前記の如く長野に行き、同地に殘されてゐるところの多くの彼の作品を觀、且つ其人物閱歷を研究するに及んで、想像以上の驚きを新たにしたのであつた。詳しくは彼の傳記にゆづることゝして、爰では唯一言彼は明治年代に於ける最大最高の南畫家であつたといふ事を、十分の確信を以て斷言するに止めて置く。長



野滯在中私は戸隠に登山した。山上に一泊して下つた。登山の目的は、晩年雲坪が戸隠山上に幽居して彩筆に親しんでゐたところから、私も此の機會に靈山の土を踏んで、彼の生活氣分の一端に觸れて見ようと思つたこと、今一つは戸隠神社の曉齋の天井の龍を見學したい目的があつた。私が山に泊つた晩は強く雨が降つた。が翌朝起きて見ると、雨はやんで、白い霧が山上一面に流れてゐた。私は寢巻のどてらに宿の下駄を借りて、早朝、中社に詣で、拜殿の床に立つて、有名な天井の龍を仰ぎ見たのだつた。私は本殿の中で、狂齋が十間四方の天井に龍を描いたと書いた。それは曉齋自身の著書であるところの曉齋畫談にも左う出てゐるし、それに依つて書いたらしい二三の彼の小傳の中にも左う書いてあるので、私も是れを其の儘踏襲して十間四方の天井としたのだつた。處が、現場へ行つて實物を見ると話とは大變大さが相違してゐる。實際は二間半に三間位の大きさである。拜殿全體の間口が漸く六七間に過ぎないのだから、十間四方の天井のはまる道理が無い。其の天井は、周圍が二尺五寸四方位の格天井で、中央の鏡板の天井に龍が書いてあるのだ。何故かう誤り傳へられたのかは分らないが、狂齋自身が法螺を吹いたのだらうとは思ひ度くない。曉齋畫談と雖も、挿繪は彼の筆に成つたものだが、文章は何びとかの代作したものである。だから、狂齋自身が揮毫してゐる光景を畫いてある挿繪の方では實際位の大きさに畫いてあるにも係らず、文章の方を讀むと、十間四方の天井に一杯になる程の龍の頭云々と思ひ切つて大きくなつてゐる處から見ても、文章の筆を執つた人が昔の人の誇張癖から自分勝手に大きくして所謂筆の勢で書いたものと思はれる。それはともかくとして、肝心の龍の畫であるが、さすがに有名な畫だけあつて非常な名作だつた。狂齋洞都陳之圖と落款が記してゐる。

狩野の格法嚴乎とした中に豪快無類の筆勢を見せ、眞に看者の頭上から風を起し雲を呼びさうな概がある。狩野派の代表作として後代に残る物の一であることは確かである。けれども私は、寧ろ其の周圍の格天井の畫に眼を移すに及んで、曉齋に對する讚美の念を一層強く感じたのだつた。格天井は十四枚描いてあつた。本傳中に八枚だけ描いて下山したと記したのは、是れも矢張り曉齋畫談執筆者の誤りを其の儘採用したのであつて、事實は十四枚書いてある。是れは全部極彩色の花鳥畫である。一々手に取つて見ることの出来ないうらみはあるが、形象正確にして彩色の秀絶せること驚くばかりで、彼の寫生の極意を發揮した作である。十四枚中のどの一枚を取つて見ても曉齋の畫家的地位を定むるに足りるものであらう。旅行先のことだから粉本の類も餘り用意しては居なかつたらうと思ふのに、其の不自由な中に於て斯の如き精密の畫作をする點から見ても、平素の蘊蓄の程度が窺はれる。畫室を一步出たら繪が描けなくなるやうな今人の多くの畫工等は、此の格天井を仰ぎ見てまさに愧死すべきである。私は自分の書いた傳記の主人公の傑作を眼のあたりに見て、抑へ難い満足と感激の胸を抱いて山を下つたのだつた。

## 高井鴻山

序でに、信州に赴いた見聞の一として、高井鴻山の事を少しく記して置く。鴻山とは、狂齋や北齋が訪問した高井三九郎の事である。其の家は高井郡小布施村にあつて、郡名を名乗る程の名家だつた。鴻山は當時の多くの文學者と交遊して、また聞えたる勤王家だつた。小縣龍洞院の住持活紋禪師は當時の碩學だつた。鴻山は佐久間象山や山寺常山等と同時に活紋禪師に就いて唐韻を學び、象山常山と並んで活門下の三山と稱せられたのだつた。彼が松平春嶽公に上つた幕政改革意見書といふものは、勤王の熱誠から成つたもので、



立論堂々、是れを政策上から見ても非常に立派な意見だつたさうである、彼の畫は、信州では一口に化物鴻山と云つてゐるくらゐに、妖怪の筆を揮ひ詩文また妖氣を含んでゐる。岸駒に學び、後北齋に師事した事は本傳中にも記したが、鴻山が好んで妖怪變化を描いた點は、むしろ狂齋と一致してゐるとも見られる。北齋の信州漫遊は、私は前に北齋傳を書いた時其の期間を一年としたが、信州人士の説を採ると三年といふことである。すなはち鴻山が北齋を招聘して、特に自宅中に畫室を新築して其處で自由に筆を執らしめた。北齋は其の三年の内一年は附近を遊歴したといふことである。私は故飯島半十郎翁の研究に基いてそれを一年間としたのだつたが、何れが正しいか知らないのである。それから、北齋が初めて鴻山を訪ねた時、メクラ縞の股引に印袴天を着て居たといふ話も残つてゐる。是れはいかにも北齋がやりさうな話である。尙、小布施には、北齋の作に成る屋臺の人形があつて、信州一國の名物の一に數へられてゐるさうだ。同じく祭禮に用ゐる貫名菘翁の大幟も右の人形と共に町有の寶物となつてゐるさうだ。斯ういふ珍しい物が傳はつたといふのも、要するに高井鴻山の力に依つたものであることは勿論である。

橋 本 雅 邦



上野の戦争が始まる二三日前から、雅邦の妻のとめ子は、幼い子の手を曳いて埼玉の方の狩野家の知行所へ避難したのであつたが、戦争も鎮まつたので江戸へ歸つて來ると間もなく少し氣が變になりかけた。

段々聞いて見ると、江戸に留まつてゐたはふが反つて無事だつたのである。市中では流石に官軍もさう大した亂暴は働かなかつた。が、一步御府内へ出ると憚る處が無いので、皇威を笠に着て思ふ様暴行を逞うした。殊に下級の兵士となると、眼中朝敵も無辜の良民も區別が無かつた。掠奪や凌辱は當然彼等に附與されてゐる權能であるかのやうに行はれた。だから、就中幕府の繪所を司どる狩野家の知行所へ避難したからと云つて決して安全な譯は無かつた。とめ子は、他の人々と同じやうに、其の數日間に限り無い怖ろしい目に幾度びとなく遭遇した。彼女は獵人に追はれる獸のやうに、愛兒を伴れて遁げ廻らなければならなかつた。元來氣弱なとめ子は、其の時の怖ろしさに未だに脅えてゐた。戦慄すべき光景が絶えず眼先にチラ付いてゐた。鐵砲の音、劍の光、人間の悲鳴――

靜かな夜半に、彼女は床の中からガバと撥ね起きたりした。彼女の眼先には猩々緋の毛を冠つた官軍の幻が現はれるのだつた。

「おゝ、官軍が來た、怖ろしい、嬢や、早く遁げよう」

彼女はさう叫び乍ら、すやく睡つてゐる娘を引き起さうとするのであつた。



雅邦はどうかして妻の心を落ち付かせようと思つて、醫者にも掛けるし、加持祈禱も種々やつて見たのだつたけれども、餘り驗は無かつた。師匠の狩野家でも、其の邸内に住まつてゐる合長屋の人々も、段々それを見聞きするので、みんなが同情を寄せて心配して呉れた。併し、平素はさう違つた容子も無かつた。とめ子はぶら／＼しながらも、家庭の仕事位はどうか斯うにかやつてゐた。

雅邦は、妻の病氣の事も氣に懸るけれども、同時に彼は親子の者の生活問題についても頭を悩ませなければならなかつた。金を得る道としては繪を畫いて賣るより外はないのだが、其の繪は決して賣れなかつた。

江戸は東京と改まり、さうした明治の代となつた。皇威は俄に赫灼として海内に輝やいた。併し、それは我が美術の世界にとつては極度の暗黒時代であつた。動亂後の人心は容易に鎮靜に歸すべき模様も見えなかつた。有らゆる階級人の興味は國事に向つて集中されてゐた。さうして一方では、徳川三百年の傳統的文化の名残が片つ端から破壊されつゝあると同時に、西洋の新しい文明は潮の押し寄せせるやうな勢で輸入された。さうした時代思潮と、かの傳統的美術とは全く没交渉であつた。繪畫や工藝品は、紙屑玩具程の價値も有たなくなつた。藏前の或道具屋が、正銘紛れなしといふ應擧の大幅を持ち廻つた。其の價五圓といふのだが、誰一人顧る者も無かつた。

そんな時世だから、繪師で飯が食へぬのは雅邦ばかりではなかつた。誰でもさうだつた。だから、氣轉の利いた人間は大概商賣替へをしてしまつた。

「あんたも何か商賣のはふへでもはひつて見たらどうか」

雅邦も屢々人からさう言はれた。が、さりとて替るべき商賣も無かつた。食ふ爲めには何でも遣つて見る了簡になつて見た處で、さて自分に出來さうな仕事は無い。矢張り、食へても食へなくても、繪を畫くよりほかに仕方は無い。

狩野晴園

狩野晴川

雅邦は弘化四年、十三歳で狩野勝川院の門に入塾した。其の年のうちに彼は、父と母とを續いて喪つた。父は、晴園と號する狩野家の畫工であつた。元淀橋の米屋の倅だつたが、幼少から繪が好きで、木挽町の狩野晴川に事へ、主用の餘暇に畫を學んで終ひに一人前の畫工になつたのであつた。其の後、主家の用人三浦司作の媒酌で、矢張り同家の御家人で松平周防守から扶持を受けてゐた橋本伊貞といふ畫工の養子となつて其の長女と結婚した。そして夫婦の間に出來たのが、幼名千太郎と云つた勝園雅邦であつた。孤兒になつた千太郎は途方に暮れてゐると、長屋中の人々が親切に世話をして呉れ、就中親達の媒酌人であつた三浦からは一方ならぬ恩義を受けた。其の年入塾してそれから以後は一生懸命に勉強した。

雅邦と同じ頃入塾した門生に狩野芳崖があつた。芳崖は其の時分は勝海雅道と號してゐた。二人は七つ違ひで、芳崖のはふが兄であつたが、其の時分から一生斷金の交を結んだ。二人共塾頭の地位に進んで、勝川院門下の双壁と謳はれるやうになつた。芳崖は故郷の長府へ歸つたが、雅邦は二十六歳の時主家で一家を持つた。そして、池田播磨守の家臣高田藤左衛門といふ人の娘のとめ子を妻に娶つて、獨立生活に入つたのであつた。

明治元年といふ其の年は、雅邦は三十四歳であつた。始めて畫道に入つてからでは二十幾年を経過してゐ



る。今では此の繪筆を持てば、天下に恐るゝ者はさう澤山は無かつた。それだのに繪を畫いてゐたのでは米鹽の料さへ得られなかつた。

## (11)

雅邦は、全く収入の道が杜絶してしまつた。一と頃は、支那行きの扇面へ墨繪を畫いたのが流行したので彼も其の繪を畫いてゐた。畫料は百枚畫いて一圓で、百枚畫くのは容易でなかつたが、併し其の仕事のあつた間はともかく一家の者が命を繋ぐことが出来た。けれどもそれも何時となく廢つてしまつた。さうなるともう何の収入も無くなつた。家財を一つ一つ賣り食ひしてもそれとも永く續くわけはなかつた。夫婦も子供も着のみ着の儘で、もうどうする事も出来なかつた。其の中で妻のとめ子は二人目の女の子を産んだ。とめ子の病氣は快くならないばかりか、少しづつ悪い方へ向つて行つた。

或日細君の知合の人が來て此の有様を見て、ひどく氣の毒がつて、種々談の末に、

「ねえ橋本さん、恚んな事を言つては失禮ですが、何にもなさらずにゐるよりは増しですから、詰まらない内職だがやつて見る氣はありませんか？ 氣があればお世話しますが」

「何でもやりますとも。食はずには居られないからね」

「さうですか。實は私の懇意な家で、油町の小間物屋ですが、其處で三味線の駒を内職させてゐるんです。手間賃は莫迦に安くて十二拵らへて十二錢、つまり一つ一錢ですが、慣れると、可成り數が出来るさうです

から」

「三味線の駒を拵らへるとは情無い」と雅邦は心で思つたけれど、それを斷つては他に仕事の當ても無いので、「是非」と言つて頼むことにした。

それから彼は毎日三味線の駒を内職にやり始めた。併しやつて見るとあれで中々六か敷かつた。十二拵らへるには少くとも五六日はかゝつた。さうして出来上つた品物は我乍ら不手際だつた。それを油町の小間物屋へ持つて行くと、最初の一二度は義理で黙つて買つて呉れたが、三度目頃になると番頭が露骨に厭な顔をして、

「どうもかう手際が悪くては困りますなあ。恚んな不恰好な駒ぢや子供だつて買やあしません」と言つた。

「どうも濟みません。此の次にはうまく拵らへて來ます」

雅邦はさう言つて詫びて十二錢貰つて歸つた。厭やな氣持はしたが、併し三味線の駒を拵へる事は自分の本職ではないと思ふと、小言を言はれてもさう腹は立たなかつた。

「何故自分がかうまで不運なのだらう？」彼は屢々さう考へた。世間を見渡すと、大抵の人間が皆それ／＼世の中に用のあるやうな顔をして、元氣よく暮してゐる。畫工仲間でも、文人畫の連中などは近頃莫迦に景氣がいい。世間でも、文人畫でなければ繪でないやうなことを言つてゐる。就中、晴湖、老山、幽谷、和亭などに至つては、實に羨やましい位全盛を極めてゐる。それ程腕もない連中でも皆相應に歡迎されてゐる。「それだのに、己は彼等に比べて決して腕が劣つてゐるとは思はないが、何故ちつとも世間で願て呉れない



のだらう？」其のあとで、彼は一つの考に行き當つた。それは恚うであつた。

「世の中といふものと、繪といふものとは、全然縁の無い事だ。或繪かきの畫いた繪が、世間に受け入れられようと入れられなからうと、其の繪の本來の價值には何の影響も無いではないか。價值のある物は流行らなくても價值があるし、どれ程流行つても價值の無い繪は何處迄も無價值なのだ。其處が藝事の實用品と異なる處だ。して見れば、己の繪はたとひ賣れなくても、賣れる奴の誰彼の繪よりも價值のある事は確だ。それだけでいいではないか。どうせ繪筆を持つ職業に生まれて来たからには、商人根性を出したとて始まらない。世間の事などは考へないで、己は只勝れた繪を畫いてさへゐればよい。それが己の本領だ」

さういふ風に考へると雅邦は勇氣が出た。餓え死をするまでも繪を畫かなければならないと思つた。そうして、雪舟雪村にも劣らない程の繪を畫いて後世に残さなければならぬと考へた。彼は内職の傍らでも繪筆を放さなかつた。

彼は、どうして生きて来たのか分らないやうな生き方を續けて来た。さうして三四年の星霜が経過した。妻の病氣は、到底恢復の見込みが無く見えた。それでも彼女は三人目の子を生んだ。雅邦は、病妻に對する愛情と、憐愍と、又自己呵責の念とで常に苦しめられてゐた。とめ子は三人目の子を生んだ後は病氣が益益募つて、狂噪の度が劇しくなつた。裸足で、髪を振り亂して、往來へ飛び出したりするやうになつた。夫は淺間しい妻の姿を見る度に胸が潰れるやうに痛かつた。

座敷の中へ檻を造つてとめ子を入れて置くことにした。彼女は檻の中で暴れたり叫んだりした。雅邦は其

の物音を聞き乍ら内職をしたり繪筆を執つたりした。

其のうちに或人が世話をして呉れて、築地の海軍兵學校へ奉職することになつた。仕事は製圖係で、月俸八圓を支給される身の上になつた。それは明治四年の八月からの事であつた。

生活が稍樂になつたので、病妻の手當も出来るやうになつたことが、雅邦に取つて何よりも嬉しい事であつた。

## (三)

或日雅邦が勤め先で仕事をしてゐる處へ、家から使が飛んで来て直ぐ家へ歸つて呉れと言ふのだつた。彼は胸がドキツとした。てつきり妻の事で變事が起きたのだらうと直覺した。で、取る物も手に取り敢ず飛んで歸つて見ると、我家の門先に官軍の兵隊が二三人張り番をしてゐて、彼が歸つて来たのを見るが否や、「取調べる事があるから屯まで来い」と言つて附近にあつた官軍の屯所へ彼を引つ立てるのだつた。行つて見ると、其處には妻のとめ子を取り亂した姿をして捕へられてゐた。駭いて仔細を訊いて見ると、とめ子が屯所の高張提灯の中へ書き物を投げ込んだといふのだつた。それは將軍へ上つる上書様の物だつたのである。

「此の女は私の妻で御座いますが、發狂して居りますので檻に入れてあります。檻を破つて出て飛んでもない惡戯をしたものと見えます。併し、全く狂人の事で取り留めはないのですから、何卒放免して頂き度う存じます」



雅邦は種々陳辯したけれども、掛りの伍長は免して呉れなかつた。長屋の一同も心配した。誰かこつそり雅邦に向つて「一つ賄賂を使つて見たらどうです」と言ふので、無け無しの財布から二三圓を紙に包んで伍長に渡さうとすると、「怪しからん」と言つて反つて叱られてしまつた。「ともかくも本營迄出頭せよ」と命令されたので、雅邦は仕方なしに羽織袴で手引に案内されて、築地寒さ橋の官軍の本營へ出頭することになつた。

本營の門を這入る時手引は「町人一人」と門番に聲を掛けた。後に隨いて行くと、眞ッ暗な汚らしい室へ連れ込まれた。「暫く茲で待つて居ろ」と手引は言ひ捨て、出て行つてしまつた。もう夜だつた。彼は眞ッ暗な室で越方行末の事などを考へて、自分の不幸を嘆いてゐた。何時迄経つても呼び出しに來なかつた。不圖向ふを見ると、何時から來てゐたのか暗がりの中に一人の人物が寢轉んでゐる様子なので、側へ行つて見ると、それは官軍の士官の服を着てゐる男だつた。

「少々お願ひがあるのですが」

「何だ？」と士官は寢轉んだ儘答へた。

雅邦は自分が茲へ連れて來られた顛末を話して、

「私は目下海軍兵學校へ勤めて居りますが、何分かう待たされては明日の出勤も覺束なうござります。で、其の届を學校の方へ出して戴くやうな事に御周旋は願はれますまいか」と嘆願すると、士官は元氣よく起き上つて、

橋本雅邦筆 白雲紅葉



東京美術學校藏



「宜しい。承知した」と言つて出て行つた。

それから間もなく以前の手引がやつて来て「こつちへ来い」と言ふから隨いて行くと、門の外へ連れ出した。それから一緒に歩いてゐると、木挽町へ出て、師匠の家の門前へ掛つた。

「私は此の邸内に居りますのですが、御吟味の筋合は如何様で御座いますか？」と訊ねると、

「もう宜ろしい。以來氣を付けろ」

恚う言ひ捨て、手引はさつさと元來の方へ立ち去つてしまつた。雅邦は何が何やら譯が分らないまゝで門を這入つて我家へ戻つた。戻つて見ると、妻も何時の間にか歸されてゐて、檻の中で穩和しく睡つてゐた。

雅邦の一身には、禍が限りなく降り續いて來た。意志の弱い人間であるならばさういふ時自滅するより外はないのである。が、鐵のやうな心を持つてゐる人間は、禍に遭へば遭ふ程強くなつて惡戰苦闘の結果、其の鐵の魂は益々鍊冶の功を積むのである。

雅邦一家の者が寄寓してゐた木挽町の狩野家の邸は、或年火災に罹つて全焼してしまつた。其の時雅邦親子の者は、着のみ着の儘で命からがら遁げのびたのだつた。さうして知邊を頼つて暫く厄介になつてゐたが子供がある上に氣違ひの女房まで連れての居候は永くは續けられないので、何處かへ借家をしようと思つて方々探したけれども、氣違ひがあるといふ事が分ると何處でも體よく斷られてしまつた。途方に暮れてゐると、或人が世話をして呉れて、土橋内の伊藤といふ九州の小大名の屋敷内の空屋を借りて住むことになつた。其處の殿様は大層繪が好きだつたので、何くれとなく親切にして呉れるので、雅邦も嬉しかつた。捨てる神



あれば助ける神もあるとは全く此の事であつた。雅邦は其處から相變らず兵學校へ通つてゐた。

けれども、彼を惱ませる者は例の狂妻であつた。或日彼が勤め先から歸つて來ると、家の中が大騒ぎだから、又かと駭き乍ら訊いて見ると、彼の留守中に妻は檻を破つて出て、家に火を付けた上、總領娘の袖を捉へて火中へ押しやりながら自分も一緒に死なうとするのだつた。娘が怖がつて悲鳴をあげて助けを呼んだので、邸内の人々が駆け付けて呉れて、危く火を消して母子の者を救つたといふのであつた。雅邦は人々に詫びを言つたり禮を言つたりしたが、狩野の屋敷に居た時とは異つて何れも馴染の薄い人達なので、其の心苦しきは譬へようが無かつた。

「いかに心が狂つたとは言ひ乍ら、現在の我子を焼き殺さうとするとは、何たる情無い奴だらう」雅邦は泪を浮かべて妻の方を見た。しかし妻は、もう上機嫌で、檻の中で流行唄などを唄つてゐた。

そんな風で雅邦は勤め先に居る間も一刻も心の休まる時が無かつた。或日土橋近邊に火事があつた。兵學校の二階から見ると、丁度伊藤の屋敷の見當になるから、又しても妻が粗忽をしたのかと蒼くなつて駆け付けて見ると、有難い事に其の火事は伊藤ではなくて近邊の屋敷だつたので、雅邦はほつと胸を撫で下したのであつた。

其の伊藤家も間もなく取拂ひになつてしまつたので、彼は又もや借家を探さなければならなくなつた。が檻を擔いで借家住ひでは人が嫌つて、中々貸手が無かつた。すると山城河岸采女町に住まつてゐる伊藤閑齋といふ人が其の事を聞いて大いに同情して、其の屋敷内の小さな家を貸して呉れる事になつた。それで雅

邦も漸く落付くことが出來た。其の時分例の狩野家の三浦の世話で、其の親類合の家のおはるといふ娘が、家事を手傳ひに來てゐて呉れることになつた。はるはまだ十六七のうら若い娘だつたが、とめ子や子供の世話を懇ろに盡すのだつた。病人も不思議にはるに對しては柔順であつた。雅邦が出動した留守中などは、はるが檻の錠を開いて外へ出してやると、穏和しく坐つて話しをしたり、綿入物の手傳をしたりなどした。

暗黒のどん底にさまよふてゐた雅邦は、其の時分から少しづつ明るみへ出て行くやうな氣持がした。繪も賣れない中にも、偶には頼まれたりするやうになつた。彼は苦しい生活費を割いて、絹を買つたり繪の具を買つたりして、北向きの三疊の小部屋で熱心に繪を畫いた。

明治十年の秋には、莫逆の友狩野芳崖が故郷長府から上京して來た。雅邦は四十三歳で、芳崖は五十歳だつた。肺を煩つてゐる舊友は瘦せ衰へて、勝川塾當時の芳崖とは別人の觀があつた。が、元氣だけは昔に劣らず旺盛で、書生のやうな意氣込みで抱負を語るのだつた。東西古今の畫家を罵倒して、怪奇な畫論を吐いて得意になる時の芳崖は、肉の落ちた頬に少年のやうな血を漲らせ、鋭い眼をギラ／＼光らせて、さうして邊り構はず割れるやうな聲を出して哄笑した。雅邦と芳崖とは互ひに共鳴し合ふのだつた。今迄はたつた一人で海原に舟を浮べてゐるやうな心細い氣持であつたのが、舊友の上京によつて急に心強くなつて來た。

二人は、明日の日の生活の事も忘れて、夜を徹して談じるのであつた。

(四)



明治十二年の四月、妻のとめ子は病が重つて到頭死んだ。十年の間自分を苦しめ通した妻が、佛になつて靜かに横たはつてゐるのを見た時、雅邦は感慨無量であつた。

其の時分もはるは雅邦の家におゐた。間も無く雅邦は彼女と結婚した。

慘ましい家庭の煩勞から全く解放された雅邦は、畫の研究にばかり精進することが出来るやうになつた。兵學校へは相變らず勤めてゐたが、圖畫主任を命ぜられて、給料も幾らか昇つた。

彼の畫風は次第に變遷して來た。勝川塾では専ら探幽常信を模する事を以て唯一の信條としてゐたので、若し門生中に其の繩墨以外に出る者があれば、忽ち師匠の怒に觸れて破門の憂き目に遇ふのだつた。が、豊富な才能を持つてゐる人間が、何時迄も同一の境地に彷徨低迷して居られやうわけは無い。師匠の監督を離れた後の雅邦は、廣茫として際涯の無い畫の世界に奥深く分け入つた。雪舟、雪村に彼は最も深く私淑した。それから更に進んで、宋、元の畫を研究した。

彼は西洋畫にも深い興味を有つてゐた。其の頃盛んに輸入され始めた油繪の新しい彩色は、彼をして傳統の世界から外へ踏み出させた。彼は一時盛んに油繪も畫いた。兵學校の同僚に平山といふ士官がゐた。平山は明治八年に兵學校最初の外國航海として練習艦筑波に乗つて米國へ行つたが、其の途中太平洋の眞只中でさまざまの颶風に出遇つた。其の颶風の有様を細密に彼は雅邦に物語つて、記念のために颶風の繪を畫いて貰ひ度いと言つた。雅邦は承知して、颶風の圖を油繪で畫いて與へた。亂雲朧々として天に布漫し、澎湃たる怒濤は船體を呑み、風雨喧騒、雲を劈き雨を破る所の電光閃々として、其の光景は眞に逼つて畫面に描き

盡くされてゐるので、平山は大變喜んで秘藏してゐた。平山士官は、後年の商船學校長平山藤次郎であつた。併し、油繪は勿論一場の餘技に過ぎなかつた。雅邦は何處迄も、狩野派の大道を歩いて進んで行つたのである。

明治十五年に、農商務省開催の第一回内國繪畫共進會があつた。雅邦はそれへ「琴棋書畫圖」と「竹と鳩の圖」を出品した。「琴棋書畫圖」を畫く時、彼は漸く工面して絹を買つたが、生憎畫き損じてしまつた。けれども代りの絹は無いので、一度洗つて畫き直した。だから少し汚斑が残つてゐた。がそんな事は構つてゐられないので、構はず畫き上げて出品した。すると其の繪は非常な好評を博して、銀章を得た。「竹と鳩の圖」のはふは宮内省の御用品となつた。雅邦の畫名は其の頃から漸く知れ始めた。

同じく十七年の第二回繪畫共進會には「八仙人の圖」を出品して再び銀章を得た。

併し、雅邦の貧乏は依然たるものであつた。共進會へ出した「琴棋書畫圖」と「竹と鳩の圖」は二枚で十五圓に賣れたが、其の評判を聞くと直ぐに親類の者がやつて來て、「半分貸せ」といふので半金は持つてかれてしまつた。其の残りは、人を集めて酒を飲んでしまつた。すると、或人から同じ竹と鳩の圖を依頼されたので金五圓で引受けた。彼は其の金で疊替へをする豫定であつたが、金のはひると飲んでしまふので、繪が出来ないうちから其の五圓も消えてしまつたが、疊は依然として破れた儘だつた。

彼は非常な酒好きで、而も大酒だつた。病妻は没して、今では若くて賢い妻が家計の遣り繰りをして呉れるので、それをいい事にして金さへあれば飲んだ。無くては矢張飲むのだつた。



采女町から下谷へ移つて住んでゐた。天長節が来て、兵學校へ行くのに禮服が要るのだが、それが冬木町の相模屋といふ質屋へ五圓で預けてあるので、彼は其の時畫き上げたばかりの毘沙門天の繪を妻に持たせて遣つて、禮服を出して其の替りに繪を質に入れた。其の繪は請け出すつもりでゐただけれども、到頭算段が出来ずに流してしまつた。質屋のおかみさんは氣の毒がつて其の時雅邦の細君に帶を一本呉れた。平常學校へ履いて行く袴まで質にはひつてしまつた。

夏になつて、蚊が出て仕方がないけれど、蚊帳を請け出して来る金が出來ないので、親子諸共蚊に食はれ放題でゐた。細君のはる子はお産をして寝てゐた。が、なんとしてもひどい蚊で遣り切れないので、六日目に起きて、裏へ雅邦が繪を畫いた一疊敷の敷物を彼女は自身で質屋へ持つて行つて、漸う蚊帳を請け出して來た。

同じ貧乏でも、先妻とめ子が没した以後の雅邦の貧乏は、芝公園の陋屋で肺を病んで、日給三十錢の職工勤めをしてゐた友人の芳崖の悲境に比べると、餘程明るみのある貧乏であつた。

明治十九年に雅邦は永らく勤めた兵學校の教師を辭職した。そして明治二十一年、東京美術學校が創立されると同時に、彼は芳崖と共に教授に任ぜられた。其の年の秋、斷金の友芳崖は、病が重つて遂に此世を去つてしまつた。

(五)

芳崖は死んだけれども、生前彼の事業の一つであつた美術學校は、年と共に順調に發達を遂げた。明治二十三年に、フエノロサの門人岡倉天心は幹事から校長と爲つた。さうして芳崖の遺志は、着々として實現された。

一と頃天下を風靡してゐた文人畫は、フエノロサや芳崖の一撃に遇つて以來、今は全く畫壇から鳴を潜めてしまつた。そして久しく不遇でゐた狩野四條諸派の畫家が一時に擡頭して來た。其の中でも、人氣の焦點となつたのが雅邦であつた。

二十二年五月には臨時全國寶物取調局鑑査官となつた。翌二十三年一月第三回内國勸業博覽會審査員となり、同年十月には帝室技藝員となつた。博覽會には「秋景山水」の圖を出品した。

其の年アーネスト・フエノロサは、ボストン美術博物館の東洋美術部編制を囑託され、故郷の米國へ歸つた。彼の歸國に際して、我朝廷では其の功績を賞して勳三等を贈つた。米國に於けるフエノロサの聲望は非常なものであつた。彼は美術講演の爲めに四方に奔走して殆んど寧日なき有様で、或時は十回繼續の講演を同時に五六の大都市で行つたこともある。大統領に招かれて白聖館で講演した。彼の名聲は全米に鳴り渡りて、其の頃紐育費府邊りの富豪連は、少數の客を招く時でさへも、フエノロサに請ふて食後數十分間の演説をして貰ふことを以て缺くべからざる獻立としてゐた。彼は三十年の日子を費して其の畢生の事業である處の「日支美術年契」の大著述に従事してゐたが、まだその完結を見ぬうち、明治四十一年九月、倫敦で客死した。享年五十六歳であつた。彼の遺骨ははる／＼日本へ送られ、友人門弟等に依つて三井寺の明法院に



埋葬された。

岡倉天心  
川端玉章  
川崎千虎  
横山大觀  
下村觀山  
菱田春草  
西郷孤月

フェノロサが故國の人氣を沸騰させてゐる時、日本へ遣した彼の弟子の岡倉天心は、橋本雅邦、川端玉章、川崎千虎、其の外雅邦門下の四天王横山大觀、下村觀山、菱田春草、西郷孤月等を初めとして、新進の美術家を股肱に付け、新興美術の旗幟を天に翻へして、畫界に一大革命を起してゐた。其の革命の機運に乗じた雅邦は唯一の大立物であつた。

上野公園にあつた梅川といふ料理屋女將は、元柳橋でお駒と名乗つて左棲を取つてゐた。其の時分の事、彼女は觀音様を信仰してゐたところから、魚藍觀音の畫を欲しいと思つて、誰に畫いて貰はふかと考へたが其の頃はまだ餘り賣れてないが雅邦といふ繪かきの名前が妙に氣に入つたので、雅邦に頼みたいと思つて或時家へ遊びに来てゐた男に其の話をする、

「うん、雅邦なら僕が知つてるから頼んで遣らう」と其の男が答へた。

「それでは、恁んな圖に畫いて貰ひ度いんですから、ちよいと見てゐて下さいな」

お駒は恁う言つてどてらを着た儘、片手に炭取をさげて、一寸體を捻つて、顔だけ眞向きになつて恰好を付けて見せた。

「あゝ宜しい。引き受けた」男は笑ひ乍ら言つた。

間も無く繪は畫けて來た。見ると自分の註文通りの圖に出來てゐるのでお駒は嬉しかつた。そこでお禮はどんな事にしたらいいでせうと言ふと、

「まあ三圓も包んで遣つたらいいだらう」と世話をして呉れた男が言つた。

「三圓は餘り安いやうですね」

「なに、繪なんて物お相場のあるもんぢやあなしさ。幾らでもおつ付けれあ濟むんだよ」

お駒はそんなものかと思つて、三圓の包金に菓子折を付けて禮をした。其の後お駒は上野へ來て梅川を経營するやうになつた。一方雅邦は僅かの間にメキ／＼と賣り出して、畫界の第一人者となつた。或時雅邦は何かの會を梅川樓で催すことになつた。女將のお駒は其の時もまだ雅邦の顔を知らなかつた。彼女は其の日會のある座敷の床の間へ魚藍觀音の掛物を掛けて置いて、女中に氣を付けさせてゐた。すると廳で客が集まつて來て雅邦もやつて來た。雅邦は何氣なく床の掛物に目をつけたが、不思議さうに考へてゐる。

「是れは極く以前、柳橋の或女からだと言つて頼まれて畫いた繪だが、廻り廻つて恁んな處へ來てゐる」雅邦は側の人に向つてさう言つて話した。

女中は直ぐ其の事を女將の許へ注進した。お駒は内心少し面白く感じたので、程經て座敷へ挨拶に出て、

「實は古い以前に先生に御厄介を掛けました魚藍觀音の持主でございます」と言ふと雅邦は驚いて、

「さうであつたか。あの三圓の女はお前であつたか」と言つた。

お駒は顔から火がでさうになつた。其の後暫く彼女は「三圓の女はお前であつたか」と言つて人から擲擧はれた。

明治三十六年の第五回内國勸業博覽會の時、雅邦は「瀟湘八景」の圖を出品した。それは八景を各別に畫



いて連続せる一幅の長卷であつた。非常なる評判を博したにも係はらず、三百圓の其の繪が最後迄賣れなかつた。博覽會が了つた後であつた。梅川の女將のお駒は女中を伴れて横濱へ買物に行くと、美術院の展覧會があつたので一寸のぞいて見ると、丁度其の日限りで閉會といふのに、雅邦の「瀟湘八景」はまだ賣れてゐなかつた。

「あれだけ評判で、あれだけの先生の繪が横濱迄持ち込んで賣れないとは、何たるむごたらしい世の中だらう」お駒は一圖に畫の前で考へ込んでしまつた。彼女は一種の義憤を感じて、其の繪を買はふと思つたが、生憎懷ろに百圓だけしか持つてゐなかつた。事務所へ行つて其の譯を話して、後金は東京へ歸つた上で電報爲替で送るからと言ふと、係りの者は二つ返事で承諾した。そこでお駒は百圓の内金を入れて買受の契約をして、到頭畫飯も食はずに東京へ引つ返した。

處が、此の繪は大阪の村山龍平が欲しいと云つて、其の買受け方を岡倉天心に依頼して來てあるのだつたが、係りの者はそんな事は知らないで、梅川へ賣約をしてしまつたのである。そこで岡倉は早速梅川に人を遣つて「實は斯々の譯だから」と言つて、契約の取消しを頼んで來た。

が女將は承知しなかつた。「先方様にはどんな事情があるか存じませんが、私は兎に角百圓の内金まで打つて自分の物にしたのですから、今更解約などといふ事は絶対に出来ません」と答へた。いろ／＼言つて見たが何うしても承かない。最後に岡崎雪聲が使者にやつて來た。雪聲はお駒とは格別懇ろな間柄だつた。

「あんな山水など女が買つたつて仕方がないだらう。あの代りに下村觀山の元祿美人を買ひなさい。もう百

圓出せばいいから」

「否え、わたしは瀟湘八景が欲しいのです。女が山水を買つては不可ないといふ筈はないでせう」

「それは無論だが……それではどうです？ あと百圓出さなくとも宜い。あの元祿美人を百圓に負けて置くからさうなさい」

「否え不可ません。何と仰しやつても瀟湘八景はお譲り申すわけにはまゐりません」

お駒は頑として承かなかつた。「瀟湘八景」は到頭梅川樓の有に歸した。女が雅邦の繪を買つたといふので新聞にまで出て大評判になつた。女將が大きな繪を背負つてゐるポンチ繪が載つたりした。

梅川ではそれを額に仕立て、大廣間へかけた。掛ける時には雅邦が自身でやつて來て、位置の撰定などして呉れた。

梅川の瀟湘八景は當時世間の評判になつて、わざ／＼其の繪を見に來る客で梅川は俄かに繁昌し出した。

其の後梅川は仔細あつて廢業する事になつた。其の時「瀟湘八景」を五百圓で賣れとか千圓で買はふとか云ふ人が出て來たが、お駒は賣らなかつた。併しさうなると置場所に困つた。それを掛けて置くだけの屋體骨の家へは今度は這入れない。

お駒は其の繪を橋本家へ返納してしまつた。瀟湘八景は、雅邦生涯の作品を通じての逸品である。

## (六)



美術學校教授時代が雅邦の全盛期であつた。其の期間に於て彼は不朽の傑作を多數遺した。明治二十六年にはシカゴのコロンブス世界博覽會へ、着色の山水の圖を出品した。二十七年には明治天皇の銀婚式祝賀に際し、東京美術學校から奉獻すべき「松上双鶴圖」を描いた。二十八年の第四回内國勸業博覽會の時は、「釋迦」「十六羅漢」の對幅と、「龍虎の圖」の屏風とを出品した。更に二十九年には巴里博覽會へ美術學校から雅邦の水墨山水畫を出陳して金牌を得て、世間を騒がせた。三十年の文部省開催繪畫共進會の爲めには「臨濟の一喝」を畫いた。此の繪は當時世評喧しく、希望者續出したが、彼は誰にも應じなかつた。そして後に茨城縣の細田某といふ人に強請られて、たゞで呉れてしまつた。

これ程全盛であり乍ら雅邦は相變らず貧乏してゐた。彼は金錢に對して些かも節度といふものが無かつた。老齡に達してからは酒を廢して麥酒を用ゐたが、其の以前は盛んに飲み且つ遊んだ。外で遊んだだけでは足りなくて、幫間などを家へ伴れて來ては酒宴をするといふ風だつた。細君のはる子が双子を生んだ時などは、まだ産婦が床についてゐるのに「目出度い」と言つて三味線まで入れて馬鹿騒ぎをやらした。そんな風だから、収入は殖えても依然として火の車だつた。遊里へ通ふことなども、人が小言を言ふと猶更激しく通ふのだつた。平常は誠に好人物であるけれども、さういふ事になるとカラ他愛が無かつた。

細君の里では腹を立て、度び／＼娘を引取ると言ひ出した。はる子もつく／＼考へて見ると夫の所業に愛想が盡きて來た。そこで彼女は或時夫に向つて諍々として意見を、子供の爲めに今後は素行を慎んで貰ひ度いと言つて頼んだが、雅邦は聞き入れなかつた。はる子は到頭怒つて「それでは妾を離縁して下さい」

と言つて迫つた。すると雅邦は素直に承知して「是れを持つて行け」と言つて五十圓の包金を妻に渡した。細君は腹立ちまぎれに直ぐ様出て行く支度をして門の敷居を跨ぎ掛けたが、其の時不圖彼女の頭に別の考へが浮かんだ。

「此の門を出てしまへばわたしはもう一生涯此の敷居を跨ぐことは出来なくなるのだ。さうしたら子供の顔も見られない——。それから夫はわたしに五十圓の金を呉れたが、それは妻子を顧みない無情な人のする事だらうか——」

彼女は其處から家の中へ引つ返した。さうして夫の前へ其の金を戻して謝まつた。雅邦は莞爾々々笑ひながら、

「さうか、分つたらよし／＼」と言つた。

明治三十一年の春、東京美術學校に一大騒動が持ち上つた。事端は、校長岡倉天心に對する或一味の者の排斥運動から發したのだつた。元來天才肌であつた岡倉は、頗る卓識を有してゐると同時に一面に於ては放縱不羈の缺點もあつた爲め、遂に小人の爲めに乘ぜられて校長の職を退かなければならぬやうな羽目になつた。併し、其の時美術學校の教授は全部岡倉に殉じて總辭職といふことになつたが、聽て裏切りする者も出來てきて、結局、橋本雅邦、川崎千虎以下二十二名の教授助教授が連袂辭職を遂げて事件は結末を告げた。此の騒動は當時社會の大問題となつた。

美術學校を退いた岡倉は雅邦と共力して谷中に日本美術院を創立した。雅邦門下の大觀、觀山、春草、孤



月等の諸作家がそれに馳せ参じた。

日本美術界に、二個の大きな潮流が流れ始めたのは、其の時からであつた。岡倉天心の這度の失脚は、一面から看ると、畫壇に於ける舊勢力の挽恢復運動の成功とも見る事が出来るのであつた。

其の後の雅邦は野の畫家として活動した。

明治三十六年の春、雅邦は大阪に開かれた第五回内國勸業博覽會の審査員として關西へ行つた。當時京都の畫壇は、後素協會に依つて獨占されてゐるかのやうな觀があつた。

同協會の會員には、今尾景年、原在泉、望月玉泉、竹内栖鳳、山本春舉、都路華香等關西では鏗々たる畫家を網羅してゐた。以上の人々が、後素協會の名を以て祇園平野屋に雅邦を招待して宴を張つた。すると雅邦は席に就くが否や四邊を見廻して、

「今日は鈴木松年はお出でにならぬか？是非會ひ度いものだが」と言つた。

「鈴木氏は當會の會員でないから見えられません」と一同が答へた。

すると雅邦は失望した様子で、

「さうですか。それは兎に角残念でした」と呟やいた。

鈴木松年は鈴木百年の子で、京都に於ける老大家として早くより重きを爲してゐた。が、性質極めて厳格な上に常住獨立の氣風に富んでゐるので、後素會員の人々とは意見が合はず、平常交際もしない間柄だつた。其の翌日雅邦は同所の中村樓で呼び返しの宴を張つた。が、當日は態々使者を立て、松年の庵を叩かしめ

今尾景年  
原在泉  
望月玉泉  
竹内栖鳳  
山本春舉  
都路華香

鈴木松年

「今日は御身を特に招待して懇々お話し申し度き事あり云々」と懇ろな書面を遣つた。

松年も畫界に名のある雅邦の招待であるから、「萬事を差し置いて列席致しませう」と答へて、時を移さず中村樓へ出向いた。

松年は後素會員の人々の顔を見るが否や「諸君とは是れ迄畫の上では屢々交際もしたが、肉體上の交際は今日が始めてですな」などと皮肉を言つた。

席を定める時雅邦は起つて松年を一番上席へ勧めた。そして名妓二名を其の左右に侍らせ、自身で盃を持つて行つて松年の前に捧げ乍ら、

「先生とは二十五年振りの會合です。どうか此の盃を快くお受けが願ひ度い」と言つた。

「お忘れですか？今から二十五年前、貴下が東京へ來られて安田善次郎氏の招待を受けられて柳橋で飲み交した折、安田の取巻きで、長唄などの小世話をやいてゐた河原畫工が居つた事をよもお忘れではありませんまい。あの時の畫工が私です」

松年は「あッ」と驚いて膝を打つた。

「さうです、あれが貴下でありましたか。いや是れは奇遇でした。では、改めて盃を交換致しませう」

二人は互ひの健康を祝し合つた。そして二十五年の昔を思ひ出さうと言つて、傍若無人の快談に互ひの心膽を吐露し合つたので、他の會員達は煙に巻かれて匆々逃げ出してしまつた。



(七)

雅邦は常に言つた。

「世人は畫の流派といふ事に大層重きを置くやうであるが、別に流派などといふものを守らなくてもよいと思ふ。大きく立派にやれたらそれで結構だ。一體畫の眞相といふものは、形にあるのでなくて、其の神にあるのである。神があつて而して後に形が動くのである。所謂物我相會し、心筆相一致して、初めて餘情が滿幅に溢れるのである。然るに、只形のみを追つて、無闇に筆墨を驅るといふことは、本を捨て、末を求むるもので、繪畫の眞髓が發揮される道理は無し」

彼は、門弟を教育するにも、一定の型に箝めようとは決してしなかつた。各々の個性を素直に育て、行くやうに心掛けてゐた。川合玉堂は明治二十九年に入門した弟子であつた。入門の時玉堂は、繪畫に於ける用意について師匠に質問した。すると雅邦は答へた。

「ちつとも六ヶ敷い事はない。自分の力以上の繪を望むから苦しいのだ。何もさう焦慮るには及ばないから其の時々のありの儘の氣持を畫けばよいのだ」

門人が習作を持つて來て批評を乞ふと、

「結構ですな」と單に答へた。それより外は何にも言はなかつた。それでも熱心に幾度もくも訊くと、穩やかな言葉で、其の繪についてでなく、自ら啓發させるやうな暗示に富んだ事を何かしら言つた。そんな風

だから、初心の者にも決して手本などは與へなかつた。只勝手に畫くに任せてゐた。

揮毫をしてゐる時には、粹でも門弟でも決して畫室へ這入らせなかつた。それは揮毫してゐる處を見せると、自然に師匠の眞似をしたがるやうになるから見せないのだと言つてゐた。

繪ばかりでなく、何事でも他人の仕事に干渉する事は嫌ひだつた。植木屋が庭の手入れをして「どうで御座いませう」と訊けば「いいでせう」と必ず答へた。「仕事は専門家に任せて置けば間違ひが無い筈だ」といふのが彼の信する理論だつた。假りに植木屋が手入れたのが少しは氣に入らない時でも、來年になつて見たらどうかといふ處まで考へて見た。それだから木の育ち方を何時でも研究的に見てゐた。それが繪の上にも非常に参考になつた。併し専門家を信用し尊敬するだけに、若しそれが信用するに足りない事を發見した場合には用捨はなかつた。

或時、永年出入りをしてゐた植木屋を急に「あれは不可ない」と言つて斷つてしまつた。何故不可ないのか誰も知らなかつた。そこで植木屋は駭いてやつて來て、

「どういふ處がお氣に入らないのか承はり度い」と云つた。

家内の者がそれを雅邦に尋ねると、雅邦は最初はどうとも言はなかつたが、一番しまひに慙う言つて其の理由を説明した。

「昨日あの男が仕事をしまつて歸るのを、何氣なく障子の隙から覗いて見ると、埃を親切に掃き取らずに、足で片付けて行つた。仕事に對して親切といふものゝ無いことが分る。植木屋は植木に掛れば自分の子だと



思はなければならぬ。上手下手は借て置き、あゝいふ氣持で仕事をする者は己は嫌いだ」

植木屋はそれを傳へ聞いて一言も出なかつた。只々謝まつて其の時は勘辨して貰つた。

最後に雅邦は本郷龍岡町へ移つた。晩年の雅邦は殊に謹嚴で、禮儀正しく、近付き難い位の人であつた。出入の職人や八百屋の御用聞きといつたやうな者にまで、丁寧に頭を下げて挨拶した。門弟の繪を見る時には必ず座蒲團を外して威儀を正して見た。ある人が其の故を問ふと、

「門人は師に依つて示教され進歩するが、師匠も亦門生の作品に依つて大いに益する所がある。だから決して疎かにすべきでない」と雅邦は答へた。

だから好い加減な弟子は取らなかつた。初入門の者があると先づ同じ圖を二月も三月も習はせる。すると大抵の者は遁げ出してしまふ。そして熱心家だけが篩ひ残された。それにも係はらず、直弟子の數が百五十名に餘り、準門人は六百人以上に達した。

どれ程酒を飲んで酔つてゐる時でも、畫を談じ始めると理路整然として而も平常に優る熱を帯びて、人の耳を傾けさせるのが雅邦の特色であつた。他人の畫に對する忌憚なき批評をするのも、主にさういふ時であつた。晩年日本酒を廢してビールに代へてからも、夜十時に其の日の筆を擱くと、悴や門人を集めて繪の事を話し乍ら麥酒を飲んだ。併し終日の仕事に疲れてゐる家人は、酒が長引くのを厭がつて、一人去り二人去り遂には彼の前に誰も居なくなることがあつた。すると雅邦は非常に怒つて、又一同を叩き起こして一時二時迄もお談義を聽かせた。さういふ時には麥酒の數も三本四本と増して行つた。

「人間は勉めるといふことを知らなくては駄目だ。譬へば餘所で御馳走にでもなる時は、たとへ後で喉から出る程満腹の時でも、其の御馳走を無にするやうなことがあつては不可ない」恚う言つて、彼は若い者を諭へた。

夜遅く宴會から歸つた時でも、矢張りいつものやうに膳を出させて、家で一杯やらなければ彼は承知しなかつた。少し位飲み過ぎて體を不快くしても平氣だつた。畫談に走ると體の事を忘れるので、一寸した病氣位は藥を飲まずとも癒つてしまつた。煙草も嗜む程好きだつた。

「繪かきは健康でなければ駄目だ。己などは糞をするやうな程喫ふけれど、此の通り達者である」と言つて自慢をした。

「しかし齡が齡ですからお氣を付けなさい」と誰かと云ふと、

「莫迦を言へ。氣を付けると言ふ人間が氣を付ける。是れから死ぬ人間は構はぬが、是れから先の人間が用心しなくてはいけないんだ」

雅邦と芳崖とはどちらも芝居好きだつた。そして二人とも團十郎に私淑してゐたので、よく揃つて見物に出掛けた。劇を見ても、直ぐ様それを己れの専門に引き付けて、参考にしたり、弟子に諭へる材料としたりなどするのだつた。

「彦三郎といふ役者があつた。いつも舞臺へ出た藝は平々凡々でやつてゐるので、長芋と言はれた程だつたが、それが或動機に觸れて、グット一時にえらくなつた。今迄舞臺の上で平々凡々にやつてちつとも客を



喜ばせなかつた處は、即ち口では云へない修業だつたのだ。藝の修業では其處が有難い處なんだ。詰り云ふと、平素澤山の無駄骨を折つて置く事が肝心だ。それが藝の上では大いに無駄でない。地道を踏んで下らぬ馬鹿なやうな無駄をした學句でなければ、悟入することはでき難いのだ」

また、彼は畫の缺點といふことについて恚んな事を言つた。

「繪かきは只専心腕を磨いて、ちつとでも他人の眞似の出來ぬ自分といふ特色が繪の上に現はれたら、それで一と先づ成功したものと云つて可い。缺點はあつても構はない。それを其處の缺點此處の缺點と心配ばかりして、缺點を隠すことばかりに汲々としてゐると、結局特色までも消してしまふことになる。早い咄が女の顔に譬へて見ても、あの女は口元に愛嬌があるとか、目つきが可愛らしいとか言へば、それで一人前の女として女房に貰ひ手は幾らもあるが、もうちつと色を白くしたい、眉も濃くしたら猶美しくなるだらうと云つて、白粉をコテ／＼塗り立てたり引き眉をしたりすると、天然の美が失せて氣障な風になつて來る。つまり長所もあれば短所もあるといふ正直な處が良いのだ」

## (八)

晩年の雅邦は殊に畫三昧で暮した。畫は即ち彼の生活の全部であつた。朝は四時頃起きて、冷水摩擦をして直ぐに畫室へ這入つて、若い者が起る時分には一と仕事了つてゐた。夜は十時迄筆を執つた。病氣に罹つた後で兎角健康が勝れなかつたので、家人や門人達が心配して郊外散歩を勧めると、仕方なく或日散歩に出

掛けたが、夕方になつて歸つて來て、「どうも一日遊ぶのは骨が折れる」と言つて、その後は再び畫室に籠城して、減多に外出しなかつた。ブラリと外へ出るのは、床屋へ行くぐらゐの事だつた。床屋は、湯島に住んでゐた時代から龍岡町へ移つた最後まで、切通しの鳥又の側の、田村といふ舊弊な、小つぽけな床屋へばかり行つた。近くにもつと立派な床屋があるので決して餘所へは行かなかつた。床屋の親方は不愛想な變り者で、別段雅邦を敬ふわけでもなく、

「先生、私に一つ何か書いて下さ」と或時言ふと、

「宜ろしい。此の頃に書いて上げよう」

と雅邦は快よく承知して、「刈田の富士」の圖を畫いて只で遣つたが、其の繪は殊に傑作だつた。

其の床屋は餘所ではたうから電燈を點けてゐるのに、普通りの古風なランプを吊るしてゐて、見るから不景氣だつた。

「齡を取ると、頭が禿げたり白髪が殖多たりして厭なものだが、あの家はどういふものか光線の具合で、何時行つても頭が黒く見えるんで氣持がいい」彼はさう言つて、其の床屋を推賞した。一體負け嫌ひだつた。直ぐ近くの岩崎男爵の家で、祖母の米壽祝ひの時十一俵の餅を搗いたが、贈る所が多いので大福餅位に丸めて贈つたことがある。すると彼は、「己は富は岩崎に及ばないが己にも亦岩崎より勝つた所がある」と言つて自身の還曆祝の時は二十俵の餅を搗いた。處が贈る所が少ないので、直徑二尺といふ鏡餅を拵らへて門人と親類中へ配つた。明治三十七年にセントルイス萬國博覽會へ「山水圖」の額六面と、「四季の圖」屏風二双と



を描いて出品した。「四季の圖」は四度稿を改めて漸く完成したのだつた。

明治四十四年には、東京勸業博覽會美術館の天井鏡板に、水墨の雲龍を描いた。雅邦は元來左利きであつたが、繪を畫く時ばかりは右の手を用ゐてゐた。處が晩年は酒の爲めに右手が痙攣し出したので、往々運筆にも左を用ゐたが、此の雲龍の圖は全く左の手で描いた。だから筆法が往々逆描になつてゐた。

それが彼の最後の大作であつた。

明治四十一年一月十三日、雅邦は、龍岡町の自邸で没した。行年七十四歳。深川靈岸町の淨心寺内に葬られた。

(追記)

狩野芳崖と橋本雅邦とは、どんな意味に於ても併稱される明治年代を通じての二大作家である。文晁全盛の頃から、衰微の極に陥つてゐた狩野家の門から、同時に此の二人の偉人が生み出され、師祖の流派を復興した上にも、新らしき藝術の根柢を後代に植ゑ付けたといふことは、一見奇蹟のやうでもあるが、因果循環の理から推しても或ひは是れが當然かも知れない。すべて優れたるものは、どん底の世界から多く現れがちなものである。芳崖、雅邦等の當初の悲運こそ、後の大成の基礎を爲してゐるのである。降りつゞく五月雨の後に輝やかしい太陽は現はれる。雅邦の所謂無駄骨を澤山折つて來たことが、何よりの強味であつた。とにかく芳崖と雅邦の生涯には互ひに絡み合つてゐる深い因縁があるので、傳記を草する場合にも二人を全く

別々に切り離して書くことは出來ないのである。

此の兩者を對照して見る處に、特別の興味もあるのである。

材料出所は、橋本秀邦、橋本靜水、二先生の直話と、「芳崖と雅邦」「我憶雅邦」「日本美術雅邦翁號記念」



平  
福  
穗  
庵



穂庵の父は、平福太治右衛門といつて、羽後國秋田領角館の人だつた。平福家は先祖代々久しく其の土地に住まつて、魚、乾物、米等を商つてゐた。家道は豊だつた。太治右衛門の父——穂庵の祖父に當る人は、特に商道熱心だつたので、家道は益々榮えるばかりだつた。その祖父も、一面には可成りの趣味家で、いろいろの旦那藝を仕込まれてゐたが、謡曲は堂に入つて、殊に鼓を善く打つた。角館の領主は、秋田の佐竹の分家で、俗に北家と稱へてゐた。其の領主と穂庵の祖父は藝友達だつたが、お能の席へ出ると、殿様よりも上座へ着かなければならないので、どうも弱ると云つたくらゐる上手であつた。

其の子の太治右衛門は、子供の時から非常に繪が好きだつた。世間の子供の遊びに耽ける暇に、太治右衛門は何時でも紙と筆を持つて、繪を描いて楽しんでゐた。十五六歳になると、益々繪が好きになつて、自分では私かに繪師になり度いと考へてゐた。處が、親はそれを許さなかつた。

「繪師になるよりも、もつと大切な家業がある」

と、父親は言つた。そして太治右衛門が道樂に畫く繪をさへも「町人の身分として似合はしからぬ事だ」と言つて禁じてしまつた。併し太治右衛門は繪が習ひ度くて止められなかつた。

其の頃角館に武村文海といふ人があつた。酒屋の隠居だつたが、繪が好きで、若い時分から獨學で四條圓山等の畫を學んで、晩年は可成り善く南岳風の畫を描いてゐた。畫の外に彫刻もやつた。元來文海は意匠に



富んでゐる人だつたので、彫刻などにも面白い作があつた。例へば、龜の木彫りで、首を抜くと中が眼鏡入になつてゐる——などといふ趣向の物だつた。

太治右衛門は、親に隠れて、文海の處へ通つて畫を習つてゐた。文海の家も同じ町内で、一寸横町をはいつた處にあつて、ごく近いので大變便利だつた。太治右衛門は師匠から文朗といふ名を貰つた。

其の内に父が歿して、太治右衛門は家督を相続した。今では自由に己の好む事をして世を渡つても、誰も小言を云ふ者はなくなつた。とにかく彼は家業が嫌ひだつた。乾物だの米だのをいぢくつてそれで錢を儲けるといふ仕事に對しては、彼は何の興味も持つてゐなかつた。大體金儲けといふことが不得手でもあつた。好きな事といへば無論繪である。繪師になつて身を立てるといふことなら、それは一番理想的だが、悲しいかな手腕がない。繪を習つたとはいふものゝ、親に隠れてひま／＼に稽古したくらゐの腕前で、中年の今からどれ程勉強したところで一人前の畫工になり得る自信は無い。幸ひ資産があるから遊んでゐても食ふことには困らないが、併し堅氣の町人として無職で暮すわけにもいかなかつた。

太治右衛門は、いろ／＼思案した結果、自分の好きな道を應用することのできる商賣を始めるに限ると考へた。そして思ひ付いたのが染物屋だつた。染物屋と云つても普通の紺屋ではなく、主に婚禮の衣裳などの模様染めのやうな、精巧な物ばかりを取り扱ふことにした。

都合のよいことは、妻のきくが其の商賣に非常に興味を有つてゐたことだつた。きくは同國横手の商家大和氏から太治右衛門に嫁して來たのだつたが、天性器用で、押し繪などは至極上手だつた。で、染物の方も

夫と共に非常に丹精を凝らしてやつた。模様の上繪は太治右衛門が自から描いた。染めの方で、職人の手では出來ない處は、きくが暇にまかせて丹念に染め上げるのだつた。だから實に美事な模様が染つた。

此の商賣は相應に太治右衛門の藝術的欲望を滿すことが出來た代りに、手間が掛り過ぎるので案外に利益は尠なかつた。おまけに、出來の悪い時には品物か或は代金で辨償するといふやり方だつたから、ます／＼もつて儲けらなかつた。

太治右衛門はさういふ性格だつたから、従つて多藝多趣味だつた。交遊も廣かつた。其の時代は、徳川幕府も末期に近づいて、政治上では内憂外患交々到り、天下の人心が動搖し始めてゐたが、之れは譬へば深淵の底に生じた渦卷のやうなもので、まだ水面には現れなかつた。文化文政の爛熟の後を享けて、世を擧げて風流文雅を口にするほどの時代だつた。わけでも日本の中心を去ること甚だ遠い秋田領の、山深い小さな城下町では人々はたゞ靜かに太平の睡りを續けてゐるのだつた。水澄みて魚棲まぬといふ玉川のその水上にある角館は、羽後一國の京都と云はれたほどに美しくて靜かな小都會だつた。其の土地には文人墨客が頗る多かつた。

太治右衛門の文朗は、それらの文人墨客の交遊の中心になつてゐた。平福家の二階は常に一種の倶楽部のやうになつて、毎日いろんな人がやつて來て遊んでゐた。そんな事のために費へる金も少くはなかつたが、文朗は一向に氣にも留めなかつた。彼の家の井戸は非常に良い水が出るので、町内でも評判の井戸だつた。で、夏などはよく近所の人が水を汲みに來た。文朗は、自家造の酒を井戸の傍に置いて、水を汲みに來た者



には勝手にそれを飲ませることにしてゐた。水汲みはます／＼多くなつた。さういふ人物であつた。

穂庵は、文朗の獨り子だつた。弘化元年辰年の生れで、幼名を順藏といつた。順藏は三歳の時重い痘瘡に罹つたが、幸ひ生命は取り留めることができた。其の後は無事に育つて行つた。

文朗はよく口辭のやうに、

「俺は繪を描く子が欲しい」

と言つたものだつた。自分が好きな繪を思ふ存分に學ぶことができなかつたことは、終生の恨事だつた。併し、自分は今更何んと思つたところで仕方がない。此の上はせめて自分の生んだ子に繪を描く者があつて欲しい。そして、自分の果し得なかつた望みを、吾が子に襲がせて、立派な繪師に仕上げて見度いものだと常々考へてゐた。

彼の希望はやがて實現されさうに見えた。順藏は智慧付きの早い兒だつた。三四歳位の頃から子守に負はれて士族屋敷へ遊びに行つたが、或る時、負はれた兒の手に誰れかと紙片へ書いた物を持たして寄越したので、見ると「梅檀は二葉より芳し」としてあつた。

四つか五つ位の時分から、順藏は親から筆と紙を貰つて繪を描き始めた。其の筆づかひが、幼い者とは思はれぬくらゐ確かだつた。寺小屋へ上つて、童子教や實語教を讀むことを教へられた。さういふ本には挿繪が澤山あつた。順藏はそれを手本にしては畫いた。紙が無くなると、本の餘白へもつてつて繪を描くので、どの本も一杯に繪が描かれてしまつた。七八つ頃になると、繪草紙や錦繪を手本にして俳優の似顔繪などを

頻りに描いた。

平福家の隣りに、極く貧しく暮してゐる家があつたが、其の家の子も順藏と同じ位の年頃で仲のいゝ遊び友達だつた。寺小屋へも一緒に通ふのだつたが、或る時どうしたのか隣家の子供は寺小屋を休んでゐた。

「お前なぜ寺小屋へ行かないんだ？」

と順藏が尋ねると、其の子は悲しさうな顔をして、

「本が買つて貰へないから、寺小屋へ行くことができない」と言つた。

順藏は子供心にも友達の不運に同情した。が、子供の身では本を買つて遣る力はない。そこで考へた末に自分の本を手本にして、文字から挿繪まで少しも異はぬやうに寫し取つて隣家の子に與へた。隣家の子は喜んで其の寫本を持つて寺小屋へ通ふのだつた。

八歳位の頃から、順藏は父の師であつた武村文海に手本を貰つて正式に繪を學び始めた。

天才の萌芽は夙くも現はれて來た。順藏は、十一歳の時には摩利支天の像を畫き、十三歳の時には西園雅集を畫いて見る人を驚かした。それは最早立派な畫で、到底小兒の筆であるとは思はれなかつた。

其の頃、順藏は師匠から文池といふ名を貰つた。

(二)

文朗は、豫ての理想通り我が子を繪師に仕立てる積りだつた。それについて、いつ迄も順藏を手許に置い



森田眠岑

ては上達が遅れると思ふので、誰れか良い師に附け度いものと考へてゐると、或る日、秋田藩の儒臣で、明德館の教授となつてゐる森田眠岑が遊びに遣つて來た。眠岑は文學に長じ、傍ら墨竹を善くした。矢張り角館の出身だつた。

文朗が、自慢乍らに悴の描いた繪を二三枚取り出して眠岑に見せると、眠岑は一見したばかりで驚いて言つた。

「是れは奇才である、小兒の筆ではない。後世畏るべき者になるでせう。處で、御子息は畫家になさるお考へですか」

「見込みがあれば、繪をやらして見度いと思つてゐるのです」

「見込みは十分あるでせう。併し、本當に修業をさせるなら、何時迄も御手許に置いては爲めにならん。何んなら拙者が預つて當分面倒を見て上げてよい」

と眠岑が言つたので、文朗は大いに喜んで、悴を秋田へ遣ることにした。母は可愛い獨り兒を手放すことは辛かつたが、苦情も言へないので承知した。順藏は十三歳だつた。

角館から秋田迄は十三里あつた。順藏は秋田へ行つて、森田の家で起き臥しをするやうになつた。が、大體ふところつ兒で甘やかし放題に育てられてゐるので、我儘で、手敷の掛ること夥しかつた。其の代り肝が太くて、親の膝下を離れても格別辛い顔もしなかつた。來た日から順藏は平氣で大飯を食つた。が家に居る時の習慣で、魚は骨を取つて遣らなければ食へなかつた。初めは森田の妻女が骨を取つて遣つたが、何時迄



平福穂庵筆 虎乳

河原田次重氏藏



も人に委せてゐるので、或る日妻女が、

「十三にもなつて、魚の骨を取つて貰はねばならぬやうなことではいけません。自分で取つてお上んなさ  
51

と小言を云つた。すると順藏は黙つて魚を眺めてゐた。細君は仕方がないので又骨を取つて遣つた。

そんな風だけでも、學問は優れて出來た。學問の傍ら畫も習つた。重に畫譜類の物を手本にして稽古した。或ひは京都へ行つた人が土産に持つて來た新畫などを借りて、それを模寫したりした。畫譜の中では「公長畫譜」の影響が最も強く現はれてゐた。

順藏は十五歳の時分にはもう立派に一人前の繪を描いた。既に筆墨老成して、少しも乳臭を帯びた點は無かつた。其の頃南部藩に鈴木月嶺といふ四條派の畫家があつたが、たま／＼月嶺が秋田へ漫遊して、順藏の畫を見て駭いて、手本を畫いて與へたりした。

順藏は十八歳の春迄まる五年の間森田の家に居て其の薰陶を受けた。其の年の春一先づ師の許を去つて郷里へ歸つて來た。が順藏は京都へ遊學したいといふ希望を持つてゐた。其の事を兩親に話すと、父はとにかく、母は、悴を秋田へ遣つて置くのさへ心配で／＼たまらなかつたのに、何百里も離れた京都迄も遣るといふことは頭から不賛成だつた。が、當人が何んでも行き度いと云ふので、其の事を一應森田眠岑に相談すると、眠岑は順藏の京都遊學に大賛成で、

「いつ迄も田舎に居ては勉強が出來ない。本人が京都へ行き度いと云ふなら、出して遣つた方がいゝでせう」



小西皆雲

と言つて反對に文朗を説くのだつた。そこで父親は悴を遊學に出すことに決心して、漸う妻をも納得させた。丁度折よく、秋田西方寺の住職雲窠和尚が、宗祖の大法事で京都の本願寺へ行くことになつたので、順藏と一緒に伴れて行つて貰ふことにした。雲窠和尚は、緇徒の身ではあるが中々畫も善くした。すると、仙臺の南畫家小西皆雲が秋田へ遊歴に来て居たが、これも京都へ同行することになつた。

順藏の母は、可愛い獨り子を初めて長の旅路に出して遣るので、心配は一通りでなかつた。着物の襟へ御札や小判を入れて遣つたりして大騒ぎをした。

文久元年十二月二十八日だつた。順藏は我家を發つて、二人の道伴れと一緒に、雪の深い國を後にして旅路に上つたのだつた。

仙巖峠を越えて南部へ向つた。途中で中尊寺へ参拜した。南部では曾て手本を貰つた鈴木月嶺を訪ね度いと思つたが、同行者の都合で其の暇が無かつた。それから松島日光を見物して江戸へ出た。江戸でも旅宿を取つて見物したばかりで、誰も知名の人を訪ねては見なかつた。江戸を發つて、東海道を上つた。横濱で、順藏は初めて異人を見て珍らしく感じたので、それを寫生して國元へ出す便りの中へ書いて遣つたりした。京都へ着いたのは、文久二年の三月三日だつた。丁度花の盛りだつた。王城の地の繁華な有様や、東山、嵐山の翠色、さては鴨川の水の流れ——眼に觸れる物が悉く感激をもたらし、順藏の胸に若々しい功名心を煽らすにはあなかつた。順藏は間もなく獨りで下宿をして新らしい生活を始めた。

先決問題は、何人かの許へ入門することだつた。

「誰が一番いいだらう？」と、順藏は考へた。

其の頃京都の畫壇には、老大家では鹽川文麟、横山清暉等がゐた。どちらも四條派であるが、文麟は岡本豊彦の門から出て、清暉は松村景文の門から出たのだつた。それに次ぐ者としては鈴木百年、中島來章等の名前が高かつた。百年は松年の父で、圓山、四條の風に文人畫の趣味を加へて一家をなし、來章は圓山應瑞の門下で圓山派の正脈を傳へてゐた。

併し、是れ等の諸派の畫は何れも甚だ振はない觀があつた。それは文人畫の流行に壓倒されてゐるからでもあつた。岸駒、景文、豊彦等の巨匠が相ついで歿した後の京都の畫界を支配するものは、圓山、四條、岸等の派ではなく、文人畫の勢力だつた。文人畫の流行は一代の風潮となつてゐた。順藏が初めて京都へ行つた文久二年といふ年には、文人畫の大家賞名海屋、小田海僊等がまだ存命してゐた。それに續いては中西耕石、日根野對山等が活動の中心となつてゐた。

世を擧げて文人畫の流行に投じてゐる時代だつた。鹽川文麟の如き大家ですら、其の影響をうけて、雲烟出沒霞靄模糊たる山水を描いてゐた。さういふ時代ではあつたけれども、順藏は文人畫に走る考へは無かつた。彼は何處迄も古來の正統の畫を研究しようと思ひ立つた。

京都へ來てから、多くの大家の畫を見たり、其の人を訪問して畫論を聞いて見たりした。が、さて此の人を師と仰ぎ度いと思ふ程の人に出遇はなかつた。或る人が順藏に向つて、

「早く誰れかの門に入つたらいいでせう」と言ふと、順藏が、

鹽川文麟  
横山清暉  
鈴木百年  
中島來章



「私も左う思つてゐたが、一人も思はしい先生が無いので困ります。文麟、清暉はもはや老筆だし、百年、來章等も師匠としたい程偉いとは思はないのです。大體上方の大家は、案外無學な人ばかりで驚きます」と答へたので、さすがに其の人も、順藏の若年に似氣ない見識に一驚を喫してしまつた。

順藏は到頭師匠を取らなかつた。其の代りに、毎日のやうに、諸方の風景を寫生して歩いたり、神社の繪馬を寫したり、寺の什物の古畫を見て模寫したりなどして、古人と自然とを師として研鑽することは怠らなかつた。祇園祭や伏見の祭禮の時には、半紙をふところに入れて町を歩いて、家々で店先きへ飾る名畫の屏風を見ては模寫して廻つたりした。

其の年の秋、順藏は、文池といふ名を改めて、自ら穂庵といふ號をつけた。それは天智天皇の「秋の田の刈穂の庵」の御製から考へ出した名であつた。けれども人は矢張り以前の文池の名で、彼を呼ぶことが多かつた。

學資は、年に二回郷里から音信があるので、其の時托して寄越した。其の二回の音信といふのは、一度は藩の使で、いま一度の方は秋田と京都との間を往復する懇意な商人だつた。學資は相當に豊富だつた。彼は何の心配もなく毎日寫生帳をふところに入れては諸所方々を歩き廻つた。

彼は非常に寫生が得意だつた。だから、人の顔を見て似顔を描くことにも殊に妙を得てゐた。毎日其處らを出歩くので、四條邊の茶屋の女達などはいつとなく彼の名前を覚えてしまつて、

「文池はん〜」

と彼が通ると呼び留めて「あての顔描いておくれやす」と言つて、自分達の似顔を描かせるのだつた。

其の年の秋雲策和尚が流行病に罹つて客死した。小西皆雲は單身長崎へ行つた。穂庵は紀州へ行つて、那智の瀧を寫生して歸つた。

## (三)

郷里では、穂庵が遊學してから一年ばかり経つと、母親が、吾兒戀しさの餘りヒステリーを起してしまつた。彼女は夫に向つて、何んでも彼んでも悴を呼び戻して貰ひ度いと云つて承かなかつた。しまひに太治右衛門も仕方ないので、

「それでは、俺が行つて連れて歸ることにしよう」

と言つて、或る年國元を發つて京都へ向つた。日數を重ねて京都へ着いた。太治右衛門は先づ悴の下宿へ落ちついた。幾年も見なかつた間に急に大人になつた順藏の顔を見て父親は喜んだ。「これだから世間の風にあてなければいけない」と文朗は考へた。積る物語りに夜を更かして、故郷へ安着を報らせる手紙の中にも此の事を書いて、「どうせ來た序でだから緩る〜名所見物でもして、悴と一緒に歸國する」と、言つて遣つた。

當座は父子二人で名所見物に日を送つた。名所も見物してしまつたが、文朗は歸國しようとは云はなかつた。彼は相變らず悴を引張つては毎日方々遊び歩いてゐた。芝居へ行くにも、茶屋小屋へ行くにも、必ず父



子で出掛けた。淀から船へ乗つて、大阪まで芝居を看に行つたりした。

文朗は、大變美男だつたので、實際の年齢よりも餘程若く見えた。それと反對に文池は、幼時の痘瘡の痕が顔に残つて一面に白あばたがあつて、醜い顔ではなかつたけれども、自然容貌が老けて見えた。だから二人を父子と見る者はめつたに無く、大概のものが兄弟だと思つてゐた。

「文池はんのお兄いはんどすか」

と言はれると、文朗は喜んで、すつかり兄貴氣取りで、文池を引つ張り廻して歩いた。

文朗は京都が面白くて、故郷で、夫と悴の歸國を一日千秋の思ひで待つてゐる妻の事は忘れてしまつた。

國元では、今度は悴の學資金のほかに、親父の滞在費までも送らなければならなかつた。

文朗は非常な大酒家だつた。悴の穂庵も父に劣らず飲んだ。親子はいゝ飲み相手でもあつた。或る時も國許の商人で平藏といふ男が京都へ仕入れに来て、平福親子の宿を尋ねると、文朗は喜んで毎日平藏を相手にして飲んで暮した。併し平藏はもう仕入れも済んだので國元へ發足しなければならなかつた。いよゝゝ出發といふ日は、宿で十分に飲んで文朗が途中まで見送ることになつた。一緒に宿を出て、三條の橋の手前迄來ると、文朗は立ち止つて、

「平藏さん、お前此の家を知つてるか」

と言ふ。見ると飲み屋である。

「否え、存じません」

「さうかへ、ぢやあ一寸寄つて見よう。此の家の酒は評判の良い酒だ。灘の生一本の酒なんかは國へ歸つちや飲めないから、飲んで行きなさるがいゝ」

と言つて文朗はすんゝ先きに立つて其の店へ這入つてしまつた。平藏も後から續いて這入つた。

「何んと平藏さん、いゝ酒だらうが」

「結構な御酒ですな」

「さあゝ、遠慮なく飲んでおくれ。恁んなのは國へ歸つちやあとても飲めないから、澤山飲んで置きなさるがゝ」

其處でも十分に飲んで外へ出た。橋を渡つて少し行くと、文朗は又立ち止つた。

「平藏さん、お前此の家を知つてゐるかな」

と言ふ。見ると矢張り飲み屋だ。

「存じませんな」

「京都へ來てゐて、此の家を知らないやうでは話せんな。是れは評判のうまい酒屋さ。無論酒も上等だが、とにかく肴が凝つてるよ。一寸寄つて見よう。國へ歸つてしまつちやあ、そんな凝つた肴で飲み度いと云つたつて飲めやしないからな」

と言つて文朗がすんゝ其の家へ這つてしまつたので、平藏も仕方がないから續いた這入つた。酒肴を誂へて飲み始めた。



「なんと平藏さん、酒も良いが、此の吸物はどうだ」

「成る程、是れは結構で御坐いますな」

「さあ、遠慮無く飲んだり」

其處でまた十分に飲んだ。そして二人が表へ出た時には、もう日が暮れかけてゐた。平藏は到頭發てなく、また候宿屋へ引き返して泊つてしまつた。

國元からは便りのある毎に歸國を促がして來たけれども、文朗は一向歸る氣色もなかつた。さうして、悴と一緒に何年も京都で暮らしてしまつた。

穂庵は、或る年、扇面へ狸々を描いて、それを故郷の恩師武村文海の許へ送つた。文海は其の頃は中風を發して口が利けなくなつてゐたが、其の繪を見ると、落涙して、吾が弟子の上達を喜んだ。

其の頃俄かに世の中が騒々しくなつて來た。朝廷と幕府との軋轢は日を追ふて劇しくなり、京都の市中は勤王黨の浪士と、幕府の兵卒や密偵との、争鬪の舞臺と化してしまつた。辻斬り、強盜、暗殺、さういふ血なまぐさい事件が毎日到處で行はれた。文久は三年で改元されて元治となつた。

其の物騒な世の中になつても、平福父子は京都に留まつてゐた。穂庵は相變らず帖面をふところに入れては寫生をして歩いた。暗殺された者や所刑を受けた者の死體が曝し物になると、穂庵は態々出掛けて行つてそれをも寫生して來るのだつた。四條磧に竹矢來を結つて、其の中に幾つも並べて高い處に曝されてある生首だの、町中で大砲にうたれて微塵になつてゐる屍體だの、そんな物の繪まで穂庵は描いてゐた。父の方は

道樂に、市中の落首や流行唄を蒐めて歩いたりした。

さうかうするうちに、王政復古となり、續いて鳥羽伏見の戦争が始まつた。さすがに吞氣な父子の者も、此の上京都に留まつてゐることは出來なくなつた。父子は手に手を取つて、北陸道を通つて、國元へ遁げ歸つた。

それは明治元年の事で、穂庵が國を出てからでは足掛け八年目の春だつた。

當時秋田藩では、尊王黨と佐幕黨との二派があつて、初めのうちは佐幕黨に傾いてゐたが、天下の大勢が定まつて來てからは尊王黨が勢力を恢復して、藩議もこれに一決するに至つた。折しも奥羽鎮撫總督九條道孝、副總督澤爲量、參謀醍醐忠敬、大山格之助等が、大村藩の兵を率ゐて向つたので、秋田藩ではそれを迎へることになつた。官軍は秋田領内の久保田に駐屯して此處を據根地とした。

秋田藩では、總督以下の人々の應接をしなければならなかつたが、何分言葉の通じる者が無くて弱つた。すると或る人が、一角館の平福太治右衛門父子が、最近京都から戻つて來たが、彼等は久しく京住居をした者であるから必ず言葉に慣れて居るであらう」

と言つたので、早速平福父子が呼び出されて通辯の役をうけたまはつた。處が穂庵は繪を描くところから大變官軍の參謀連からも重寶がられて、軍用の見取圖などを描かせられたりした。

世態が一變した。明治政府が樹立されて、天下は太平に歸した。

京都から歸ると間もなく穂庵は結婚した。妻は、せつと云つて、矢張り角館の人で、其の家は綿屋を營ん



でゐたが、せつの父親は非常に親孝行な人でお上から褒美を貰ふこと三回にも及んだ。せつが平福家に嫁いだ時は十七歳だった。

平福家は相變らず染物屋を営んでゐた。穂庵は其の下繪や上繪をしょつちう描かされた、彼は其の仕事が厭で堪まらなかつた。さうかと云つて、畫では獨立の生計は立たなかつた。明治の初期は、依然として文人畫の時代で、奥原晴湖が閨秀の身を以て、貴顯の間に斡旋し、遑健の筆を揮つて一代に持て囃されるといふ風であつたが、其の他は悉く畫運衰微のどん底に沈んで、狩野、圓山、四條等の畫家は、何れも世間から顧る者がなく、立派な手腕を持ち乍ら口を糊することさへ困難な時代であつた。

穂庵は京都から歸つて來ると、畫風が非常に變化した。彼の畫は大體四條派であつたが、其の頃になると初期の南岳や南嶺の風が全くぬけきつて、おのづから一家の風格が具はつて來た。殊に彼は動物を描くことに於て妙を得てゐた。

彼はよく何處ともなく旅行に出た。家に居ると紺屋の手傳ひをさせられるので、それを遁げるためでもあつた。

「一寸行つて來る」

と言つて出た儘、半歳位戻らぬやうなことも珍らしくなかつた。

(四)

太治右衛門は、素より文人肌で、一向に理財の道を知らない人だったので、平福家の家道は何時となく衰運に向つてゐた。殊に明治の代になると、世間の状態が一變して來たので、普通りの遣り方では立ち行かなくなつて來た。其の太治右衛門も明治十年に歿した。

相續人の穂庵は、親に輪をかけたやうな性格で、放縱で、金錢に慾の無い男だつた。

秋田に瀬川といふ實業家があつた。元來は盛岡の人だが、秋田へ來て、鑛山や海産物の事業を經營して、盛大にやつてゐた。其の瀬川が、穂庵の人と爲りを受して常に後援して呉れてゐるのだつた。

或る時瀬川が穂庵に向つて、

「あなたも左うして繪を描いてゐても、繪が賣れなくては仕方がない。一つ、商賣違ひだが、私の處で働いて見る氣はありませんか。相當の月給を差し上げることにはませうが」と言つた。

「御親切は誠に有難いが、私にはとても算盤は弾けません。あなたの店に入れて貰つたところで、何も出來さうな仕事がありません」

と穂庵が言ふと、瀬川は笑つて、

「君に算盤を弾いて呉れとは云ひませんよ。なに、あんたで十分出來る事もあるんだ。まあ、人の相手をして酒でも飲んで呉れりやそれで勤まるといふ仕事なんだ」

「や、そいつは結構ですな。他の事は出來ないが、酒を飲むことなら幾日でも續きます。さういふ仕事があ



るなら是非御採用を願ひ度いものです」

「ではお話しするが、實は函館の店ですが、あすこは中々交際の面倒な土地で、其の方を上手にやらんと非常に商賣に影響するのです。で、誰れか一人適當な外交係りを置き度いと思つてゐたところなので、それにはあなたなら酒は飲めるし、藝はあるし、交際上手だからまことに適任だらうと思ふのだが、一つ函館へ行つて見る氣はありませんか」

と云ふので、穂庵は大喜びで承諾して、函館へ出掛けてしまつた。それは明治十年頃のことだつた。

外交係りとしての穂庵は確かに適任だつた。圓轉滑脱の如才無さもあり、人に好かれても嫌はれる恐れはなく、わけでも京都仕込みで酒席の斡旋は手に入つたもの、端唄も歌へば淨瑠璃も語り、酒は何升飲んでも酔ふことを知らないといふ豪の者だつた。だから瀬川は確かに人を見るの明があつたわけではあるが、生憎な事に穂庵は、それを主人の商賣の上にだけ應用してゐるといふことが出来なかつた。彼は直きにいゝ氣になつて、外交上の必要以外の方へ一層多く發展するやうになつてしまつた。其の結果彼は大きな借金を拵へて到頭瀬川の外交係りを罷めてしまつた。

穂庵は借金で首が廻らぬやうになつて、瀬川の外交係を罷めて了つても、まだ函館にくすぶつてゐた。彼の郷里の家では、穂庵が函館で不始末をやらかして困つてゐることを聞いたので、うちやつても置けなかつた。それに母は、悴が一人前になつた今日でも、未だに子供の時と同じやうに可愛くてならなかつた。そこで借金拂ひの金をと、のへ、母がそれを持つて悴を迎ひに行くことになつた。母は雪合羽を着て、馬に乗

つて、函館をさして出發した。彼女は恁んな旅をすることは生れて初めてだつた。が、氣が張つてゐるので船に乗つても酔はなかつた。

穂庵は母親が行くと、

「よく來て下さいました。折角此處まで來たことだから、緩くり函館を見物して、少し暖かになつてから歸りませう」

と言つた。母も其の氣になつて、半歳ばかり函館で滞在して、暖かになつてから母子二人で歸國の途についた。歸途は、悴と一緒に氣が弛んだせいか、母は劇しく船酔ひをして苦しんだ。母子の者が無事に戻つて來たので、家では人を呼んで盛んに歸宅祝ひを擧げた。

其の後は、穂庵も神妙に畫作をしてゐた。

穂庵が、初めて中央の畫壇に認められるやうになつたのは、明治十四年に、龍池會へ乞食の圖を出品した時からであつた。龍池會は、それより二年ばかり前に初めて生れた美術家の團體で、現今の日本美術協會の前身であるが、創立當時、美術界各方面の大家を網羅して、不忍辨天の社内作品の展觀を催すのが例だつた。それが我邦に於ける美術展覽會の始祖であつた。穂庵の乞食の圖は、意匠卓絶して、筆力超凡なので人の眼を惹いた。會の元老柴田是眞は、穂庵の畫を見て、

「田舎に是れ程の繪かきが居やうとは思はなかつた」

と言つて激賞した。



其の頃から、我邦の畫界の形勢が一變して來た。久しく世人から閑却されてゐた繪畫の趣味が、社會が平靜の状態に戻ると共に急激に復活して來た。諸派の畫家が、俄かに擡頭して來た。只、それ迄獨り隆盛を極めてゐた文人畫だけが、反對にそれを一轉期として没落の悲運に向はなければならなかつた。それは世人の嗜好の循環に原因してゐることは勿論であつたが、同時に米人フェノロサを中心としたところの反文人運動が、社會に與へた影響も甚大であつた。

明治十五年、政府は第一回繪畫共進會を開き、十七年に、其の二回を開いた。

穂庵は、第二回繪畫共進會に、韓清忠の圖を出品して、名譽會員に推薦された。

其の翌年彼の郷里の家は火災に逢つた。其の日穂庵は他所へ行つて、襖の繪を描いてゐたが、其の留守中晝なかに出火して、間も無く全焼してしまつた。穂庵は元の場所へ家を建つるを止めて、玉川に臨んだ町端れの家を買つて移つた。其の家は元の藩の役所だつた建物で、頗る堂々たるものだつた。

竹村篁村  
三森山靜

明治十九年に穂庵は上京した。いよく、彼は中央の畫壇に志を伸ぶる決心をしたのだつた。長男恒藏と門人竹村篁村を郷里から伴れて來て、向島の佐竹家の別邸に滞在してゐた。すると間もなく篁村が脚氣で國へ歸つたので、其の代りに三森山靜といふ門人を呼び寄せた。

穂庵は、磊落な人にも似合はず、門人や粹共に對しては非常に嚴格だつた。だから、明け暮れ師匠の側に附いて居なければならぬことが、弟子の山靜に取つては甚だしく苦痛だつた。それに山靜といふ男は、大變いゝ腕を持つてゐたけれども、我儘で怠け者だつた。兄弟弟子でも竹村篁村のはふは極く温厚だつた。國

で師匠の家に居る時分、山靜は、篁村が温和しいのに付け込んで、一緒に膳に向ふと、篁村の分まで飯のお菜を食つてしまふのだつた。子守をさせられると、子供の持つてゐる菓子を奪つて食つてしまつた。子供は泣き出して、山靜に負はれて外へ出ることを厭がるのだつた。或る時は又恁んなことがあつた。餘所の家の庭に梨の木があつて、それが美事に實つてゐた。山靜はそれを見て食指頻りに動いたが、人の家の果物を盗むわけにも行かない。そこで一策を案じて、飼ひ猿を連れて來て、猿に梨を取らせてそれを自分が食ふのだつた。さういふ腕白な人間なので、師匠は漢學の先生の所へ通はせなければ、彼は怠けてゐて學問は一向勉強しなかつた。だが、繪は達者だつた。それで穂庵も愛してゐた。其の時分は、山靜も女房を持つて、一人前になりかけてゐた。

東京へ來たばかりの時分、或る日山靜は外から歸つて來ると、

「先生、お土産を買つて參りました」

と云つて、澤山の壽司を、包みを開いて師匠の前に出した。

「ほう、壽司だな、どうも有難う。併し何んだな、珍らしい事だな。貴様が私に土産を買つて來るなどといふことは」

「餘り旨さうな壽司でしたから、先生に差上げやうと思つて、わざ／＼買つて參りましたのです」

「さうか、それは感心々々。成る程是れは旨い壽司だ。さあ、お前も食べろ」

「へえ……私は澤山で」



「澤山といふことはない。自分が買つて来たものだから、お前も遠慮しないで食べるが……」

「へい……でも、私は澤山で」

「おかしいな、貴様のやうな大食の奴が、今日に限つて食べられぬといふ法はない。さては食べて来たのだな」

「へい、實は……」

と云つて山靜は頭を掻き乍ら白狀した。彼が今日戻り道に吾妻橋の側迄來ると、路傍に壽司屋があつた。例に依つて腹が空いて來たので、壽司屋へ這入り込んだが、東京の壽司を食ふのは是れが初めてなので、値段をきいてから食はふと思つて、

「壽司は一つ幾らです」と訊くと、

「どれでも五十文です」と壽司屋の亭主は答へた。

「成る程東京は高い」

と山靜は喫驚した。其の筈だつた。秋田邊では其の時分十錢のことを百文と稱へてゐた。だから五十文と云へば五錢のことだつた。そこで山靜は、其の高價なのに駭いたけれども、自分の胃の腑に相談して見るまでもなく、幾ら少くも十個は食はなければ腹の蟲が承知をしない。錢は惜しいが這入つた以上は仕方がないと觀念して、

「では五十錢だけ握つて下さう」

と云つて註文した。待つてゐる處へ、壽司が出來て來たのを見て山靜は再び仰天した。それは鹽ほどのお皿に壽司が山のやうに積み上げてあるのを、兩手で捧げて彼の前へ持つて來た。山靜は驚いて、一體五十文といふのは幾許のことかと尋ねて見ると、それは五厘のことだつた。して見ると百個の壽司が來たのだから澤山ある筈だつた。山靜は一期の勇をふるつて壽司を食つたが、いかに何んでも百の壽司は食ひ切れなかつた。そこで食ひ餘しの分を包んで貰つて、土産に持つて來たといふわけだつた。

山靜は餘程の健啖家だつた。或る時も天麩羅屋へ這入つて、天井を三杯食つたがまだ少し足りないので、四杯目を註文しようと思つてゐると、亭主が呆れた顔をして、

「お前さん國は何處です」

と訊かれたので、極りが悪くなつて止めてしまつた。

そんな男だけでも、山靜は、師匠と二人暮しでゐるのが窮屈で、それに女房もあるので、國へ歸り度くて仕方がなかつた。が、理由も無く歸り度いと云つたところで、師匠は許して呉れさうもないから、彼は一計を案じて、國許の友人に頼んで、「母大病直ぐ歸れ」といふ偽せ電報を打つて貰つた、穂庵は、まさかそれが偽せの電報であらうとは思ひも付かないので、大いに駭いて、即刻仕度をととのへて歸國をさせることにした。旅費も十分に與へたが、彼は弟子の道中を心配して、自分へ宛てた封筒の上書きを何枚も認めて山靜に渡して、途中の何處と何處へ着いたら忘れぬやうに手紙を寄越せと固く云ひ付けて遣つた。山靜の郷里は秋田縣の本庄だつた。其の頃はまだ東北には汽車の便はなかつた。山靜は、それでも殊勝に、云はれた處々か



ら師匠の許へ音信をした。が、其の音信が、山形縣の楯岡迄行くと、後はバツタリ來なくなつてしまつた。山靜は師匠の許を遁げだすことは遁げ出したが、母の大病といふのは元より跡方もない事だから、國へ歸つたところで仕方がなかつた。ちやうど楯岡迄行くと、其の土地に知合ひの人が居て「まあ、暫く遊んで居るがい」と云はれたので、足を留めたのが縁となつて、到頭國元から女房をも呼び寄せて、楯岡に永住することになつてしまつた。

## (五)

穂庵は僅かの中に中央の畫壇で認められた。當時東京で一流の大家と云ふと、是真、曉齋等の元老を除いては、荒木寛畝、瀧和亭、野口幽谷、菅原白龍、松本楓湖、川邊御楯、橋本雅邦、村瀬玉田、川端玉章、平福穂庵、以上十名程で是れを十大家として擧げるのだつた。が其の中でも、雅邦、寛畝、穂庵等が特に頭角を抜いてゐるのだつた。

穂庵は、下谷西黒門町に、一戸を借りて其處へ引き移つた。門構へで、中庭に離室があり、母屋は八疊三つ、六疊と四疊半が各三四室、都合十室位あつて、一見堂々たる家屋だつたが、家賃は六圓だつた。

其の頃、山口瑞雨(米庵)永井一禾等が入門した。

矢張り其の時分の事、或る日穂庵の家の玄關へ突然訪ねて來た男があつた。門人が執次ぎに出ると、「自分は繪を研究してゐる者だが、先生にお目に掛り度い」と言ふ。

座敷へ通して、對面して見ると、年頃は二十三だが、眞つ黒な顔で、垢じみた浴衣を一枚着てゐる。話しをして見ると、秋田市の者で、名前は寺崎廣業と云つて、是れ迄國元で小室怡々齋秀俊に就いて畫を學んでゐたが、穂庵の弟子にして貰ひ度いと思つて上京して來たといふのだつた。

「それは折角のお出でだが、お斷り申す。他人の門人を、先師に斷りもなく、私の門人とするといふわけにはいかなら」

と言つて斷然謝絶したけれども、其の男は是非共門人にして貰ひ度いと言つて動かなかつた。其のうちに日暮れになつて來た。

「兎に角今日は歸んなさい。泊る處が無ければ、小遣ひを上げるから、近所の旅籠屋へ行つて泊つて、又明日お出でなさい」

それでも其の男は動かないのであつた。仕方がないので泊めて遣ふことにした。が、翌日になつても何處へも行かないので、ついずる／＼べつたりと、門人同様にして置くことになつてしまつた。

さうして廣業は穂庵の家に内弟子みたいになつて暮らしてゐたが、秋になると、師匠に向つて、「先生、私は暫く遊歴をして參り度いのですが、どうかお許し下さい」と言つた。

「遊歴もいゝが、あれはやつて見ると中々困難なものだ。家で畫していると違つて腕も達者でなければいけないが、第一風采が肝心だ。乞食のやうな姿をして行つたつて人が相手にしない。まあ、そんな事は見合はせたらどうだ」



と云つて師匠は留めたけれども、廣業は是非遊歴に出度いと言ふ。

「それ程やつて見度いなら、まあ行つて見るがいゝ。が、一體何の方面へ出掛ける積りなのだ」

「野州へ行つて見やうと思ひます。日光へ行つたことがありませんから、あの邊を見物して來たいと思つて居ります」

「さうか、日光を見て來れば無駄ではないな。ぢや體を氣を付けて行くがいゝ」

と言つて穂庵は、自分の袴を出して弟子に着せて遣つた。廣業は、日光をさして出掛けて行つた。

が、一年ばかり経つと、廣業は飄然として舞ひ戻つて來た。相變らず眞つ黒な顔をして、去年の袴を着て戻つて來た。そして再び師匠の家で厄介になつてゐた。

柴田是眞

柴田是眞は、龍池會へ出品した乞食の圖以來、穂庵の畫を推賞してゐた人だが、穂庵が上京してからは、

個人的の交際に於ても極く親しく交つてゐた。是眞は、穂庵の性格を非常に尊重してゐた。其の頃河竹默阿彌の娘島女は是眞の門人として出藍の譽れを得てゐたが、是眞は常に島女に向つて、

「俺が死んだ後は穂庵先生に就いて學ぶがいゝ」

と言つてゐた。それは、一つは、是眞と穂庵との間に性格の共通點があつたからでもあつた。藝術上でも人間の氣分の上でも、餘程似通つてゐた。是眞の人物並びに其の畫風が都會的であるやうに、穂庵は東北の片田舎の生れではあるけれども、性格や作品の傾向は著しく都會的色調を帯びてゐた。

是眞と交際する關係から、穂庵は、默阿彌、團十郎、菊五郎なども親しく交つてゐた。

とにかく是眞は穂庵に對しては特に深切だつた。其の時代の世間の状態として、畫家に與へる潤筆料等は極めて低廉なものでつた。だから一流の大家と雖も皆貧乏してゐた。是眞も矢張り貧乏してゐたが、さういふ物質上の心配についても、穂庵に對してよく厚意を示して呉れるのだつた。其の頃日本橋の榛原の主人は有力な是眞の後援者で、是眞はよく榛原の仕事を引き受けたものだが、榛原の主人は、是眞の長男眞哉に毎月二十五圓の學費を與へて援助したほどだつた。其の榛原から、是眞の周旋で穂庵の處へもよく團扇の繪を頼みに來たりした。

或る時榛原から「かけす」といふ鳥を描いて貰ひ度いと云つて、其の鳥を籠へ入れて持つて來た。かけすは一名かしどりと云つて、野鳥だが、仕込むと人語を眞似る鳥である。其のかけすはよく馴れてゐて、人が側へ行くと「馬鹿ア」などと云ふのだつた。

「いゝ材料だから、お前達かけすを寫生して見るがいゝ」

と、穂庵は門人達に言ひ付けた。三四人の門人が籠のまわりを取り圍んで寫生しやうと思つたが、何分相手は鳥のことで少しもじつとして居ないので、どうやつて見ても形が取れない。一枚も描かないうちに午飯になつてしまつた。みんなで食事をしてゐると、向ふでかけすが、

「馬鹿野郎——」と言つた。

「どうだ、繪は出來たか」

「出來ませぬ」



「見ろ、かけすが馬鹿野郎と云ふぢやないか。一時間も二時間も掛つて一枚も描けないとは何んだ。動いてゐる物だから、よく見て置いて描いて見ろ」

「へえ——」

飯を食つてしまふと門人達は又寫生を始めた。よく見て置いても矢つ張り描けない。それでもしまひにどうやらかうやら描き上げて、

「先生、御覽下さいまし」

と差し出すと、穂庵は眺めて、

「是れぢやあ違つてゐる。此處はかうでなければいけなく」

と言ひ乍ら、筆を取つてチョイ〜と直すのだつた。

穂庵は、非常に寫生に長けてゐた。殊に動いてゐる物の刹那を捉へて、描くことに妙を得てゐた。だから動物の圖は最も得意であつた。

或る時、神田明神の縁日で、穂庵は門人の山口瑞雨を伴れて參詣に行つた。すると狼の見世物があつたので這入つて見た。狼は、檻の中に入れてあつたが、香具師の男は、其の檻の中に竹の棒を差し込んで狼を怒らせて見せた。狼はすさまじく吼えて、飛び付いて來て棒の先に噛み付いた。其の見世物を見て家へ歸つた瑞雨の家は車坂にあつた。師匠に別れて家へ歸る時、

「山口今晚家へ遊びにおいで」

と穂庵が言つた。其の晩瑞雨が出掛けて行くと、穂庵は直ぐと、

「どうだ、狼を寫生して來たか」と言つた。

「否え、描きません」

「何故描かないのだ。繪かきがあんない、材料を見て來て、寫生して見ないといふことがあるものか」

「でも、とてもあんな處は描けません」

「駄目な奴だな。俺は今何枚も寫生して見た處だ」

と言つて穂庵は、猛り立つ狼の寫生畫を何枚も出して見せた。瑞雨が見ると、それは彼の記憶とは少しも違はない狼だつた。

(六)

男世帯なので、暮し向きの事は、時々弟子に金を預けて置いて、それで買ひ物をさせたりなどしてゐた。

金を預けられた者は、買ひ物をした後で、其の計算をして師匠に見せなければならなかつた。と云つたところが、高々三圓か五圓の計算に過ぎなかつた。

「煙草が二十錢でございます」

「よし〜、それから」

「魚屋が二十八錢、米屋が一圓二十錢、それから酒屋へ二圓五十錢、締めて四圓十八錢になります。處で五



圓お預り致してありますから差し引き」と説明し始めると、穂庵は分らなくなつてしまつて頭をかゝえながら「ふうう」と大きな息を吐くのだつた。彼は金の勘定はとも出来ない男だつた。經濟觀念が缺乏してゐるので、餘計貧乏をしなければならなかつたのであつた。

其の或る人の處へ遣つた穂庵の手紙、

毎度御懇情奉深謝候。漸く一昨日襖類出來歸宅仕候。御書面拜見仕候。決して羽折の方旁々に付御心配被下間敷候。其内に都合致し受戻し可申候間、流れに不相成様御高配奉願候。那波氏此頃イツ方に居り候哉奉伺候。一向面會不仕候。御病氣之由如何、折角御保養可被遊候。御見舞に參上仕度候へ共只今車代にも差支無據御無沙汰致居候。不惡御思召被下度候。絹地尺三四の幅、花鳥山水人物中通り畫なれば、一葉の揮毫料三圓位より二圓、一圓半、一圓迄にて先方の好次第に可仕候。但し絹地は別に有之候、來月下旬ならでは出來候事無覺束候。いづれ拜眉の上御嘶し可申上候。烏渡御報並に御伺迄匆々。

一月二十一日夜

穂庵拜

銀海大人

穂庵は可成着物道樂だつた。が、拵へたばかりの着物を一度も手を通す間もなく質に入れてしまふやうなことも珍らしくはなかつた。門人達は始終質屋の使をさせられた。

或る年の暮、穂庵はどうしても百圓の金がなくては年の瀬が越せなかつた。で、毎日俵を乗り廻して百方

金策に奔走したがどうしても百圓といふ金は出来なかつた。萬策盡きてぼんやりしてゐる處へ、池田琴峯がやつて來た。琴峯は當時二流の上の部といふ畫家だつた。

「やあ、どうしたい」

「どうもかうもない、三十五圓なければ年が越せないんだよ」

「俺は百圓なければ年が越せないんで弱つてる處なんだ。で、君は幾らか出來たのか」

「ちつとも出來ない。仕方がないから、夜遁げでもしやうかと考へてるわけなんだ」

「左うか——」と言つて穂庵は考へてゐたが「それでは、茲に三十圓だけあるから、是れを持つてつて遣ひたまへ」

と言つて三十圓の金を琴峯の前へ置いた。

「併し、此の金を借りて行つたら君の方が困るだらう」

「否、俺の處は、どうしても百圓なければいけないんだ。併し君の方は三十五圓で年が越せるといふんだから、是れ支持つて行つたら何んとかなるだらう。此の金で、一人だけでも助かる方がいゝ、構はず持つてつて遣ひたまへ」

と言つて、其の金を琴峯に遣つてしまつて、後で着物を質に入れて琴峯と一杯飲んだ。

其の頃穂庵は東陽堂の仕事を引き受けてはよくやつてゐた。東陽堂は、日本橋米澤町で、主人は東健二郎と云つて、當時唯一の美術出版元だつた。石版刷りの繪や、古畫の複製物などがよく賣れてゐた。繪畫叢誌



も其處から發行されたのだつた。後に穂庵は自分の代りに廣業を其の店へ入れてやつた。廣業は其處で古畫の模寫などをさせられてゐる間に、次第に手腕を認められて來たのだつた。

明治二十二年頃から、穂庵は體の具合が悪くなつた。手足が痺れるやうになつた。醫者から酒を禁じられた。國へ歸つて靜養した方がよからうと云つて勧める人もあつた。穂庵自身も歸國して養生をしたいとは思つたが、また考へて見ると、中央の畫界から退くのも残念だつた。折角得た地歩を捨て、去るのも忍びなかつた。が、體の事を考へると、心配でもあつた。とつおいつ迷つて、決しかねてゐた。

「歸國したのか、東京に留まつてゐたものか——」

それはどうしても自分では判斷が出来なかつた。最後に彼は易を見て貰はふと考へた。それに依つて進退を決する積りにした。

穂庵は、或る時伏羲の圖を描いて、高島嘉右衛門の處へ悴の恒藏に持たせて遣つて、占つて貰つた。すると「雷火豐」の卦が出た。

「非常に好い時である。直ぐに歸國をなさなければいけない」

と高島は言つて寄越した。それで忽ち歸國と事が決して、先づ門人達の身の振り方をそれぞれ始末をして遣つた上で、西黒門町の家を引き拂つて、一時恒藏と二人で東陽堂へ寄寓した。歸國するにしても先立つ物は金である。で、東陽堂から頼まれてゐる仕事を大急ぎで片付けやうと考へたのだつた。併し其の計劃はなか／＼豫定通りには進まなかつた。

仕事も面倒だつたが、全體東陽堂は容易に金を出さないで評判の店でもあつた。穂庵の門人達はよく其の店へ仕事に頼まれて行つたが、朝から晩まで寫し物をさせられて、それで日當三十錢ときまつてゐた。

廣業は其の時から腕が良かったが、それで師匠の代りとして東陽堂へ入社した時、月給十圓だつた。同じ頃、大橋乙羽が、當時は渡邊乙羽と言つてゐたが、十五圓の月給で美術記者として入社した。

其の家には、非常に廣い西洋間があつた。穂庵は其處で仕事もすれば、起き臥しもしてゐた。

「早く國へ歸り度」

と、よく穂庵は弟子などにも言つてゐた。「雷火豐」といふ卦の事がしよつちう氣にかゝつてゐた。が、金が出来ないので、歸ることが出来なかつた。

穂庵は、到頭半歳以上も東陽堂で暮してしまつた。

彼が秋田へ歸つたのは、明治二十二年の十二月だつた。

故郷の自然に親しんでゐると、何んとなく體の具合も良いやうに思はれた。

其の翌年は東京で内國勸業博覽會が開かれる事になつた。穂庵はそれへ出品の目的で乳虎の圖を描いた。其の時彼は荒川鑛山の瀬川の家に行つて描いてゐた。一枚失敗して、二枚目に描き上げて出品した。

其の繪は非常な評判となつた。穂庵が一代の傑作の一つでもあつた。同じ時に、京都の岸竹堂も矢張り乳虎の圖を出品した。竹堂の乳虎も、穂庵に劣らぬ傑作だつた。竹堂は、其の虎に眼睛を入れると同時に、發狂したといふ噂が傳へられたほどだつた。



此の二人の乳虎の畫は、どちらも銀賞を得て、宮内省の御用品となつた。其の時京都の幸野樸嶺が、審査員として出張して来て、穂庵の畫を見て非常に敬服して「是非此の人に會ひ度いものだ」と言つたが、穂庵はもう東京に居ないと聞いて大いに落膽して、其の事を書面に認めて穂庵の處へ寄越したのだつた。

其の年の十月、穂庵は秋田市へ行つて、彼の後援者であつた那波といふ土地の舊家の家作に住まつてゐたが、突然中風を發して反身不隨の状態に陥つた。郷里から家族の者が駆け付けて行き、急を聞いて門人知友の人々も集まつて来て手厚い看病をしたが、到頭恢復することが出来なくて、十二月の十一日といふ日に歿してしまつた。行年四十七歳であつた。

## (七)

穂庵は大酒家といふので評判を取つてゐた。が、平常家では徳利を附けさせるやうなことはなかつた。定まつた晚酌などいふことは決してしなかつた。

「俺は酒を飲み度いと思つて飲んだことはない。が飲めば幾許でもはひる」

と言つてゐた。が餘り大酒をするので、よく母が意見をするので、餘所で飲んでも家へ歸つて來る時には態と酔はないやうな振りをしてゐた。或る時も例に依つて飲んで、歸つて來ると母が、

「又御酒を飲んで來たね」

と言つた。

「否、今日は少しも酔つて居りません」

穂庵は、ごまかした積りだつたが、着物を着替へさせる時、帯を解くと、懷ろへ一杯反吐が吐いてあつた。飲めば、歌をうたつたり、踊つたりして非常に陽氣だつた。隠し藝なども随分ある方だつたが、義太夫には一番凝つてゐて、本式に稽古をして、藝名を餘樂と名乗つて、時々素人義太夫の高座へ上つた。後ろ幕などは自分で繪を描いた立派な物だつた。一體藝好きなので、東京に居る時などはしよつちう芝居を看に行つた。芝居の眞似なども一寸うまかつた。當人それが大自慢で、

「俺が、これで菊石さへなければ、とうの昔役者になつてたんだ」

彼は非常に偉きな體で、二十貫以上目方があつた。色が白くて、顔に愛嬌があつた。眼がグリ／＼して、反ツ齒で、團子鼻で、頭がテラ／＼に禿けてしまつて、そして其の愛嬌のある顔に白菊石があつた。

一番末の女の兒は、よく父に揶揄つて、

「頭に毛の無いはい、けれど、何んで火箸で穴を明けた」

穂庵は此の娘を眼を無くする程に可愛がつてゐた。女の兒はそれが一人だつた。

男子は四人あつて、恒藏、善藏、健藏、貞藏と云つた。長男の恒藏は父と一緒に東京へ行つてゐたが、非常な勉強家で、傑れて學問が出来た。東京へ出た時恒藏は十八歳だつたが、向島の佐竹邸から、朝の三時四時に起きては神田の英語學校へ通つた。傍ら井上圓了の哲學館へ通つて、其處を卒業した後、根本通明の門



に入つた。穂庵は恒藏に大いに望みを囑してゐたのだつたが、惜しいかな恒藏は早世してしまつた。次男の善藏は、父に似て繪が好きだつたが、どういふものか穂庵は「貴様は繪かきにはなるな」と言つた。長男の歿後次男が家督を相續して、其の人は現在實業界に身を入れ、横手織物會社の専務取締役として活動してゐる。

季つ子の娘にだけは甘かつたが、男の子供に對しては非常に嚴格だつた。併し彼は子供が好きだつた。東京へ出てゐる時も、絶えず子供に宛て、手紙を寄越して「勉強をしろ」と言つた。家に居る時は殊に勉強を厳しく言つた。

子供が學校から歸つて來ると、父は自分で机を持つて來て、座敷の眞ん中へそれを据ゑて、

「さあ、復習するんだ」

と言ひ付けた。學校の復習をしてしまふと、直ぐに今度は漢學の先生の處へ遣らされた。漢學の稽古から戻つて來ると、父は又前のやうに机を持ち出して來て、

「さあ、復習するんだ」と言ふのだつた。

四男の貞藏も、幼い時から繪を描くことが好きだつた。貞藏は紙さへあれば繪を描いてゐたが、或る時大きな繪が描いて見度なくなつて、唐紙の裏の白地へ一杯に描き散らした。父が発見したらきつと叱られるだらうと思つて小さくなつてゐると、穂庵はそれを見ただけでも何んとも言はなかつた。それで貞藏は安心して

方々の襖や板戸にまで繪を描いてしまつた。父は矢張り何んとも言はなかつた。

貞藏が學校から歸つて來ると、父は例に依つて机を持ち出して來るのだつた。子供の机を置く部屋は、穂庵の書齋の隣の室だつた。貞藏は仕方無し机に向つてゐるけれど、直きに復習は飽きてしまふので、紙切れを探し出して來て密りに繪を描いてゐた。父は大概机に凭つて書見をするか手紙を書くかしてゐた。貞藏は其の父の顔をこちらから寫生するのだつた。それが面白くて毎日やつたので、しまひには空で父の顔が描けるやうになつた。

平福百穂

其の子が十四歳で小學校を卒業すると、穂庵は初めて自分で手本を描いて與へて、正式に繪を習はせた。其の貞藏が、後年の平福百穂であつた。

穂庵は、非常に似顔を描くことが上手だつた。或る時も郷里の方の懇意な家へ行くと、其の家に可成り年取つた下婢が居たが、片目で、餘程面白い顔付きだつた。で穂庵が座興に其の似顔を描いたところが、非常に佳く出來たので、みんな面白がつて見てゐた。すると丁度其處へ下婢がやつて來たが、皆が何か面白がつてゐるので「何んだらう」と思つて自分も覗き込んで見ると、おかしな顔の女が描いてあつたので思はず笑ひ出したが、よく／＼見るとそれは紛れもなく自分の顔だつた。下婢は急に怒り出して、

「人を馬鹿にしてゐる。私は只今限りお暇を戴きます」

と言ひ出したので、穂庵も大いに弱つて、下婢の前に叩頭して漸く勘辨して貰つたことがあつた。

京都から歸つて間も無い頃、穂庵は或る人の依頼で四條河原の納涼の圖を描いた。それは彼が記憶に残つ



てゐるところの實景に據つて描いたのだつたが、其中へ豆のやうに描きこんである、無数の人物の中の一  
人を郷里の人で、京都へ仕入れに行く商人某の似顔にして描いてあつた。それが一見して其の人であること  
が知れるので、人々は其の才に驚嘆したのだつた。此の圖は穂庵が若畫きの中でも、傑作の一つとして残つ  
てゐる。

明治十年函館滞在中は、瀬川の威光で融通が利くので、彼は大いに狹斜の巷に出没したものだつたが、其  
の時彼が馴染の藝妓で、函館切つての流行つ兒であつた女の肖像畫を、浮世繪風の密畫に描いた。婉曲な筆  
致の中におのづからの氣韻が現はれて、浮世繪とも異ふ妙趣があつた。

穂庵はよく人に向つて「俺の嫌ひな物が三つある」と言つた。何と何が嫌ひなのかと聞いて見ると、手紙  
書くこと、扇面描くこと、それと蒔蕪が嫌ひだと云ふのだつた。妙な取り合はせだと思つたが、蒔蕪は生得  
嫌ひだつた。扇面を畫くことは、嫌ひだ／＼とは云ふが、描かせれば人よりも上手だつた。手紙を書くこと  
も上手だつた。が、これは何故嫌ひになつたかと云ふと、大概用件が借金の申込みとか、或ひは返済の云ひ  
譯とかいつたやうな種類ばかりだつたので、嫌ひになるのも道理であつた。

平福家は、文朗と穂庵と二代續いて費消つたので、穂庵の代の晩年に至ると殆んど一物も残らぬやうにな  
つてしまつた。穂庵は、東京へ出て大名を成してからでも、一文も郷里へ仕送りをしたことはなかつた。郷  
里の家は彼の母が中心になつて、彼女自身で手を下して染物をやつてゐたが、そんなことでは生計は立たな  
かつた。それでもどうやらかうやら維持することが出来たのは瀬川、那波などゝいふ穂庵の後援者が最後迄

よく面倒を見て呉れたお蔭でもあつたが、併し、彼の母は睨りした婦人だつた。それについて恁んな逸話が  
あつた。それは穂庵が東京から歸つて、久し振りで郷里の角館へ落ちついた頃は、彼の畫名もあがつてゐる  
ので諸方から畫の依頼があつた。収入も相當にあるので母親も喜んでゐた。穂庵自身も、永年母に苦勞を掛  
けた其の償ひに、勉強して繪をかいいて、老後の母に幾分でも孝養を盡したいといふ氣持があつた。するとそ  
こへ或る書畫屋が来て、數十金を持參して、穂庵に百枚の半折を依頼した。當時其の數十金は穂庵の身に取  
つて大金だつた。彼はそれを引受けて、其の金を母に見せた。すると母は喜ぶと思ひの外、意外の不興で穂  
庵を誂めた。

「いかに貧乏して金が欲しくても、ピラ繪や紙寫繪のやうな、數でこなすやうな根性を持つな。お前も繪か  
きだからには、一枚でもよいからほんたうにいゝ繪を描くがよい」

と言つて其の金を返させた。穂庵は頭を搔き乍ら愧ぢて素直に命に従つた。母はさういふ人だつた。が矢  
張り、貧乏に適應することは下手な方で、不用の物を賣り拂ふことはしないで、貧乏してゐる中でもよく物  
を買ふのだつた。或る時家に一錢も金が無くなつた。すると彼女は簞笥の抽斗から、佛壇長火鉢の抽斗と家  
中の抽斗を引き抜いて、

「少しはお金が出さうなものだ」

と言つて探してゐるうちに、何處かゝら一圓札が一枚出て來たことがあつた。其の程度の貧乏だつた。

穂庵は、平常は極く磊落だが、畫作の場合になると、非常に謹嚴で、そして怒り易かつた。東京に居た時